

デモンスレイヤー

蛮鬼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

正義も悪も、善も邪も関係ない。

例え總てが変わろうとも、この身一つが見知らぬ異境へ放られようとも。

私は――デーモンを殺し続ける。

目 次

1.	繰り返しの果てに	1
2.	異境へ	8
3.	慈悲などはなく	22
4.	序章は終わり、そして	32
5.	そんな装備で大丈夫か？	38
6.	尖兵	51
7.	やはり私は貴様らを殺す	63
8.	殺戮者たちの再会	81
9.	語り	92
10.	犯し、襲い、冒せ	106
11.	鬼たち	122
12.	勇者訪問	142
13.	小鬼狩りの夜	161
14.	魔を以て魔を制す	177
15.	大失敗	192
16・5.	色のない悪夢	204
17.	霧を進むもの	213
I F :	死と謎と狂気と悪意と	228
18.	霧の先にあるもの	239
19.	塔の騎士	249

# 1. 繰り返しの果てに

——いつからだろう。自分がこうなつてしまつたのは。

色のない濃霧。デーモン。魂喰らい。

ソウル。ボーレタリア。オーラント王。

そして——デモンズソウル。

『裂け目』と呼ばれる穴を潜り、亡びた北の大國へ足を踏み入れたのが最初であった。

はたしてそれが、一体どれほど前のことだつたのかは覚えていない。

掛けた歳月は膨大を極め、それを幾百幾千幾万と繰り返してきたのだから、たつた一度きりの出来事がいつのことだつたのかなど覚えている筈もない。

そう、繰り返している。この世界は繰り返しているのだ。

時に善行を為し、多くの人々を救いながら魔性共を屠る道を進んでも同じ。

時に悪逆に墮ち、数多の血と臓物を撒き散らしながら立ち塞がる一切を滅ぼしても同じ。

善も悪も関係なく、事を為せば再び世界は逆に戻り、またあの神殿の中心部にて召喚されるところからやり直し。リストア

どれほど強くなろうとも。どれほど多くの敵を屠ろうとも。

どれだけ多量のソウルを喰らおうとも。どれだけ膨大な武具宝物を手に入れようとも。

世界は変わらない。総ては再び一へと戻り、繰り返される。

「……これですべて終わりました」

ばしゃり、ばしゃり——と。

水をはじく音を鳴らして、彼女がゆっくりと進み来る。

彼女——黒衣の火防女は私の近くにまで寄ると、傍らで輝く大樹の

光に顔を向け、その蛹で塗り潰された双眸にてソレを捉える。

「デーモンを殺す方、あなたは、このまま上に戻つてください」

常に携え、手放すことのなかつた錫杖を捨て、何かを求めるように両手を泳がせ、その光のもとへ進む。

「もう、楔があなたを繋ぎとめることはありません」

幾度となく聞いたこの言葉。

永く果てしなかった旅の終わりを告げるその言葉は、かつて聞いた時と一字一句と違わない。

故にこれもまた、かつてと同じ繰り返しに過ぎないのだと、改めて実感させられる。

“獸を再び微睡みへと導く”——最初にこの場へやつて来た時、彼女が口にした言葉だ。

後に知つたことだが、黒衣の火防女はかつて、もつとも古いデーモンの1つであつたらしく、何らかの故あつて、古い獸を眠りへとつかせるべく私に協力したらしい。

見方を変えればつまり、私は彼女に利用されていたと言つても過言ではないが、愚かにも人の身でデーモンに挑み、死した身の上としては、利用される形とはいえ復活させてくれた彼女に對して、感謝を述べこそすれ、不満を口にするのは間違つているだろう。

(もつとも、それは終わりへ至れたからこそ口にできる言葉ではあるが……)

そして終わりさえもほんの一瞬のものであり、もう間もなくして世界は再び繰り返されるだろう。

これまでと同じく、何事もなく、ただ変わらぬ始まりへと回帰するために。

「私は、獣と共に久しく眠り、私たちがあるべき姿にかえりましょう。あなたは、このまま、あなたたちの世界に戻つてください」

口にされる言葉は、やはりこれまでと変わらぬもの。

もはやうんざりするほど耳にした別れの言葉に悲愴、悲哀の思いを抱くことはない。

あるのは苛立ち。憤怒には届かず、怒りに至る一歩手前程度でとどまつた、少しばかりの灼熱。

戻れるならば戻りたい。だが、帰つたところでまた振り出しに戻るだけだ。

私は繰り返しを知覚できている故の苦しみがあるが、お前や他の者たちはそれすらも知らぬまま、ただその流れに翻弄されているだけではないか。

これではまるで人形劇。いや、役割演技<sup>RPG</sup>遊戯ではないか。  
与えられた役割をこなし、終わつたらまた始める。

延々と終わらぬ遊戯の如きこの世界に、何の違和感も抜けぬまま在り続けることしかできないのか――！

「……どうしたのですか、デーモンを殺す方？」  
「……もしも」

その感情を制御できるほどの余裕は失われ、私はただ感情のままに言葉を口にする。

「もしも、次の世界が、今までと違う形で始まつたのなら……お前は、どうするのだ」

「……」

火防女は、何も答えない。ただその首を小さく傾げ、不思議げな表情——のようなモノを浮かべるだけだ。

当然の反応、と言えよう。

繰り返しを知覚できる私と違い、彼女はそれを知らずに役割をこなす演者<sup>NPC</sup>の如きもの。

流れに身を任せるしかない者に、その違いを知れと言うこと自体が間違っているのだ。

「……何でもない。今の言葉は、忘れる」

故に私は、すぐさま先の言葉を取り消す。

この場でこんなことを言つた程度で何かが変わる筈もなし。  
なれば、いらぬ心残りを残させぬまま、使命のままに送つてやるの  
が手向けというものだろう。

そう言つて踵を返し、彼女の言葉に従つて上へ戻ろうとして、

「……あなたの仰る言葉の意味は分かりませんが、もし……」

ぴたり——足がその場で止まる。

「もし、そんなことがあるのなら……私は——」

私は——。

\*

世にも奇妙な鳴声を上げ、木々の軋む音と共に巨躯が霧の海へと戻っていく。

『古い獣』——色のない濃霧を生み出し、デーモン共を世に放つた最悪の怪物は、再び微睡みの内に沈むだろう。

腹の内に抱えた娘と共に、次の目覚めが来るその時まで——。  
——と、本来ならそんな形で終わる筈なのだが、この世界には繰り返しがある。

眠りに就かせて終幕へと至ったのなら、また始めからやり直されて  
2度目、3度目の旅が始まる。

いい加減飽き飽きした展開ではあるが、ここまで来るともう何かを  
思うことすら馬鹿馬鹿しく思えてくる。

いつだつてそうだ。どんな展開になろうとも、結局、やることなど  
変わらない。  
デーモン  
敵を屠り、デーモン  
障害を除き、デーモン  
厄災を阻み、そして――。

「――デーモンを、殺す」

私にできることはそれだけ。それが今、私が一番得意とし、同時に  
私がやらなければならないことなのだと。

そう心内にて、己自身に言い聞かせるように呟く。

きつとそうでもしなければ、私は己自身の存在意義が何なのかさえ  
分からなくなり、死とは異なる破滅を迎えることになるだろう。  
生きながらにして死している、とは誰の言葉であつたか。  
とにもかくにも、まずは上にあがらねば。

上に戻り、時を逆しまに戻され、また最初からやり直す。  
いつか来たる変化の時。

いつか来たる異なる始まりを迎えるべく。

私はこれまでと同じく、同じ道を進み行く。

――かくて獣は、娘と共に霧の海で再びのまどろみに至り  
ボーレタリアから、デーモンと、ソウルの業が失われた  
だが、奪われたソウルは既に戻らず

拡散する世界は、新たなる「要人」を必要としていた  
人ならぬ力を得た戦士を

——そして

人ならぬ力を得た戦士を欲していたのは、その世界だけではないことを

この時はまだ、誰も知らなかつた——

\*

むかし、むかし、今よりも星の灯がずっと少なかつた頃。光と秩序と宿命の神々と、闇と混沌と偶然の神々の、どちらが世界を支配するのか。

殴り合いではなく、サイコロで勝負をすることにしました。

神々は何度も何度も、気が遠くなるほどサイコロを振りました。勝つたり負けたりを繰り返し、しかし決着はいつまで経つてもつきません。

やがて、神々はサイコロだけでは飽きてきました。

そこで神々は、駒と駒を置く盤として、さまざまな者たちと彼らの世界をつくりました。

彼らは冒険をし、時に勝ち、時に負け、そして死んでいきます。さまざまな劇ドラマを見せてくれる彼らを、神々は大いに楽しみ、深く愛しました。

もつと楽しみたい。もつと多くの活躍が見たい。

そんな思いを胸に抱きながら、神々は毎日毎日、サイコロを振り続けました。

そんなある時、彼らのもとに別の神が現れました。その神は、ひどく哀れんでいました。

天上の存在の娯楽がために生み出され、多くの悲劇に埋もれ、苛まれている人々を。

娯楽を求めぬその神は、悲哀と憂いの思いから盤上に、新たなる駒を置きました。

置かれた盤をひっくり返す、などという暴挙はいかなる神にも許されません。

だからこそ、その神はそちら側の神々が布く規則ルールに合わせて、世界を救おうとしました。

置かれた駒はすぐには動かせませんが、いつか必ず、すべてを終わらせてくれると確信していました。

過剰とさえ言える自信を抱いての行動だつたからこそ、神はその時気づきませんでした。

いつ、だれが、どの瞬間に投じたかもわからない『1つの駒』が、既に盤の内に置かれていることを――。

## 2. 異境へ

——妙な気分であつた。

体という殻から引き抜かれたような、得も言われぬ解放感と、それを凌駕する脱力感と気持ち悪さとは異なるもの。

あの神殿に召喚されたならば、このような感覚を得ることなどはあり得ない。

それは幾度となく経験してきた繰り返<sup>ループ</sup>しから理解しているし、即ちこの感覚が、今までにない変化であることを証明していた。

だが、彼はすぐには信じなかつた。

淡い期待を抱いた先に待ち受けていたものが、自分の予想に反した、絶望的な代物であつたことなど山のようにある。

期待を抱いて絶望するくらいなら、常に何事にも疑つてかかつた方が万倍マシという結論に至るのにそう時間は掛からなかつた。

故に今回もそう、まずは現状が本当にいつもと異なり変化しているのかを確かめるべく、鳥の嘴にも似た形状の兜の内で双眸を開け、穿たれた覗き目越しに外界を見ると――

「……！」

そこには、世界が広がつていた。

黒真珠の如き夜天と、それを彩る淡い輝きを湛えた星々。

地上の一切を優しく照らす、天上の宝石たちには決して手は届かず。

そして一層の存在感を放つ2つの月に至つては、そのような考え方など……。

「……2つ？」

月が2つ。

待て、月とは本来1つではないのか？ いくら魔境と呼ばれたかの

地でも、遙か彼方の空にまでその影響が及ぶとは思えない。

いや、そもそもこれはどういうことか。何故、自分は今、外にいる？

神殿に召喚されたわけでもなく、今自分がいるのは夜風に吹かれて草が揺れる草原。

およそあの凄惨極まるボーレタリアとは思えぬ、何とも穏やかさに満ちた光景の地であつた。

「まさか……本当に変化したというのか」

あり得ない、と切り捨ててしまうのは簡単だが、それは同時に思考の放棄に他ならない。

現状を確かめ、次に己がどう行動すればよいのか。  
常にそうしてきたからこそ、彼は切り捨てるという愚行を犯すには至らず、まずは状況の整理から始めようとした。

繰り返し。やり直し。時間逆行——否。

転移。拡散した世界。まだ見ぬ異境——是。

あり得るとしたら、ここはまだ己が踏み入ったことのない大地。  
要石が破壊され、遂に至ることのなかつた北の巨人の地である可能性もある。

しかしそれにしては、ここは温かだ。

夜という時間帯から、決して暑いとはいかずとも、少なくとも北と呼ぶにはここは温かに過ぎる。

そのことから彼は、すぐにここが北の巨人の地ではないことを断定し、再び思考の海へと浸かろうとする。

しかしそれを許さぬと、そう遠くない地より絶叫が上がつたのは、その直後のことであつた。

「何だ……？」

響く声は咆哮、あるいは雄叫び。

塔のラトリアで耳にした貴族婦人の歌や、ライデル卿の踏ん張り声——アレはすごく怖かつた——とは異なる、勇ましさからくる声。

しかしそれは、人のものではない。

数多くの存在を相手してきたからこそ判別できる。その声は、おそらくは人外のそれ。

それも邪悪な、明確な惡意を以つて放たれた、下卑者のものだ。こういう手合いにはあまり近づかない方がよいのが吉と、過去の経験から理解しているのだが、何も分からぬこの状況だ。まずは何でもいい、情報が必要というのもまた事実。

「行つてみる価値は、あるか」

進まずして逝くよりも、進んで往くべし。

何も得られぬまま、黙つて立ち止まつているなど死しているも同然。

生きたくば先へ進まねばならぬ。

その思いと共に、彼は片足を一步前へ進め、纏う鎧を鳴らしながら草原の先へと進んでいった。

\*

「——ツ！」

足を進めてそう時を置かずして、彼は目的の場所へと辿り着いた。

そしてその場所を目にした途端、彼は兜内にて目を見開き、小さな声と共に驚愕した。

村だ。村だつたモノだ。

血臭と汚臭、あと僅かに感じる氣色の悪い臭い。

腐れ谷のそれには遠く及ばないながらも、およそ一般村から漂うそれがでは断じてない。

木々に吊るされた大人の骸。

目は抉られ、腸は腹よりはみ出て地に着いている。

その隣で吊るされた女性の骸に至つては、腹から下の部位がなくなつてゐる。

さらに先へ進めば、そこには草木の中に埋もれた骸の数々。無惨にも切り刻まれ、叩き潰されて、今やカラスの餌と化した人間であつたモノの山。

吐き気はない。これよりも凄惨な光景など、幾度も見てきたからだ。

恐怖もない。やはりこれも同じく、これ以上のものを経験してきたからこそだ。

だが、怒りがないわけではない。

凧のように静かで、およそ自分でも不思議に思うほどの冷たい怒りが、心奥より湧き上がつてくるのが分かつた。

「……」

ずるり、と腰に佩いた剣の柄に手を掛け、ゆっくりとそれを引き抜く。

晒された直<sup>ブロードソード</sup>剣の刀身が月光に照らされ、不気味に輝くのを目につつ、彼は周囲をぐるりと見回した。

先の咆哮——おそらくは襲撃者たちのモノ——が発せられてからまだそう時間は経つていない。

死体より垂れる血の乾き具合と、漂う汚臭もまたそれを証明してくれている。

剣を構え、盾を携えたままゆっくりと注意深く歩み進んでいく。  
骸、瓦礫、骸、廃墟、骸、骸、骸——。

いやになるほどの骸の山を目にした後、ようやくその辺りで他とは異なる点を見出した。

否。正しく言うなれば、嗅ぎ当てたというべきか。

「血臭……？」

それもかなり濃い、まだ新しいもの。

この汚臭悪臭漂う廃村の中であつて、なお一層の濃さを誇るその発生場所を突き止めることなど容易く、まして幾多もの戦場と魔境を踏破してきた彼ならば、ひどく造作もないことだつた。

鎧を鳴らして足取りを早め、いち早くそこへ辿り着かんと彼は疾走する。

周囲への警戒を怠らぬまま、剣と盾の柄を一層強く握り締めて先へ先へと進んでいくと、そこで彼を待っていたのは……。

「……これは」

骸——骸の山。

ただしソレは人のものではなく、明らかな人外の骸。

人の子供程度の大きさしかなく、衣服の類も腰につけた布一枚のみ。

顔はない。何故ならばそれらは、總て例外なく首を切断されていたのだから。

そして切断されたであろう首も、そのすぐ傍に転がつていた。  
ソレをまず目にしてまず最初に抱いた感懐は「何だコレは?」だつた。

醜惡な顔付き、尖った鶯鼻、刃の如き長耳。

奇怪な顔付きという点で言えば、腐れ谷に住んでいた腐敗人たちの方が上ではあるが、それでもこんな顔付きの存在は見たことがなかつた。

いや、腐れ谷だけではない。

王城、ストーンファンジ坑道、塔のラトリニア、嵐の祭祀場。

これまでに経験し、歩み進んできたどの異境魔境でも、こんな姿形の怪物は存在しなかつた。

であれば、ますます分からなくなつてきた。

見知らぬ土地。故も分からぬ怪物たち。そして人——。

そう、人だ。生き残りが居るかどうかは分からぬが、少なくともこの怪物たちが来るまでは、この村には人が住んでいたのだろう。

そもそもまともな人間。ソウルを奪われ、理性を失くした亡者と化していたならば、こうも一方的な虐殺にはならないはずだ。

僅かな要素から断定とまではいかないが、可能性として此処は——いや、この地は……。

「——おい  
——ツ!？」

不意に掛けられた一声に、彼は思わず剣を振るつた。

繰り返されてきた途方もない怪物退治の旅。

時間にしておよそ幾百幾千年、あるいはもつと膨大な時間の中で培い、獲得した反射行動が齎した一閃は、声の主の命を確実に止めるべく奔り——そして既のところで停止した。

「……ほオ」

そこに居たのは、小人であつた。

ひどくしわくちゃな顔をした、先の異形共ともそう変わらぬ醜い顔付きの小人老爺だ。

どこか人外じみた風貌と、漂う奇妙な気配。

一瞬また異形の類かと思い、柄に力を込め直したが、冷や水を浴びせられたかのような一瞬の冷静さがその手を再び止め、思考の海へと彼の意識を叩き込んだ。

そしてすぐに思う。もし本当に異形の類ならば、わざわざ声をかけて来たりするものだろうか。

そもそも、本気で自分を殺すつもりだつたら、あのまま背後から一刺すれば済む話ではないだろうか？

そこまで考えると彼は剣の切つ先こそ向けたままだが、発していった殺氣を抑え込み、己に敵意がないことをその老爺に示した。

「あんな紙一重んところで止めるかよ。お前、ンな見た目のわりに相当踏んでるみてえだな」

「……何者か」

「何者? ――はんツ!」

彼の問いかけに対し、老爺は呆れたように顔を顰め、馬鹿にするよう鼻息を1つ吹いた。

「そいつアアレか? お前は敵か? それとも味方かつて意味のヤツか? 」

馬鹿かおめえ、敵だつたらさつきンどこでブツ刺すなり首刎ねつなりしてンだろうが!」

「では……?」

「ああ、言つとくが味方つてわけでもねえぞ。何せわしとお前は初対面、初めて会つた奴同士だからな」

「む、う……」

尤もだ。至極当然のことと言わわれているのは分かるが、妙に腹の立つ言い方だ。

今まで多くの人——特に変人の類についてはそれなりに出会つて來たつもりだつたが、こうも捻くれた性格の相手は初めてだ。

鍛冶屋のエドを硬い鉱石に例えるならば、この老爺は歪んで育つた古木と言つたところか。

だが彼の言う通り、本当に殺すつもりなら先程の一瞬でやれただろうし、それをしなかつたことから、少なくとも此方を殺す気はないことは証明されている。

「……ん?」

老爺に対する疑念が僅かに晴れ、少しばかり余裕が戻つたところで

彼はようやくある1つのことに気が付いた。

己よりも随分と小さい老爺が、抱えるように持つてゐるモノ——それは人間の子供。

氣を失つてゐるのか、その子供——身形と体格からしておそらくは少年——からはこれといった反応がない。

老爺の手で氣を失わされたのか、それとも疲労か、はたまた別の理由でなのか。

とにもかくにも、老爺はその少年を抱えて、この劣悪な廃村から出て行こうとする様子と見るべきだろう。

そして老爺も、彼がそのことに気付きかけていたことを察し、不機嫌そうな顔つきで彼の兜顔をジッと見据えながら言葉を続けた。

「このガキアわしが持つて行く。情けなくも1人つきりで生き残りやがつた奴だが、どうにも根性だきやアあるみてえだからな」「持つて行つて……どうするつもりだ？」

「さあな。そいつをお前に言う義理はねえと思うぜ？」

「……」

確かにそうだが、それでも気にならないと言えば嘘になる。

決して善人といった雰囲気ではないが、少なくとも悪人という類ではなさそうだ。

であれば、少なくともこの少年を遊び半分で殺す、などということはないだろう——と。

そんなことを考えている自分自身に、彼は思わず驚愕の念を密かに抱いた。

“まさか自分が、まだ他者を……それも見知らぬ少年のことを心配しようとは”

果てのない繰り返しの中で、遂に枯れ果てたと思っていた要素ひとらしさが、僅かばかりだがまだ残っていたことに驚き、そして同時に安堵を抱いた。

外見はともかく、既にこの身は■■■■も同然。遙かなる時の中

で、人らしさがボロクズの如く欠け落ちていったものと思つていたが、どうやらまだ、希望はあるらしい。

そんなことを考えていると、少年を抱え直した老爺が「おい！」と大声で叫び、乱暴氣に残つた左手を振り、その人差し指である方向を指し示した。

「この方角の先に行きやア街がある。どんだけ掛かるかについてちやア、お前のその鈍足次第だがな」

「……？」

「あア？ なに呆けたツラしてんだよ、兜越しでも分かるぐらいのアホ面だぞ、お前」

口を開けば罵倒というのは、もはやこの老爺のクセのようなものなのか。

取り敢えずは、好意と受け取つてよいものだろうと思い込み、老爺が指し示した方角をジッと見つめる。

夜闇に覆われ、その先はよく見えないが、何故だか本当に人気が集中しているように感じるのは気のせいか。

何であれ、標となるものが出来たのは幸いだ。

何も分からぬこの土地で、唯一得た情報なのだ。これに縋らぬつもりはない。

万が一に、この醜悪な外見の老爺が虚言を吐いていたとしても、その道中で他の情報を収集して行けばいいだけの話だ。

この廃村については……正直に言うと、もう手遅れだろう。

あの首を断たれた怪物たちも、あれで全部とは思えないが、わざわざ探して殺す理由もない。

既に生じていた怒りも失せ、あるのは未知を既知と為さんとする欲求のみ。

知らないからこそ恐ろしい。故に知らねばならぬ。

おそらくこの老爺に聞いても、先と同じように罵倒と共に遠回しに拒否されるに違いない。

それならば、気まぐれか何かとはいえ、示された好意に従い、この先を進むべきだろう。

「感謝する、ご老体」

せめて己は最低限の礼儀を以て。

纏つた鎧を鳴らしながら、兜を被つた頭を下げて礼を述べると、剣と盾を携えたまま彼は老爺の示した方角を進み行つた。

夜闇に消えていく鎧姿を、老爺はその白眼で見つめながら、やはり不機嫌そうな声音で独り呟いた。

「夜闇の中は魔物どもの絶好の狩り場だつてえのに、躊躇うことなく進んでいきやがつた……。

馬鹿なのか、阿呆なのか、頭空っぽなのか、それとも慢心か……ああ、もしかして全部か？」

何にせよ、わしにはどうでもいいがな——と。

そう言つて老爺も同じく歩を進め、廃村を後にするべく駆けだした。

廃村には既に怪物——小鬼ゴブリンどもの姿はないが、その総てを彼が一掃したわけでもない。

既に多くの小鬼は巣穴に戻り、村の娘どもはきっと今頃、奴らの住処の中でやられている頃だろう。

小鬼というものは愚かだが、馬鹿ではない。

こと繁殖と生存においての厄介さは他の種族を凌駕するものがあり、故に地方の村々にとつては、小鬼こそが最も恐るべき厄災の1つなのだ。

「ま、運が良けりや娘どもは冒険者の連中の手で助けられつかもしんねえがな」

それもきっと、望み薄なことだろう。

そんな言葉を呟いた後、一層足取りを早めて老爺は夜の道を駆けていく。

夜闇を切り裂く一陣の風のように。

荒原を走る獣のように。

ただ早く、速く、迅く――。

「せいぜい頑張つて足搔いてみせろや。鎧ヤロウ」

\*

老爺に言われて進んだ道。最初に見た草原とはまた別の草原を抜け、その先にある山道を登つていた、その途中。

不意に見つけた洞窟。山壁に巨大な杭でも打ち込んで作ったかのようにな存する洞穴。

穿たれた穴は、常人が見つけてもただの洞穴程度にしか思わず、そのまま素通りするかもしれない。

が、彼はそうしなかった。

理由は幾つかある。まず1つは、先の廃村と似た血臭と汚臭が、あの洞穴の中から漂つてること。

2つは、その奥から微かに聞こえる下卑た笑い声の存在。

そして3つめ。これは先に挙げた2つとはまるで関係ない、ごく個人的な理由。

こういう何かありそうな場所は、どうしても寄つてみたくなるものなのだ。

例えこの後に重要な出来事イベントが控えていても分かつていても、ここで寄らねばいつ寄るのかと、そんな強迫観念じみたものが頭の中を巡っているのだ。

「で、あれば……まずは」

まずは武具の選択だ。

洞窟内という場所は、言うまでもなく狭い。長物は勿論のこと、長剣や大斧といった大得物などは中の壁に当たつたりして思い切り振るえないため、基本役に立たない。

であれば、求められるものは小物。

小剣や短刀などの小型武器が好ましい。

ならばと彼は早速今携えている直<sup>ブロードソード</sup>剣を虚空を通して己がソウルの内に収納し、代わって一振りの小<sup>ショートソード</sup>剣を引き抜き、右手で握つて構えた。

そして入口を潜り、洞窟内に満ちた闇の中を進んでいく最中——ソレは現れた。

「GOBGG！」

闇の中より這い出て、襲い掛かるは小柄な襲撃者。

右手に持った粗末な短剣を振りかざし、突き立てんと迫る小人、否ゴブリン小鬼。

小さくも侮れぬ凶刃を前に、彼はまず左手に構えた盾を押し出して、その短剣を真正面から受け止める。

盾の表面をガリガリと短剣の切っ先が削つていく。

これが木の盾や革盾ならどうだつたかは分からぬが、少なくとも彼が携えているのは金属盾。

防いだ瞬間に生じた隙を見逃さず、槍のように構えた小剣を突き出して、ゴブリンの体躯に一刺しを見舞う。

「GORB!？」

突いた場所が急所であったのか、あるいは強化に強化を加えた肉体より繰り出したが故なのか。

最初のゴブリンは背中より地に叩きつけられて、そのまま何を言うこともなく血を流して、そして絶命した。

何と呆氣ないことか。これではボーレタリア城の奴隸兵たちの方がまだ手強いではないか。

だが油断するながれ。暗所には慣れているとはいえ、ここは敵地。その住処。

ましてああいう類は個々の能力こそ低いものの、その厄介さと脅威性はもつと別のところにあるのだ。

そしてそれは、彼を含むボーレタリアの魔性殺したちが最も忌諱し、注意し、恐れてきたもの。

即ち——こういうことだ。

「GORBB！」

「GROOB！」

「GBBROB!!」

やはりか、と彼は兜の内で軽い嘆息を1つ。

個々の力が弱い連中は、大抵数を頼みとして襲つて来る。

先程の個体は功を焦り、逸つたが末に1匹で来たのだろうが、その愚かさをついて容易く倒すことができた。

だが今度は違う。今度の連中は多数。それもそれぞれが剣、槍、棍棒と異なる武具を携えている。

ゴブリン用に自分たちで調整したのだろう、その長さは人間の扱う長物とは比べるべくもないが、それでも槍は槍、長物だ。攻撃範囲が違う。

相手の武具に合わせ、距離を測つて戦うのは戦闘の定石なれば、故に気を付けねばならない。

あまりこうは思いたくはないが、かつては死んでも蘇り、また再戦の機会を得られたが、今回は違う。

少なくとも現在は、復活できるかどうかの保障などは、存在しないのだから。

「シ——ツ！」

迫る三撃、響く下卑た笑声。

見知らぬ土地の最初の脅威を前にして、彼は再びその命を奪うべく、手にした小剣を突き出した——。

### 3. 慈悲などはなく

そのゴブリンは、一言でいえば上機嫌であつた。

今宵襲つた1つの村。そこを壊滅させて得た戦利品は、過去にないほど豊かなものだつた。

食い物も得た。人間を殺して楽しめた。溜まつた鬱憤を綺麗さつぱり晴らすことができた。

だが何より喜ばしいのは、そうち——コレが手に入つたことだ。

「  
「GOR……GOB……!」

ゆさゆさ、と巨躯を揺らすたびに、眼下の乳房が小刻みに上下する。小刻みではあつても、たわわに実つた果実を思わせるほど、豊かに育つたそれは大きく揺れ、その様を見る度に一層ゴブリンは興奮し、さらに腰を早めて打ちつける。

コレだけではない。

洞窟の最奥たるこの広間には、他にも2つほどの孕み袋が横たわつてている。

死んではいない。だが意識もない。

開いた双眸、その瞳に光はなく。まるでこの世にある希望一切を捨て去つたが如き虚ろのみが映し出されている。

それもそのはずだ。

何せ彼女たち三姉妹は、あの村の生き残り。

そして最初にゴブリンたちによつて純潔を奪われた娘らなのだ。ゴブリンどもに雌はない。雌が生まれないよう、そう設定されているのだ。

故に彼らは雌を——他種族の女を見つければ、すぐさま襲つて犯す。

堪えのきく輩であれば、巣穴にまで持つて帰つてそこから楽しむのだろうが、おそらくそんな個体など希少も希少であろう。より屈強な

上位存在に従え、使役されている存在でもない限りは。

「G O B……G O R B……！」

この有り様を見れば、もう察せられるだろう。

この巣穴に、この群れに、ゴブリン共を使役している上位存在はい

ない。

ゴブリンの、ゴブリンによる、ゴブリンどもだけの樂園。血と汚物と淫悦に塗れた、極小の地獄であることを。

そしてこの娘三姉妹らは、死ぬまで彼らに犯され続けるであろう。

人としての尊嚴を汚され続け、望まぬ異形の仔を産まされ続けて、最後には飽きられ、喰われるか、玩具と弄ばれて——死ぬ。

哀れで救われることのない孕み袋……それが彼女らの末路であった。

——彼が来るまでは。

「G O B——？」

きつとその時に至るまで、彼は気づかなかつただろう。

いや、あるいはその時でさえ気づくことがなかつたのかもしけない。

視界に舞う赤黒い液体が自分の血であること。

上下逆転している巣穴の光景が、実は己の首が跳ねとんだが故に起きた現象であること。

そして自分がもう——既に死んでいることを。

こうして彼の一生という劇は幕を閉じた。

愚かで傲慢で、救いようのないその巨躯のゴブリン——俗にいうホ

ブゴブリンは、ここで一生を終えた。ゲームオーバー

暗闇の中で閃いた——一筋の剣閃によつて。

\*

向かいくる緑の激流を文字通り切り開きながら、彼は闇道を進撃し続けた。

鳥の如き形状の鉄兜に、武骨にして無駄のない鉄鎧。

携えるは黄龍の紋を刻まれた盾と、小型の剣。

牙剥く小鬼の刃を盾で受け、あるいは躱してすかさず剣撃を繰り出し、殺す。

時に盾による殴打。時に足で踏みつけ、そのまま骨ごと臓腑を踏み碎く。

徹底的な殺戮、容赦のない蹂躪劇。

しかし数を頼みとするが故に、多くの仲間を有するゴブリンの猛撃は、未だ止むことはなかつた。

「シ——アアツ！」

短い裂帛を伴つて、再び小剣が暗闇に煌めく。

これで一体何匹目だろう。もう20近くは殺した筈だ。

だと云うのに、まだこの怪物どもはやつて来るではないか！

振りかぶられた短剣は時に鎧の隙間を刺し、突き出された槍は胴を通して胸部に強烈な衝撃を見舞う。

だが止まらない。止まるはずがない。

仮にも人外どもを相手し続け、遂には■■■■と成り果てたこの身。

この程度の猛襲で、止まるはずがなかつた。

だが——

ガクン——と体の中から力が抜けていくような、そんな感覚があった。

それに寒い。程度としてはそこまでひどいものではないが、妙な寒さが体を苛んでいた。

「ヌウン——ツ!!」

だが、それでも今は手足を止めるわけにはいかない。

残る怪物どもを小剣と盾による連撃で蹴散らし、その一切を撃滅した後、彼は一旦壁に背を預ける形で腰を下ろし、疲労の色を滲ませた吐息を1つ。

症状は異なるが、これは間違いない毒の類。

疫病はさらなる酷さを有していたことを知っていたから、これはその類ではないことを彼はすぐに理解した。

ならば必要なのはコレ。

虚空に手を伸ばし、それを通して自身のソウルより取り出したるは赤い花弁。

『貴族のロートス』と呼ばれるそれを、彼は兜の下に潜り込ませ、そのまま丸ごと呑み込む。

間もなくして、全身を苛んでいた寒気が無くなり、脱力感も消え失せた。

やはりか、と自身の考察が的中していたことを喜びつつも、彼の視線は既に別のものへと向けられていた。

それは、あの怪物どもが手にしていた武具。

汚れ、錆び付いた剣や槍の尖端に塗りたくられている——得体の知れない液体。

「毒、か……賢しい奴らめ」

おそらく彼奴らの有する総ての武具に、あの液体は塗られているの

だろう。

攻撃を受ける度に毒が体に入り込み、幾度目かでようやく効果を発揮する量に達したとみるべきか。

効きが遅かった理由は、おそらく自分の肉体の性能故だろう。

幾千幾万を超えるソウルの肉体強化、精神強化がもたらした恩恵。人間を超えた肉体の強固さが、あの毒の浸透を抑えていたのだ。

(だが、結果がこのザマだ……)

それでも先程も述べたように、繰り返し受けければ量も増し、いつかは効果を発揮する。

今回はすぐに正体を見抜き、適切な処置を施せたから良かつたものの、次もこうなるとは限らない。

ここから先は慎重に行くべきか、と考えた後、彼は再び起き上がり、剣と盾を構えて闇の先を再進し始めた。

一步、二歩、三歩、四歩――。

先程とは異なり、あの怪物どもからの襲撃はない。

あるいは、もう大部分倒してしまつたのかもしれないが、油断はできない。

一瞬の油断が死を生むことを、あの北の大地で嫌というほどに教えられたからだ。

冷静さを保ち、気配を断ち、慢心を殺して先へ先へと進んでいく。やがて暫くした後、ある変化を彼はその身で感じ取った。

正しくは、嗅ぎ取つたと言うべきだろう。

漂う汚臭と血臭については、もう慣れ始めていた頃だつたからこそだろうか、新たに感じたその臭いは、一層の濃さを以て彼の鼻をついていた。

ひどく臭い、それでいて仄かに甘い、しかし何より氣色の悪いその汚臭。

あの魔境でも滅多に嗅いだことのない類ゆえ、それが何なのかすぐ察せられなかつたが、その答えは、彼が気づくよりも先に自らやつ

て来てくれた。

暗い闇の中で動く、大柄な体躯。

先の怪物どもと同じ緑の肌を持つ巨躯の近くに横たわる、一糸まとわぬ2人の娘。

そしてその巨躯に押しつぶされそうな形で、その腰を打ち付けられている——裸の女の姿。

(一)

その瞬間、彼の中で何かが切れた。  
いや、切り替わったという方が適切だろう。

一瞬脳裏に下卑た笑み——魔境の各地で見られた、あの太った公使どもの顔が過ぎつたが、それに対しても割く意識などは皆無だった。

鎧を纏う体躯を力ませ、全力を以て駆け飛び——一閃。

ただそれだけで緑の巨躯——この巣穴の主たるホブ<sup>ボス</sup>ゴブリンの首は断たれ、絶命した。

だが彼の攻撃は、それだけでは終わらなかつた。

振り抜き、その後に血振りを済ませた彼はそのまま虚空に手を翳し、歪んだ空間を通してソウルよりソレを取り出した。

自身の身の丈を優に超える大振りの刃。

血塗れを残した巨大な刃を備えたソレの、まず峰の部分で巨体を横に吹き飛ばし、すかさず自分も跳んで刃を突き立てる。  
そこから彼が行つたことは単純だ。

叩き、切り。叩き——切る。

まるで巨大な肉を調理するようなその作業は、いつそ狂氣的とさえ呼べるものがあつた。

きつとそこには悪意があり、相手の尊嚴を地の底に落とすまで手を止めないという、ドス黒い意思があつたに違いない。

そうでなくば、わざわざ武器を変え、死んだ相手の骸をここまで辱めるような真似はしまい。

ましてそれが、巨大な包丁を以て行われたことならば、尚更に。

「——！」

はたして幾十度のことだつたか。肉を切り叩く音の後、ようやく彼は我に返つた。

全身を濡らす赤黒い血と、それよりもさらに濃い色で染まつた巨大包丁。

下にはもはや原形をとどめない、そもそも何だつたのかさえ分からぬ肉塊。

状況からすぐに自分が何をしていたのかを理解した彼は、しかし特に何も感じることなく立ち上がり、手にしていた大得物を再びソウルに戻した。

あの大きな怪物を見つけた際に放り投げた小剣を拾い上げ、そして彼の視線は地面に横たわる娘たちへと向けられた。

純潔を奪われ、人として、そして女として尊厳を汚され続けた彼女たちに意識はない。

身を覆う衣服もなければ、まともな食料もないここでは、いずれ寒さに凍えて餓死するだろう。

自分を善人などと思ったことは欠片もないが、かと言つて真正の外道——魂喰らいであることを除く——に堕ちた覚えもない。

幸いにも、自分の筋力は並ならざるものであり、衣服を纏つていないこともあつて、娘らもそう大した重荷にはならなさそうだつたのは皮肉なのだろうか。

取り合えず最初にあの<sup>ホブゴブリーン</sup>大きな怪物に弄ばれていた娘を背負うべく、彼女の傍に腰を落として、その細身に手を伸ばそうとして——

「……？」

不意に耳が、とある音を拾つた。

兜越しでも分かるのは、その人間離れした肉体性能ゆえか。  
音の出所はこの広間。先程あの怪物を吹き飛ばした方角から、その

音は響いていた。

視線を向ければ、そこには無造作に立て掛けられた、大きな木板が数枚。

おそらくどこかの村を襲つた際に奪つてきたのだろう小屋のものだろうが、その裏側から音は発せられていた。

頭の中で警鐘が響く。その木板を碎き、その内側を暴けと啓示じみた声が木靈する。

元より彼の行動は決定していた。

立て掛けられていた木板のうち、真ん中の一枚を蹴り碎くと、先程の音が一層強く聞こえてきた。

それも当然だ。何せそこにいたのは数匹の、まだ産まれて間もないだろう怪物<sup>ゴブリン</sup>の子供がいたのだから。

恐怖に震え、命乞いでもするようにこちらを見上げてくるその様は、まるで強者を目の前にした人間そのもの。

先の光景から察するに、おそらくは攫つた女性の胎で育ち、産まされた子供だ。

子供は親を選べないとはよく言い、そして現在のところ、この子供らに罪はない。

「……」

だが、だからと言つて放置するなどあり得ない。

多くの化生、怪物、魔物の類を見てきた。

そのいずれもが完全なる悪であつたわけではなかつたが、かと云つて完全なる善も存在しなかつた。

この世の全ては中途半端で、本当の意味で白か黒かに成り切れるものは、そう多くはいない。

けれども、だからこそ恐ろしいのだ。灰色は。

中途半端であるからこそ、いざれどちらかに染まる可能性がある。黒のものは白を恐れ、白のものは黒を恐れる。

そして時に白のものが黒となり、黒のものが白となることさえあり

得るのだ。

だからこそ、世界は恐ろしい。

だからこそ、可能性は摘み取らねばならない。

故にこそ――

「――己を怨め」

一切の慈悲もなく。

鉄の殺戮者は、その小剣を振るつた。

異形として産まれた己自身を怨め、と。そんな呪いじみた言葉を送りながら――。

\*

「――はあああ……」

いつもと変わらぬ光景を目にしながら、彼女は深いため息を1つ吐いた。

来る日も来る日も、冒険者たちに依頼を斡旋。

いや、それについては別にいいのだが、問題は他にある。

依頼を斡旋した冒険者たちが、無事にこのギルドに戻つて来なかつたことだ。

依頼未達成で帰還するならまだいいが、そのまま2度と顔を合わせることがなかつたというのも少なくはない。

若年の頃から冒險者ギルドに勤め、既に歳も20を超えた。

流石に新人の頃よりはマシになつたものの、やはりこういうのは堪える。

「……考え込んで、仕方ないか」

それでも仕事はこなさなければならぬ。

朝の斡旋ラツシユは去り、既に時刻は昼近く。

もう少ししたら昼食でも摂ろうかと考えながら、受付台の上で突つ伏していた顔を上げ、姿勢を正そうとしたところで。ソレがやつて来たのは——丁度その直後のことだった。

「……ん？」

何やら外が騒がしい。建物の外で、冒険者や一般人たちが騒いでいる。

何事かと思い、興味を引かれたが、一応仕事中の身なので直接見に行くことはできない。

だが、相手の方からやつて来れば話は別だ。  
ギルドの開閉戸を開け、重い足取りで中に踏み入ってきたのは1人  
——否。

どこで見つけたのだろう粗布で覆われた少女を3人抱え、背負いつつ、その大部分を赤黒い液体で汚した鉄鎧の人物が1人。

周囲の人間が驚き騒ぐのも無視し、ずかずかと躊躇いなく進んでくる彼の姿に僅かに恐怖を抱きつつ、彼女はそこでその人物のことを待ち続けていると。

「……すまないが、この娘らを頼む。外の連中では、驚いているばかりで話にもならん」

非常識じみた外見の鎧姿から発せられた声は、低く、冷たく、しかし確かな理性の色を宿していた。

#### 4・序章は終わり、そして

「——ええつと……つまり、こうですか？」

応接室を開き、相対する形で互いに腰掛けあつた両名。

手元にボードを抱き込むように携えた女性職員は、それまで聞き取り、書き記した事柄に再び視線を走らせながら、眼前に座す人物へおずおずと尋ねた。

「あなたは旅の途中、偶然見つけた洞穴を好奇心から潜り、その中にいた魔物を一掃した後、そこに囚われていた彼女たち3人を見つけ、保護した……と」

「そうだ」

向かいの席に座すその人物は、こくりと特徴的な鉄兜を被つた頭で頷き、肯定する。

ギルドに入つてきた時に付いていた血汚れは既になく、綺麗さっぱり落とされていた。

それ故か、先刻にはなかつた凜々しさが生まれ、同時に彼が有するあらゆる要素が彼女へ向けて叩きつけられていた。

（背丈は180……ううん、190は超えているかしら？

それにこう、威圧感というか……）

達人や強者の気魄、というのはこういうものを言うのだろうか。押し潰されそうな感覚。外見以上の質量と巨大さがあるのではないかと思えてならない、そんな圧迫感。

まるで存在そのものが自分とは比べ物にならない輩であると、そう思わされて仕方がない何かが、眼前の鎧の人物にはあつた。それでも息苦しさを覚えず、ただ若干の緊張程度で収まつてているのだからこれまた不思議なことだ。

「緑の肌に、女性を攫う習性、そして群体……その魔物はおそらく、ゴブリンではないかと思われますね」

「ゴブリン……？」

知らないんですか？ と女性職員は尋ね訊く。

この四方世界に生きる者ならば、誰しもが知る魔物の名前。

最弱の魔物。繁殖と略奪の具現。女の敵。

己が欲に忠実で、どこまでも己のことしか考えない最低の魔物。されど力は弱小であり、故に多くを上位存在の駒なり尖兵なりで使われる下僕存在——それがゴブリンであった。

「ふむ……」

一通り説明し終えると、彼は兜の顎部分に手を当て、考え込むように沈黙した。

聞けば遙か遠方より来た旅人であり、見聞を広めるために旅をしてきたと語っていたが、はたしてどこまでが真実なのか。

「……あの娘らは、どうなっている？」

「え……あ、はい！ 彼女たちについてはご心配なく。既に神殿の方たちが来て、治療を施してくださいっています」

「そうか……」

安堵……しているのだろうか。

兜の内側で吐き出された吐息は、如何なる理由で漏らされたものなのかは分からぬ。

何となく分かるのは、この人が昔はそれなりの地位に居たであろうことぐらいか。

典型的な全身鎧に、龍の紋様を刻まれた盾。武骨ながらも確かな鉄を以て鍛えられたのだろう直剣。

上位とまではいが、そもそも、騎士階級の人間でなくば、こんな上等な装備を纏うことはできないだろう。

(でも、ゴブリンが存在しない国なんてあつたかしら……?)

「…………いた」

「え……はい?」

考えに耽っていたことから、知らぬうちに呴かれていた彼の言葉を聞き逃す。

慌ててもう一度言つてもらうよう頼み込むと、彼は不思議そうに、けれども嫌そうな雰囲気も出すことなく、先程彼女が聞き逃したこと語り始めた。

「犯していた。あの魔物……ゴブリンとやらが、娘らを」「あ……」

その言葉を聞いて、彼女は思わずそんな言葉を吐いた。

考えてみればそうだ。ゴブリンを知らないというのなら、その生態についても無知なのは当然のこと。

竜なりデーモンなりと、人が恐れる怪物は山ほどいるが、他種族を攫い、繁殖の道具として用いる存在はそう多くない。

その代表がゴブリンであり、奴らは他種族の女であれば、それも人型であればほぼ確実に孕ませ、繁殖する。

その行為を目にしたのなら、怒りや嫌悪感などを抱くのもまた当然。

しかし、女性職員の考えとは異なり、彼がその内に抱いていたのは怒りでも嫌悪でもなく——哀れみであった。

「先には言わなかつたが、件の洞穴へ寄る前に、廃村を一つ見つけた」

「それは……」

「ああ。そこに……アレらと同じ輩がいた」

同じ輩が、村を襲つた——。

既に自分が来た時には、その多くが命を絶たれて死んでいた。

おそらくは、あの洞穴にいた連中の仲間であり、残つて余りを漁つていたことであの老人に葬られたのだろう。

魔物が人を殺める光景を、幾度となく見てきた。

魔物に己が殺められる瞬間を、数え切れないほど体験してきた。だが魔物が女を攫い、己の仔を孕ませるために犯す光景などは初めて見た。

あの魔物——ゴブリンに対する負の感情がないわけではないが、それ以上に、この世界がどこまでも残酷なのかを僅かばかりだが実感し、その事実がただただ哀れでならなかつた。

「あんなモノが当たり前ならば……この世界……いや、この地はどこまで残酷なのか。

最弱だが数だけはいるというのなら、そこらでの光景がいつ起こつても不思議ではないということではないか……」

「……」

その呴きに対し、女性職員から言える言葉は何もなかつた。

事実その通りであり、彼のいうあの光景というのも、いつどこで起こつても不思議ではないのが現状だ。

しかし、対処しようにも『最弱の魔物』の呼び名が故か、国はゴブリン程度に注意と兵力、予算を割こうなどとは考えないし、その余裕もない。

ならばと冒険者に頼もうにも、彼らにもまた生活が掛かつており、安いわりに数だけは多いゴブリン退治を選ぶくらいなら、もつと上の魔物の退治を選んでいいてしまう。

故に減らない。故に無くならない。

国や人々の認識が変わらぬ限り、あるいはゴブリンどもがもつと強大な脅威へと成長を遂げぬ限りは、この問題は一生解決することはな

いだろう。

「……失礼をした。くだらぬことを聞かせたな」

そう言つて彼は鎧の体躯を立ちあがらせ、その堂々たる長躯で彼女を見下ろし、部屋を出んと背を向ける。

「あ……」と声を漏らし、反射的に立ち上がったのは、ちょうどその時だった。

自分でもどうしてそんなことをしたのかは分からないし、突然立ち上がつたことに気づき、じつとこちらを見つめてくる彼の視線もあって若干の恥ずかしさがある。

だが、どうしても言いたい。言つておきたいことが、今の彼女にはあつた。

「あ——あの！」

「……？」

——冒険者に、興味はありませんか？

この時、その言葉に誰よりも驚きを示したのは、誰であろう彼女自身であつたことは、言うまでもない。

そしてこの一言が、後に1人の英雄を生む切っ掛けになることなど、この時の彼女は考えもしなかつただろう。

『魔性殺し』<sup>デモンスレイヤー</sup>——辺境最凶。後に都にて無数の魔性を葬り去り、祈らぬ者どもの屍山血河を築く英雄の伝説は、此処から始まつた。

\*

おお、勇猛なるかな魔性殺し

迫る竜の牙を断ち、来たる炎を華麗に躲し

携えし魔剣を喉に突き立て、遂に邪竜は地へと墮つ

巨人も魔狼も何もかも、彼の歩みを止めるに能わず

おお、恐ろしきかな魔性殺し

その背の後に築きしは、魔性どもによる骸の山

屍山血河を築き上げ、冥府魔道を体現せし者

祈らぬ者が如き祈る者、おお、我らが魔性殺し

盤上より奏でられる歌を耳にして、その神は僅かに顔をしかめた。この歌は何だ。一体何者を贊美するべく創られた歌なのか。

分からぬ。分からぬが、何か気に食わない。

だが象が蟻のことを気にすることなどせず、よつて神が1人の人間に對して意識を向けるのもほんの僅かな時でしかなかつた。

それ以上に、彼には喜びの念があつたからだ。

もうすぐだ。もうすぐ自分の駒が動く。

未だ眠り続け、一向に動きを見せなかつた一駒ではあつたが、一度動きを見せたなら、それより先は蹂躪劇の始まりだ。

無限に分かれる枝葉の如く、1つの駒より数多の駒が増え、この盤上を壊し尽すであろう。

隣で《幻想》と《真実》とかいう神が騒がしく喚いているようだが知つたことか。

この世界は間違つてゐる。この世界は悲劇そのものだ。

ならば救わねば、神たる自らの手によつて。

そのためにこれを置いたのだ。未だ滅びぬ己の世界より引つ張り出し、重き自信を持つて置いたコレを。

さあ、起きろ。目覚めの刻だ。

我が愛しき毒の仔よ。世界の悲劇の一切を終わらせよ——。

## 5. そんな装備で大丈夫か？

“冒険者に、興味はありませんか？”

あの言葉を切つ掛けに、冒険者とやらになつて早5年が経つた。白磁より始まり、幾度もの戦いと頼みごとを経て、多くの人と触れ合い、その果てに今の地位がある。

首より垂れ下がるは認識票<sup>ドックタグ</sup>。

眩い銀の輝きを宿し、絶えず煌めき続いているソレは第三等級『銀』の証明。

国家レベルの難事に携わる『金』、そして伝説的存在のみが至れる『白金』を除けば、実質最上位の等級。

現実に、ギルド内ではこの等級こそが一般冒険者たちにとつての最上位であるらしく、金もそうだが、白金に至つては伝説の『勇者』ぐらいいしかなれる者はいないらしい。

よつて、この出来事は意外だつたというか、予想外だつたというか。何であれ、それは彼を驚かせるに足ることだつたには間違いない。

「……金等級への昇格？」

「はい！ 上層部が直接決定し、この度晴れて、金等級冒険者への昇格が可能となりました！」

おめでとうございます！ と太陽のように明るげな一声を以て、女性職員が彼へと告げた。

その声の大きさは発した本人の想像以上のものだつたらしく、周囲に散らばつていた冒険者たちの視線が一斉に集まり、所々でひそひそと話し声が聞こえ始めた。

「嘘だろ、マジかよ」

「金等級つて、確か国からの依頼で動くアレか？」

「より重大な案件を任されるつて聞いたけど……まさかアイツが」

「いいや、寧ろ当然だろう。何せあいつは——」

——『魔性殺し』だからな。

そう、『魔性殺し』。それが今の彼を指す名前だ。

冒険者になつて間もない頃、彼はこの世界にも『デーモン』がいることを知つた。

話を聞く限り、どうもこの世界におけるデーモンとは、『混沌』といふ勢力に属する魔物の一種であるらしく、鋭い爪、蝙蝠を思わせる翼、尖つた牙、そして悍ましき形相などといった特徴を持つ存在であるらしい。

まあ最も、その時は口クに話も聞かずに依頼を受諾し、いざ都にやつて来て見れば出会つた彼らは想像を大きく外れた存在であつたので、ひどく落胆したことは今や懐かしい。

ともあれデーモンはデーモン。デーモンを殺すことこそ、自身の生存の意義であると既に見出していた彼は、そのまま都でデーモンどもを葬り続け、それから来る日も来る日もデーモンたちを相手し続け、骸とえていつたことから、いつしかその称号を冠するに至つたというのが経緯だ。

近頃は『塵殺者』（ジエノサイダー）だの『ヒトの怪物』などと物騒かつ不名誉な渾名まで付けられ始めている故に、いよいよ本業でもある『魔性殺し』の異名を大々的に広めるべきかと考え始めているのだが、まあそれは後回しとして。

「だが貴公、金等級というのは……」

「はい。国家から直接の依頼を受け、それを実行し、成し遂げる冒険者。

見方を変えれば、国家所属の証明とも言うべき等級です

「……私は別に、それに能うだけの功績を出しているとは思えんのだが

「何を言つていますか！　3年前より始めた悪魔殺しを皮切りに、竜殺しや巨人殺し。

強力な魔物の討伐のみならず、幾つもの町村を救い、遂には去年、あの混沌の勢力が一角を率いる魔神将を討ち取つた人物……それがあなたなんですよ！」

寧ろ当然の昇格です！　と誇らしげにその豊かな胸を張り、自慢げに笑みをこぼす彼女の姿は、見ていてどこか微笑ましい。

しかし、去年の、というと彼女が言つてゐる魔神将というのはアレのことか。

やたらデカい団体をしていて、それでいて強力な魔法も行使してきたことから確かに厄介な相手ではあつたが。

（確かあの時は、一緒に戦つた冒険者を囮に使つて後方へ回り込み、デモンブランドで脳天落下攻撃だつたか……）

さりげなく伝説の聖剣を用いて殺めた相手が、まさか敵軍の将が1人であつたとは。

あの時はもう無我夢中でやつていたので、何が何だか分からなかつたが、取り敢えず生き残れたのでそれで良しとしたのは覚えている。実はアレ、敵将とは言つても最弱の方ではなかつたのだろうか？

とは彼の考え方であるが、その真実は文字通り闇の中である。

ともあれ、昇級というのは本来ならば喜ばしいことだ。

冒険者になつて早5年。この世界の言語や文字、文化や知識についてもある程度は深まつていた。

そして昇級すればより高難度の依頼を受けられるようになり、それで得られる報酬も高いことを彼は知つていた。

この体になつて以降、腹の虫とは全くの無縁であり、食事も本当に必要な時にしか摂らなくなつてしまつたが、それでも金銭のあるなしを問われれば『ある』方を選ぶ。

戦うには道具が必要。道具を得るには金が要る。金を得るには依頼をこなさねばならぬ。

故に少しでも金銭を多く得られるのなら、それこしたことはな

い。

い。 いずれ来たる『真のデーモン』のため、備えは幾らあつても不足とはならない筈だ。

だからこそ、今回の昇級も、その方面を考えれば受けるべきなのだろうが。

「貴公、金等級というのは、その……」「え？ ——あ！」

しまつた——と、これほど顔に出す職員もそうはいないだろう。  
思い出したのだ。彼が何故、自分のあの言葉を機に冒険者となつたのか、その理由についてを。

彼はどうにも、デーモンに対して並ならぬ拘りを持つていて。  
あるいは執着と呼ぶべきなのか、ともあれ彼はデーモンを殺すために等級を上げ、必要な等級へと至つてからは、ただひたすらにデーモンを狩り、殺し続けてきた。

時たまデーモン以外の討伐を選ぶのは、彼曰く「情報収集」であるらしく、あくまで本命はデーモンであり、それ以外には大して興味はないらしい。

逆に、彼はデーモンのために多くを費やしてきた。

金や道具は勿論のこと、自身の時間の多くさえも割き、優先してデーモンたちを殺し、屠り、葬つてきたのだ。

故に金等級への昇級が決定した場合、これまでのような自由は保障されない。

いついかなる時もデーモン討伐を、というわけには行かなくなり、時に国家の要請で相応のレベルの案件を任される可能性さえ出てくるのだ。

だから彼は躊躇つていたのだ。金等級への昇級は、自由の保障の破棄。

デーモンを狩るために等級を上げてきた彼にとつてそれは、本末転倒というか、手段が目的化しているというか、とにかく宜しくない件

であった。

「す、すみません。その、どうも勝手に舞い上がつちゃつてたみたいで……」

「いや、気にするな。貴公が悪意を持つて口にしていたわけではないことは、理解している」

その気遣いが余計くるんですよー、という声を心の中にのみ秘めて、彼女は眼前に屹立する鎧の男を見上げた。

思えば彼との付き合いも5年だ。最初に会った時は、本当にどうしようかと思ったものだつたが、今となつては最も付き合いのいい冒険者。

依頼を受ければ必ずこなし、無事に帰つてきてくれる存在。

たまに体が透けて見える時もありはするが、その度に「気のせい」だと彼自身が言つてるので、多分氣のせいなのだろう。

デーモンを殺す者——魔性殺し。  
デモンスレイヤー

いつの間にかそう呼ばれるようになってしまった英雄を前に、彼女はただ、その成長を申し訳なさを抱きつつも、喜ばずにはいられなかつたのだ。

「ちよつとこれ間違つてるわよ！ ワームドラゴンは孵化したての竜、ワームは長虫！」

「ひやいっ!? すみませんっ!!」

後ろの方で発せられた怒声と、それに応じる泣き声じみた若い声。見ればギルドのベテラン職員が、入つたばかりの新人職員の犯したミスを指摘し、それを指摘された新人職員が涙目のまま忙しく駆け走つている。

大変そうだなー、と他人事のように咳く彼女の姿を前に、彼——デモンスレイヤーは同じく新人職員の姿を見ながら、独り言のような調子で彼女に問い合わせた。

「今年は新人が多いな」

「ええ。都での研修を終えて、辺境に配属された娘たちです。

ちよつと今は頼りなさげですが、いつか、このギルドを背負う人材の1人として成長していく思いますよ」

「それは、貴公もそうではないのか？」

「えつと、それは……」

そう問われた彼女は、どこか答え辛そうに目を泳がせつつ、言葉を濁した。

言いたくないのか、それとも言えない理由があるのか。

前者であれ後者であれ、言えないのであればそれでいいと彼は思った。

だが、対する彼女は違う。

長年の付き合いである彼にだけは、滅多なことでは隠し事はすまいと密かに決めていたのだ。

それが自分と彼との付き合い、その先に関わることならば、尚更に。

「その、ですね。私……」

「ふむ……？」

言いよどむ彼女を前に、デモンスレイヤーも不思議げに首を傾げつつ、腕を組んでじっと待つ。

まるで次の言葉を待っているようなその姿勢に、遂に彼女も決心を固め、言えなかつた『その先』の言葉を口にした。

「その……結婚するんです、私

「……ほう」

どうか、と彼の口から出てきた言葉はそれだけだった。

彼女に曰く、都の方に前々から付き合っていた相手が居て、先月、そ

の相手から遂にプロポーズされたとのこと。

近いうちに引っ越して、彼の居る都へ移り住むことが既に決まつて  
いるらしく、従つて「デモンスレイヤー」とこうしていつものやり取りが  
できるのも、そう多くはないのだ。

「都へ引っ越すと共に、私もギルドを辞めて主婦になるつて決めてる  
んです。」

金銭面は彼が上役人ということもあって困りませんし、わざわざ働く必要も無くて……」

「であろうな」

「それに彼、色々と忙しいみたいで、仕事はともかく、家事の方にまで  
手が回らないらしくて」

「使用者でも雇えれば良いのでは？　金については余裕があるのだろう  
？」

「……そういう考えの「デモンスレイヤーさんは、嫌いです」

ふむ……？　とまたも不思議げに彼が首を傾げる。

分からぬことがある時、困った時は大抵彼はこんな感じだ。

デーモンにはやけに詳しくせに、女心についてはまるで分かつて  
いない銀等級の英雄。

まあ、冒険や魔物、報酬にしか興味がない冒険者はこんな感じであ  
ろうが、流石に5年もの付き合いになるのだから、そこは少しは分  
かつて欲しかつたというのが彼女の本音だつた。

つまりは、だ。

好きな男に尽したいという、恋する女性として当然の願いを、彼女  
は内に秘めていたということだ。

「……よく分からんが、とにかく頑張れ。頑張るか、あるいは足搔け  
ば、道はきっと開かれるだろう」

「ああ……はい。分かりました」

全然分かっていないのはあなたの方ですね、と。

誰にも聞こえない声で口にした言葉とは別に、彼女にはもう一つの言葉があつた。

あるいは思い、願望、願いというべきか。

金等級になれば、国の要請にいち早く応えるべく拠点を都に移すかもしれない。

そうなれば、引っ越ししてもまたいつでも会える——と。

恋慕の情とは異なり、しかしそれと比しても変わらぬ深さの友愛を抱く相手に対する願いは、結局口に出せぬまま。

やがて話を終えたデモンスレイヤーの背を見送り、再び仕事に取り掛かった時。

彼女がその時目にしたのは、目元が髪で隠れてよく見えぬ、どこか不愛想な若者の姿であつた。

\*

ギルド内には、工房が一つ存在していた。

ギルドで冒険者登録を済ませた冒険者は、その大部分がこの工房で武具を調達し、そこから晴れて冒険へと向かうわけだ。

壁に立て掛けられた剣や槍、槌、斧。

飾り台に飾られた革鎧、鉄鎧、あるいは衣服にも似た謎の軽装。決して名剣名防具というわけではないにしろ、やはりギルド内に設置されている工房なだけあつてか、相応の出来で仕上がつたものばかりだ。

そんな工房だからこそ、冷やかし甲斐があるというものなのだが、今日はどうやら、既に先客がいたようだ。

「えーと、流石に伝説の剣とかは扱ってない……よね？」  
「そんなもの置いてあるわけがなかろう」

双眸をキラキラと輝かせ、店主の翁にそう問い合わせる青年と、その

青年の問いにうんざりだと言わんばかりに顔を顰めた翁。

毎年よく見かける光景だが、流石にこうも典型的な例を見ると、見ているこちらもうんざりとした気持ちになつてくる。

おそらく——いや、ほぼ確実にあの青年は、今日冒険者登録を済ませたばかりの輩だろう。

こういう手合いは、その多くが英雄譚や冒険譚に憧れ、自分もそつなるのだと信じて疑わぬ馬鹿者ばかり。

見栄えだけ重視し、性能を考えぬ武具ばかりを集め、結局扱い切れず死んでいった輩がはたして何人いたことか。

まあ、そういう手合いが死のうと生きようとどうでもいい。

馬鹿は死んでも治らぬとは極東の国の言葉であつたか。そうでもしなければ治らぬのなら、いつそ本当に死んでしまえばいいものを。と、そんな考えを頭の隅で巡らせつつ、工房内の武具の類を見ていると、その隣をすかすかと通り過ぎていく人影が1つ。

「——装備が欲しい」

「……む」

発せられた声は、年相応の、まだ少年ぽさが抜けきっていないもの。けれどもその声に含まれているものを感じ取ったデモンスレイヤーは、思わずそちらの方へと視線を向けて、じつとその声の主を見つめた。

若い。おそらくこの世界での成年に達したばかりの、15歳程度の男子であろうか。

晒されている両手についた筋肉から察するに、それなりに鍛えこんではいるようだが……。

そこから先は若者と翁のやり取り。

金はあるのか。お袋さんか姉かの財布でもちよろまかしてきたのか。ものはなんだ——。

要求を尋ね、そこからさらに何が欲しいのかと掘り出すように訊ね続ける翁。

その問いかけに淡々と答え、自身が求めるものを明確に示していく若者。

そのやり取りは機械的で、しかしある意味では、冒険者と武具屋との理想の姿と言えなくもない。

先の青年が夢見がちな英雄志望者ならば、こちらの若者は現実のみを見据えた作業者か。

何であれ、どちらが好ましいかと問われれば、デモンスレイヤーとしては後者の方だ。

やがて翁とのやり取りを終えた若者は、まず飾り台から革鎧を剥ぎ取り、続いて壁に立て掛けた円盾も同様の動作で取っていく。冒険者というより略奪者ではないのか、と問い合わせたくなつたが、ここでそんな阿呆な問いは控えるべきだ。

「な、なあ、あんたも今日冒険者の登録をしたのか？」

着替えの途中である彼に、それまで無言にならざるを得なかつた青年が動き、問うた。

だが若者は答えない。答える気がない。

しかし言葉ではなく首肯を以て応じると、青年は幸いとばかりに笑顔を深め、さらに言葉を続けた。

「実は俺もそうなんだ！　その……良かつたら、一緒に冒険へ行かな  
いか？」

「……冒険」

ここで初めて、若者が青年の言葉に対して声を発した。

冒険という言葉が何かの切っ掛けだったのか、発せられた声は妙な重さを伴っていた。

だが青年がそれに気づくことはなく、そして発した彼自身さえもそれに気づかず、話を続けた。

「——ゴブリンか？」

その瞬間——不意にデモンスレイヤーの脳裏に、ある光景が過ぎつた。

蹂躪され、滅ぼされた廃村。

汚臭漂う巣穴。無数の緑肌の小鬼。

そして、小鬼の首領に犯される女の姿。

何故、ゴブリン？　どうしてそこでゴブリン？

討つべき魔物など幾らでも居るだろう。

例え未だ白磁の身であつたとしても、他にも相手すべき魔物はいるだろうに。

そんな考えを巡らせるデモンスレイヤーとは別に、あの明るげな青年は違うと全身を使って否定し、自分はさらに上のだの何だと喚いている。

だがそれを、件の青年は無視し、最後には「俺はゴブリンを退治に行く」と言つて、それきり青年への興味を見せなくなつた。

そこから彼の行動は単純で、まず腰に佩いた剣を抜き、軽い素振りを数回。

感覚を掴むと、次に円盾を腕に括り付け、装備を万全なものへと整える。

そしていよいよそれら一式を購入すべく受付に戻り、翁に金を支払おうと財布に手を掛けたところで——

「——待て」

そこで彼——デモンスレイヤーは初めて、彼に声をかけた。

今まで沈黙していた鎧の人物が、突然自分に声をかけてきたからか、若干ながら驚いているのが見て取れた。

だがそれ以上に驚いていたのは、その先で大きな目玉をギョロリと剥き出すように見開いた翁の方だ。

「貴公、本当にその装備で大丈夫なのか？」

「何がだ？」

「ゴブリングどもは……」

一瞬、そこで奇妙な躊躇いを見せたが、それも言葉通りの一瞬。すぐに彼は先を語るべく、言葉を続けた。

「……ゴブリングどもは、その多くが洞穴などを住処としている。平地でならともかく、狭い穴の中でその刃渡りの剣は不向きだ」

選ぶのなら、小剣を勧めるぞ——と。

自分でも何をしているのかと思ったが、体が勝手に、という程に彼へ助言を述べていくのだ。

自分はこんなことはしない。ここまでお人よしであつた覚えなどはない、と。

そんな彼の思いとは逆に、口は最後まで助言を紡ぎ終えると、その助言を素直に受け入れたらしい若者が、腰に佩いていた長剣を取り外し、小剣に替えるよう翁に頼み始めた。

「……邪魔をした」

何であれ、一刻も早くここから抜け出したかった。

そんな思いと共に、適当な理由をつけて彼はその場から立ち去ると、それに続くように小剣へと取り替え、新たに角付き兜を購入した若者も工房を後とした。

そんな2人の後ろ姿を見送った翁と青年は、片方はニヤニヤと笑い、もう片方はポカンと間抜けそうに口を開いたままだつた。

「な……なあ、おい！ さつきの鎧の奴、何だつたんだ……？」

「あん？ 何だお前、知らねえで辺境へいきょうに来たつてのか？」

全くこいつは、と顔を再び顰めつつも、どこか誇らしげな笑みを湛えて翁は語る。

あれこそは英雄。あれこそは戦士。

真に戦いの何たるかを知り、白と黒の総てを知り尽くした戦人の鑑。

冒険者なれど冒険者ならざるモノ。

祈る者なれど祈らざる者。

辺境に住まい、冒険者たちに関わる者ならば誰もが知る存在。即ち

「あいつこそが辺境最凶。巷で噂の辺境の英雄、デモンスレイヤー魔性殺しよ」

「え——えええええええつ!?」

工房内で発せられた驚愕の絶叫は、はたして如何なる理由からくるものだつたのだろうか。

噂に聞いていた英雄の姿は、想像していたものと大分異なつていたことか。

それとも名高き魔性殺しの英雄が、実は結構すぐ近くにいたことが。

おそらくだが、きっとその両方なのかもしれない——。

## 6. 尖兵

——果たしてソレは、いつ頃に現れたのだろうか。

辺境の地に現出する魔物は、他方の地域とさして変わらぬものばかりだ。

大ネズミに粘菌スライム、トロール——。

時たま思わず大物が姿を見せ、町村に厄災をもたらすこともあるのだが、そんなものはこの世界では大して珍しいことでもない。

だからこそ、ソレの出現もその分類珍しいことでもないに当てはめられてしまつたのは、所謂致命的クリティカルとしか言いようがなかつた。

無論のこと——悪い方での意味合いであるが。

『』

ソレは、この世界に紛れ込んだ異物であつた。

例えるならば菌。この四方世界という軀体に忍び込み、その生命を蝕まんとする病原菌だ。

だが今、ソレに然したる力は存在しない。

存在しない、持ち得ないからこそ、今からソレは力を得んと行動を開始する。

“昨日また小鬼が出ただよ、もうこれで3回目だ”

“オランどこさ、ベコをやられちまつた。これじや仕事さ捲らねえべよ”

“隣村のあの娘が、先日小鬼に攫われたつて話、聞いた?”

“小鬼は女子供を手籠めにして喰つちまうつて話だ……早いとこ、冒険者に依頼さ出さんと”

伝承——確認。

恐怖の根源——『小鬼』

その土地に広まりつつある小鬼ゴブリンの恐怖を汲み取り、獲得した瞬間よ

り、ソレの変化は開始する。

この世の如何なる存在とも似ぬ異形の体躯を歪ませて、ソレは別存在へと進化する。

恐るべき原始のもの。不变の幼体デーモンどもはやがて時をかけ、より真の脅威として成長するだろう。

総ては我らが根源なるモノのため——そこに盤外にて世界の様を見下ろす、真の主への思いなどは存在しなかつた。

\*

「——調査依頼？」

不意に飛び込んできた新しい依頼ニューケーストに、彼は兜内にて若干の驚きを見せた。

名が広まり始めてからというもの、名指しの依頼も随分と増えた。

火山に住まう悪竜の討伐。地下遺跡を根城にする人喰い巨人の撃破。

変わつたところでは希少鉱石や薬草などの採取などもあるが、これらの類については別に何も思うことはなかつた。

だが、今回のような依頼は違う。

調査依頼——俗にいうリサーチクエストというのは、ある意味で一番危険を伴う仕事だ。

調査が主任務メイソン。つまりは、何も分かつていらないというのが現状であり、この類は基本、下手な冒険者に任せられることはない。

「はい。以前にデモンスレイヤーさんがゴブリン討伐をなさつた山岳地帯の周辺で、最近ゴブリンたちの動きが活発化しているとの報告がありました」

普段は子供のような明るさが特徴的な女性職員も、この時ばかりは

至極真面目にして真剣。

歴戦の冒険者もかくやという凜々しささえ醸しだして、依頼書を片手に話を続ける彼女の姿は、なるほど……。

(件の結婚相手とやらが惚れたのも、意外とこういうところやもしれんな……)

「デモンスレイヤーさん？ 聞いているんですか？」

「む？ ……ああ、無論聞いているとも」

「そうですか。……では、続けますね」

以前に依頼で討伐したはずのゴブリンクिंども。

今回は、その奴らが縄張りとしていた山岳地帯周辺に、またゴブリンクिंたちが集まつて悪さをしているというもの。

あの時は残党をのさばらせぬよう、徹底的に、それこそ1匹残らず殺し尽したはずだったのだが、よもや別地域の連中が来るとは。

渡りの群れがやつて来たのか、と考えもしたが、それだけならば調査任務などというものが出てくるには至らない。

「渡りにしろ何にしろ、今回のゴブリンクィンハザード小鬼禍は異常です。

被害規模も、従来のそれの3倍以上は軽く出ており、依頼者の話では、既に近辺の村が2つ滅ぼされているそうです」

「つまりは……この小鬼禍の原因を暴き、確認次第速やかにそれを討滅せよ、と？」

「はい」

つまりこれは、ダブルクエスト二重依頼でもあるということか。

原因を突き止め、暴き次第殺す。

調査能力と技量に優れた者にしか任せられない任務となれば、名指しとなるのも仕方のないことか。

「……分かった。この依頼、引き受けよう」

「ありがとうございます。……あと、すみません。本命の方も忙しい  
というのに、別のお仕事までお任せしてしまって」

「構わん」

くるり、と鎧に身を包んだ長躯を回転させ、背を向ける。

硬い鋼に包まれた彼の背中を見るのはいつものことだが、こんな依頼が来たこともあってか、普段よりも一層の頼もしさを覚えるのは錯覚ではあるまい。

「『デーモン以外の輩に……滅ぼされるつもりはない』

「……はい」

とはいえ、きっと『デーモン相手にも殺されるつもりは毛頭ないのだろう、と。

そんな考えを浮かばせていると、彼の姿はすぐに視界から消え、あとに残つたのはぎいぎいという開閉扉の音のみだつた。

……そう言えば、ゴブリンと言えばだが。

「新人の娘が相手していたあの子、ゴブリンに拘つてたつて聞いたけど……」

何か理由があるのかしら——？

その理由を彼女が知るのは、きっと、ずっと先の話なのだろう。

\*

この西方辺境一帯で起きる小鬼禍は、他方と比べてもそう珍しいことではない。

借り受けた馬を走らせ、半日も掛からずして件の山岳地帯に到着した彼は、近辺の村に馬を預けた後、早速例の場所へと歩を進めた。森の中を進み続け、その最中に姿を現わしたゴブリンどもも決して

少なくはなかつたが、それがこの謎の事件が事実であることの証明ともなっていた。

(これで……30!)

「GORBツ!？」

振り切られた鋼の一閃を受け、汚れた赤黒の液体を噴き出しながら矮躯が地に落ちる。

既に命を絶たれたゴブリンの体を退かすこともなく、容赦なく踏みつけ、まるで道端のゴミでも踏み潰すような感覚で潰しながら、彼は山道の先を進んでいく。

結構長く進んだな、というのは恐らく事実だ。

既に山の周りを半周し、今彼がいるのは隣山の付近だ。

山岳地帯というだけあって、多数の山が在るのは理解していたのだが、実際こうして歩いてみると、そこそこに歩行が必要な場所だと改めて実感させられた。

「……そう言えば、あの若者。ゴブリンを退治すると言つていたな」

ふと、ゴブリンについて考えていると、繋がる鎖を手繕るような形でかの若者の存在を思い出した。

ギルドを出る前、工房にて出会った不可思議な若者。

未だ冒険者としては雛鳥もいいところの輩であるはずが、まるで熟練者のように自身の欲するものを明確化し、それを相手に示して獲得した者。

彼のような白磁は珍しい。大抵は「一番強いの」とか「一番力ツコイイのを」とかと言つてくるものなのだが、硬い革鎧や円盾などと種類を明確化して売り手に問う輩はほんの一握りだ。

見込みはある——というのは、デモンスレイヤー個人の思いだ。とはいえる見込みはあつても、いつどんな時に、どんな理由で死ぬのか分からぬのが世の中というものだ。

世の中、と言えば、自分も随分この世界に馴染んできたな、というのも彼自身の思いだが。

「……む」

しばらく歩み続け、ようやく開けた場所に出たと思ったその時、どこからか轟音が響いた。

それは曇天の内を駆ける閃き。雷が奏でる雷鳴の如きもの。

「……近いか」

それが一体、何者によつてもたらされたかは分からないが、少ない情報というのもあつて、新たに入手した手掛かりを逃したくはない。纏う鉄鎧を鳴らし、その重みを感じさせない速さで彼は再び木々の中へと潜り、先へその先へと突き進んでいく。

やがて再び開けた場所へと至り、そこで彼の瞳に映り込んだものは——3つ。

1つ——壁に穿たれるように空いた洞窟。

2つ——その前で転がるゴブリンの死体。

3つ——今まさに激闘を繰り広げている田舎者ホブゴブリンと、角兜の冒険者。

「——！」

それを視認した時、彼の体は既に動いていた。

腰に佩いた直ブロードソード剣を勢いよく抜剣。

その勢いを乗せたままホブゴブリンを背部より突き刺し、串刺しだす。

「——ツ!？」

その姿を確認し、思わず驚愕に目を見開いた冒険者であつたが、彼

の方もすぐに意識をホブゴブリンに戻すと構えた小剣を大きく突き出し、急所へ必殺の一撃を繰り出した。

「G O · · · R · · · B · · ·」

難ぎ倒される大木の如く、巨体が最期の断末魔を上げながら——倒れる。

ドズンッ！ と短い地震にも似た揺れが襲うが、それは脅威と呼ぶにはまるで足りぬ。

だが、脅威はなくとも収穫はあつた。  
少なくとも、その転倒がもたらした恵みは、彼らにとつては喜ぶべきものだつたのだから。

「G O R B ? G O O O R B B B ツ !!」

転倒したその先。茂みの中を這つていた1匹のゴブリン——この洞窟のゴブリンどもの首領だろう——ゴブリンシャーマンが、巨体が圧し掛かった際に悲鳴を上げた。

聞くに堪えない、汚濁というものを音にしたらこんなものなのだろうと思える声。

顔に刻まれた傷を見るに、どうやらこの冒険者は先にこのシャーマンを相手にし、それから乱入してきたのだろうホブゴブリンとの戦いになり、先程のやり取りへと至つたのだろう。

「——死ね」

そして——殺。

逆手に構えた予備武器であろう短剣を突き刺し、脳を抉つて冒険者はゴブリンシャーマンを殺した。

先の田舎者<sup>ホブ</sup>と同様、多量の汚血を噴き出し、絶命するシャーマン。

その死に哀れみを覚えることはないが、自業自得だと思える程度の

末路ではあった。

寧ろ、この冒險者が1人でアレらを相手していたことに驚いた。

田舎者ホブゴブリンと詠唱者ゴブリンシャーマン——練達者であれば、然して手こずる相手でも

ないが、それを同時に、しかも群れも含めて相手するとなれば話は別だ。

最弱だからとて、数を頼みとするゴブリンならば、時には百戦錬磨の勇士も隙をついて殺すこともある。

特に数の暴力というものの恐ろしさをいやという程に知るデモンスレイヤーは、その原始的脅威を相手になお単独で挑み、最後には協力があつたとはいえ打ち勝つたその冒險者を素直に称賛し、同時にほんの僅かだが恐れた。

「……礼を言う」  
「む。……ああ」

気にするな、と返答するデモンスレイヤー。

自分も決して社交的とは言えないが、今の一言で彼が、不愛想な人間であることを本能的に察した。

というか冷静に見てみると、纏う鎧と手に持つ小剣——円盾がないのと、角付き兜の存在で分からなかつたが、この装備はあの時の若者が買ったものではないか？

そんな考えを巡らせていると、冒險者はすぐに彼へ背を向け、周囲で横たわるゴブリンどもの下へ歩み、その足で乱暴気にひっくり返した。

そして腰に差した小剣を再び引き抜き、その切つ先でゴブリンの心臓部を貫く。

それを1匹、2匹、3匹と続け、確実に絶命しているであろう個体を除く総てのゴブリンの死体に剣を突き立て、完全にその息の根を止めていく。

驚愕はあつた。だが不思議と、嫌悪感は抱かなかつた。

何故ならばきっと、自分も同じことをやつていただろうという確信

があつたからだ。

何故そう思つたのか？ 何故そう信じられたのか？ 答えは不思議と、既に出ていた。

(同じなのか？ この冒険者は、私と……)

どこか機械的な、人外的な部分を備えた冒険者。

微かに見えた首より提がる認識票を見れば、その色は白——  
新米  
白磁等級。

新米でこれならば、一体以前、どのような生を送つっていたのかと疑問は尽きぬが、その疑問に答えてくれる人物でもなかつた。

短めに礼を言い、ゴブリンどもの息の根を止めた彼は再び洞窟内へと戻り、また同じことを次々と繰り返した。

1匹、2匹、3匹と——残るゴブリンも先と同様に心臓や脳を貫き、遂に彼らは洞窟の最奥へと至る。

そこにいたのは、やはりと言うべきか裸の女。

意識を失くし、淫行の残滓とでもいうべきべたついた何かが付着した彼女の体はひどく傷ついており、だが上下する豊かな乳房を見る限り、彼女はまだ生きているようだ。

そして此処がゴブリンの巣穴であるのなら——当然ソレも存在していた。

「……祭壇」

初めてゴブリン討伐をした際には、ただの木板のみではあつたが、後のゴブリン討伐の中で見つけた、ゴブリンどものもう1つの隠し戸。

これを作るのは特にシャーマンがいる群れであることを既に知つていた彼は、その先に何があるのか。何が秘されているのかも察しがついており、故に。

自分と同じかもしれない冒険者が、ソレを壊して秘されたモノを暴

くことも、理解していた。

「G O B……」

やはりそこにいたのは、数匹の幼小鬼。

恐怖に震え、命乞うようにこちらを見上げてくるその姿は、これま  
でに見た同類たちと同じもの。

しかし中には勇気ある者もいるのか、隠しているようで丸見えの石  
を強く握り込み、こちらの隙を伺っている個体も見えた。  
そして――

「――二十一」

冷たく、機械的に紡がれた数と共に、幼小鬼の首が飛び、血潮が噴  
水の如くに噴き上がる。

同情はしない。何故なら自分もかつて、そうして小鬼の赤ん坊を殺  
したのだから。

哀れみもしない。いずれこの小鬼どもは成体となり、より多くの悲  
劇を生む存在となるのだから。

だが、小鬼どもに対しても、彼に対する想いはなくとも、彼に対しても、  
はあった。

「貴公……何故にそこまで……」  
「……」

返事はない。だが、無言こそがこの時にとつて、彼なりの返答だつ  
たのだろう。

『ゴブリンは殺さなければならない』――何故か彼が、そう言つたよ  
うな気がした。

――GOORBB!!

「——ツ!？」

瞬間——洞窟の外より絶叫が聞こえた。

咆哮と呼ぶには下卑、雄叫びと呼ぶのも下卑。

聞くのも堪らぬ騒々しいその声は、間違いなくゴブリンのもの。しかし何だ、この胸騒ぎは。こんな呼び程度でここまで危機を覚えることが、他にあつただろうか！

「ここはまずい……出るぞ！」

「……ああ」

構えた剣と盾を仕舞い込み、横たわる村娘を抱え、全速力で来た道を戻る。

冒険者の方は、決して軽くはない傷を負っているためデモンスレイヤーも手を貸しているが、それでもこの分だと間に合うだろう。

だが問題はその先だ。

この暗い狭道を抜けた先、夜闇が訪れた外の世界に、一体何が待ち受けているというのか。

「そろそろだ——！」

そう遠くない場所に見えた光を見て、デモンスレイヤーがそう叫ぶ。

だがその光の端で微かに見えた『影』の存在を知ると、彼は後ろの冒険者の身を抱き寄せるように引っ張り、村娘共々彼を抱え込む形で飛び出し、外界へと出た。

「GOORRBGG——ツ!!」

刹那の内の判断が生死を分けたというべきか。

彼らが洞窟から飛び出した直後、巨大な塊が岩壁を砕き、穿たれた洞窟は瞬く間に塞がれ、無くなってしまった。

「……っ、一体何者——!?」

ソレを見た瞬間、彼は兜内にて絶句した。

声から外にいるのがゴブリンであることは分かつていたが、本能的危機感を覚えるほどのゴブリンについては、今まで出会つたことがなかつた。

だから気になつていた。それが何なのかを知りたかった。

知りたかったはずなのだが——まさかこんなものが待ち受けていようとは！

「GORB、GORBB！」

「GOB GOB GOOO BBBツ！」

「GO……GORB……GORBBG……」

無数に生えた小鬼どもの体躯。

生物と呼ぶにはあまりに悍ましく、醜惡なる姿。

およそ人の想像とはかけ離れた外見は、人の恐怖を生むため、故意的にそう生み出されたとさえ思えるソレ。

小鬼集合体、あるいは小鬼の集合肉塊。

その姿は、かつて総ての穢れが流れ着くと言われた、とある谷に生まれた怪物と似通う部分があつた。

「小鬼——溜まり……！」

小鬼溜まり——それは、異界の神がこの四方世界という盤に置いた駒。

その駒が最初に生み出した、この世界初の『デーモン』であつた。

## 7. やはり私は貴様らを殺す

「GORB！」

ソレは、ゴブリンなのか。

「GORB！ GORBB！」

きっとソレは、ゴブリンなのだろう。

「GORBG、GORRBGG！」

だがソレは、ただのゴブリンなどではなく。

「「GORBG！ GORBB！ GOOOOOORRBGGツ  
！」」

神の惡意<sup>善意</sup>によつて生み出された、厄災<sup>ゴブリン</sup>であつた。

「——ツ！」

その異形なる姿をして、デモンストレイヤーは兜内で有らん限りに目を見開き、驚愕していた。

この5年の中、少なからずゴブリン共を相手してきた。

近年では本命であるデーモン——自分の求めている『デーモン』ではないが——ばかりではあるが、時たま女性職員への恩返しという体でゴブリン討伐をすることもあつたので、その生態と種類についての知識は未だ健在だ。

田舎者<sup>ホブリーン</sup>、小鬼騎兵<sup>ゴブリンライダー</sup>、小鬼術士<sup>ゴブリンシャーマン</sup>、小鬼英雄<sup>ゴブリンチャンピオン</sup>、そして小鬼王<sup>ゴブリンロード</sup>。

種類数であれば他の種族にも劣らず、数と繁殖力という点であれば他種族を凌駕することこそを脅威性として有しているのがゴブリン

である。

だが焦らず、しっかりとその生態を調べ、先程も言つたように種類を把握しておけば、そう恐るべき敵ではない筈だ。

しかし、その上で――

「こんな個体、私は知らんぞ……！」

「「GORBBBBGッ!!」」

デモンスレイヤーの咳きに反応したのか、小鬼溜まりの無数の目が彼——否、彼らへと向けられ、肉塊じみた剛腕が振りかぶられる。

いかん、と横たわる体躯を無理矢理起き上がらせ、抱えた村娘と冒険者と共にその場から離脱。直後に振り下ろされる剛腕の一撃。

野蛮な剛撃によつて生じた風は、自然の暴威の具現とも見られるほどに強烈であつた。

それこそゴブリンバンク小鬼溜まり——小鬼どもの集合肉塊とも言うべき怪物の巨躯から、少なくない小鬼が剥がれ、吹き飛ばされてしまうほどに。だが、それを見て安堵する輩がいたら大馬鹿者だ。

それは安堵には値せぬ事態であり、寧ろより脅威が増したと見るべき代物であったのだから。

「GOBR！」

「GOOBツ！」

「GORBBBGツ！」

「……つ」

剥がれ落ちた個体が、通常のゴブリンとして独立し、屹立する。

その光景を目にして、さらなる驚愕の色にデモンスレイヤーの瞳が染まる。

まずい——彼が抱いた思いは、その三文字に尽きた。

如何に強大な敵と言えど、単騎であれば一騎打ちに持ち込み、確実に勝利を得られる。

そうやつてきたからこそ、彼はこれまでに多くの戦績を残して帰還し、いつしか英雄と呼ばれるほどの人物に至ったのだ。

だが、そんな彼にも弱点がある。それこそがコレだ。

群体——数の暴力。圧倒的多数こそが、彼にとつての弱点であり、勇猛と謳われた英雄デモンスレイヤーにとつての、生涯最大と言つていい巨壁そのものなのだ。

自身の攻撃、その余波で自身の肉体が崩れていくという点については阿呆としか言いようがないが、それで個体としての性能は低いとはいえ軍隊を生み出せるとなれば……いや。

「そうか……こいつか。こいつなのか……！」

件の調査依頼。

この山岳地帯周辺の村々が滅ぼされる事件。

ゴブリンどもの活性化。

先の性質と、この戦闘能力。そして一見で分かる脅威性——これらを考えれば、その答えはすぐ出てくる。

例のゴブリン活性化による町村の複数滅亡事件、その元凶は小鬼溜まりなのだと！

(だが、どう対処する？ 私自身はまだほんと全とはいえ、こちらには意識皆無の村娘、そして負傷した冒険者が1人……)

「——何をやつている」

ふと、発せられた一声の主はすぐそこ。

自身に抱えられていた角付き兜の冒険者が、蛇のように彼の腕から抜け出すと、その傷だらけの体躯を起き上がらせた。  
続いてデモンスレイヤーが抱えていたもう1人、攫われた村娘を奪うように引き寄せると、革鎧を纏つた背に負つた。

何をしている、と問おうとしたデモンスレイヤーであつたが、それよりも先に彼が口を開き、微かにくぐもつた声を発した。

「俺が囮になり、奴らの注意を引く。

お前はその間に、アレをどうにかして殺せ」

「な……何を馬鹿なことを……！」

死ぬ気か、と続いて発したデモンスレイヤーに、冒険者は「そのつもりはない」とただ冷静に返すのみ。

「過去の経験、そして先の洞窟内の有り様を見るに、奴ら男よりもの方を好みすすんで襲うようだ。

俺もゴブリンに詳しいわけではないが、おそらくその点については本当だろう」

「……」

予想の遙か斜め上の事態故に冷静さを失っていたが、彼のその言葉で思考の熱が僅かに冷めた。

いや、確かにそうだ。あの小鬼どもはその生態上、雌を持たない。雌がない。そして娯楽と快樂を愛する。

故に繁殖のため、自らが楽しむために孕み袋——他種族の女性を攫い、欲望のままに犯すのだ。

だからこそ女性を優先して狙う。女という生き物を、自分の欲望のために欲し続ける。

異形の体躯故にどこかで忘れていたのだろうが、アレもまた、間違いないゴブリンだ。

であればこそ、あの新米冒険者が立てた策こそが最も効果的と見るべきなのだろうが……。

「……できるのか、貴公に？」

「分からん。だが、やらねばならん」

——やらねば、全滅。

満身創痍一步手前の体躯で、冒険者は村娘を負ぶつて駆け走る。

血と鉄臭、そして背負った村娘から発せられる雌の香り<sup>におい</sup>を發して走る彼を、ゴブリンどもが狙わぬわけがなく。

独立した小鬼は勿論、巨大な肉塊たる小鬼溜まりも意識を彼へと集中させ、その汚れた情慾と共に剛腕を、刃を振るう。

これで少なくとも、奴らの意識は自分から外れた。

とはいえたの若者も手負いだ、そう長くは走れまい。

ならば求められるのは短期決着。短時間で、それも奴らに効果的な攻めを以て討ち果たす。

(とはいえ、どうする？ アレの特性は厄介極まりない。下手な攻撃では、数を増やすのみだ……)

群がり固まるその性質は、まるで『ファランクス』か『ヒル溜り』に似ている。

奴らも同じ群体集合体型のデーモンではあったが、この怪物は両者の性質を兼ね備えている。

固まつた群体を1つの肉体として扱い、攻撃してくる点は『ヒル溜り』。

一定の攻撃を与えたる剥がれ、またそれとは別の護衛も有していた『ファランクス』。

アレら自体はデーモンの中でも下位に位置する存在ではあったが、正直それでも、その両者の性質を備え持つ小鬼溜まりは尋常では——

「——備え、持つ」

自分の意識とは関係なく、不意に紡がれたその言葉に、彼の脳内で1つの閃きがあつた。

備え持つ……兼ね備える……両者の性質……良点と、悪点……弱点。

共通、弱点——全体攻撃。炎——そして。

「——！」

浮かび上がった策。最有効の攻撃手段。

短期で、かつ決定的という両方の条件を満たすにはこれしかない。  
そして本当に両者の性質を兼ね備えているというのなら——。

「否——今は思考よりも、行動に出るべき……！」

そう言つて彼は動き出し、虚空を通じて自身のソウルに接続。  
歪んだ空間より取り出したるは、紙で蓋をした油壺。  
それを両手一杯になるほど取り出すと、彼はすかさず小鬼溜まりの  
下へと走り——投げる。

「「GORBBBBGッ!?」」

割れた瞬間発火する蓋紙と、その火を浴びて燃え上がる油。

火薬で以て燃やすのではなく、油を用いて燃やす以上、油を浴びた  
小鬼の部位は、総て炎に捧げられる贊も同然。

繫がり連なる鎖の如き、連鎖して燃ゆる灼熱紅蓮。

こうなればもはや、剥がれ落ちる落ちないに関係なくゴブリンども  
は燃え果てて、やがて残るのは小鬼であつた灰塵のみ。

「貴公！」

ここまでやれば、もはや本体の方は時間の問題。

残る独立小鬼へ火炎壺を投げ当てる、先に果てた連中同様、炎に喰  
わせて灰と変える。

追い続けてきた小鬼がいなくなつたのを機に、冒険者も足を止め、  
その場に村娘を下ろした。

これで終いだ——そう思つた矢先に放たれたのは、虚空を裂くが如

き小鬼どもの断末魔。

そして振り下ろされる、炎に燃えたその剛腕。

「ぬう……ッ!」

燃える大木が如きその一撃を、デモンスレイヤーはすかさず横に跳んで回避。

剛腕は再び岩壁を叩き、腕を構成していたゴブリンたちが剥がれ落ちるが、それも炎によつてすぐさま燼滅。

これならば自滅も時間の問題と思う者もいるやもしれないが、デモンスレイヤーが思ったことは全くの逆。自滅などと甘いことを考えてはいけない。寧ろ何故、まだ動けるのかと考えるべきだ。

何故だ。何故動ける？ 燃かれる熱に耐え切れぬのならば、攻撃などという考えは浮かばぬ筈だ。

だというのに今の一撃は、明らかにこちらを殺すべく放たれた一撃だつた。

あり得ない。こんな状態でそんな判断ができるなど、低能なゴブリンにできるはずがない。

それこそまともな状態でなくば、できる筈が――

――いや、まさか

先の自分の思考を繰り返せ。

奴はまるで、『ヒル溜り』と『ファランクス』の性質を兼ね備えたが如き存在だ。

故に両者の共通弱点たる全体攻撃、それも炎で以て攻撃した結果、今の状態に至つたのだ。

であれば、まだある筈だ。

かの2匹のデーモンが持つ性質。共通ではなく、片方にのみ存在する性質が。

「——心臓だ」

「なに？」

不意に発せられた声の主は、例の角付き冒険者。

いつの間に傍に寄ってきたのか、彼の顔は思ったよりも近くにあつたが、今はそんなことはどうでもいい。

「奴ら、存外にしぶとい。俺が先に相手した田舎者（デカイ）も、首を刺したにも関わらず生きていた」

奴らの息の根を止めるなら、確実に心臓と脳を貫くべきだ——。経験という点では、自分とは比べ物にならないくらい浅いであろう白磁の冒険者。

その彼から教わったものは、だがデモンスレイヤーにあることを確信させるに至つた。

そうして彼は再び虚空に手を伸ばし、取り出したのは一振りの大剣。

およそ彼が有する武具の中において、最大クラスの長大さを誇る特大剣——グレートソード。

それを逆手に持ち、まるで槍投げの構えのような体勢を取ると両足を強く力ませ、大地をしかと踏み締める。

「——ぬううんッ！」

そして——一投。

人外の域にある剛力を以て投じられたソレは、もはや弩砲（バリスター）より放たれる巨矢の如く。

尋常を超えた破壊力を手に入れた巨剣は、主の願いを叶えるべくその切つ先で立ち塞がる総てを貫き、碎き、破壊していく。

1匹、2匹、3匹——そして4匹と。

はたして貫殺されたゴブリンの数は如何ほどにまで膨れ上がったか。

数える氣すら起ころぬほどに死んでいくゴブリンたちの姿を目につつ、デモンスレイヤーは隣の冒険者に語り掛けるように言葉を紡ぐ。

「……可能性がなかつたわけではないが、確信はなかつた」「……そうか」

「ああ。だが、貴公のおかげでそれを得られた。……どうやら」

——貴公の言葉通り、心臓を穿つべきだつたな。

小鬼が集まり、出来上がつた集合肉塊。

そこに空けられた穴の中に見える、一際巨大な小鬼の姿——ホブゴブリン。

そいつの胸部はごつそりと抉られており、既にその個体に命の灯火がないことは明白だつた。

そしてその個体の死を切つ掛けに、小鬼溜まりゴブリンパンクの巨体が瓦解する。崩れゆく小鬼どもの矮躯。どちらりどちらりと、熟れ過ぎて腐つた果実の如く地に落ち、潰れていく小鬼どもはやがて砂塵のように散り、後に残るのは先に燃え果てた同胞たちの灰塵のみ。あとは、散らばり漂う——魂の残滓。

「——ツ!?

魂——ソウル。

この異境へと放られて早5年。

魂という概念がこの四方世界にも存在することは知つていたが、この目で直に見る機会は全くの皆無であった。

だがどうだ、この怪物からはソレがある。ソレが見える。

であれば次に来るものが何なのか——それが分からぬデモンスレイヤーではなかつた。

漂うソウルはやがて集い、山谷を流れる川のようにデモンスレイヤーの身へと流れ、吸収されていく。

身に生命の息吹を吹き込まれるが如き感覚と、それを悦楽のように感じる自身への嫌悪感。

ああ、これだ。この感覚。ひどく懐かしい、そして忌まわしい外法の業。

そうか。こいつか。こいつこそがそうちつたのか。

名前を頼りに四方を行き来し、しかし遂に巡り会うことのなかつたもの。忌まわしくも愛おしい、しかしやはり相容れぬ不眞戴天、怨敵たち。

デーモン『ゴブリンパンク』。

この地に見えし最初の『デーモン』に、彼はこの5年の間で最上の感謝と、そして最悪の祈りを捧げ、

「くく……クク、ク……」

燻り、消えかけていた故なき憎悪と怒りと共に——笑つた。

「ははっ、ハハハ——ハハハハハハハハハハツ!!」

狂笑する魔性殺しの英雄。

最新の英雄たる彼の、知られざる姿を横目にしてなお。

後にゴブリンスレイヤーと称される若き冒險者の意識は、今は既になき小鬼溜まりへと向けられていた——。

\*

「え——それは、本当なんですか!?」

「ああ、虚言ではない」

かの調査依頼を終えてから数日。

ギルドへの報告を終えた彼はその後、冒険には一切出ず、短期間の旅に出ていた。

とは言つても、やることは単純だつた。

周辺の町村を尋ね、時には他方のギルドへと寄り、そこで最近の出来事について尋ねるというもの。

最近変わつたことはないか。奇妙な事件などは起きていないか。魔物の動きが変わつたことはないか。見たこともない異形の姿を目にはしなかつたか、などと。

結局、結果は真白。何も得るものもなく、ただの徒労に終わつた。けれども、得る者はなくとも、そこから導き出されるものはあつた。本命の質問について答える者はいなかつたが、ゴブリンについて何を思つているのかという質問については、返答する者は数多くいた。曰く、小鬼は数だけは多く、時に群れを成して村や町を襲う。

曰く、小鬼は女子供を攫い、手籠めとした上で喰らう。

曰く、小鬼には時たま大きな奴がいて、そいつが群れの長となることもある。

町村の住民、通りかかった冒険者、ギルド職員——。

彼らから聞いたゴブリンたちの話から要素を取り出し、それをあのデーモンへと当てはめていく。

『数は多く、群れを成し、女子供を攫い、時に大きな奴<sup>ホブゴブリン</sup>が群れの長となる』

『小鬼溜まり<sup>デーモン</sup>』が有していた特徴と一致する。

中には異なる部分もあるのだが、それは解釈の違いによるものだと考えれば、確かにこんな特徴へと至るという答えに行き着いた。

調査と考察の末、やはりあの異形は自分の知る『デーモン』であり、『原生デーモン』が変化して生まれた存在なのだという解答へと至つた。

『原生デーモン』は、その土地や地域の伝承や恐れの類を汲み取り、姿を変える。

英雄を讃え、その活躍と伝説を謳う街ならば、その街の人々が謳う英雄の特徴を得て、具現する。

恐ろしき怪物の恐怖が伝わる辺境の土地ならば、その怪物が行つた凶行と殺戮の伝説より要素を獲得し、姿を変じる。

そうすれば、まるで御伽話や物語の存在が現実に現れたかのような現象が起ころ。

今回は、その対象が小鬼とされただけのこと。故にこう言つては何だが、被害もこの程度で済んだのだ。

だがいつ、同じことが起きるか分からぬ。だから存在の有無を調べたのだが、今のところ出現した個体はアレだけのようだ。

(だが、調査を止めてはならない)

現場に何もないのなら、より多くの知識が集う場所へと向かい、そこで蓄える必要がある。

けれどもここは辺境。西方のこの地に、知識の蔵と呼ぶに能う場所など存在しない。

であれば、答えは簡単だ。その知識が集う場所へと移動すればいい。

「……」

そこで彼は思い出す。数日前、あの女性職員から言われたあの言葉を。

金等級への昇級。国からの依頼。国家レベルの難事を任される——。

国が動かねばならぬほどの大事ならば、すぐさま駆けつけられる場所へと移り住まねばならない。

それはいつ、いかなる時にくるかもわからず、故にいつでも応じられるようしなければならないのが、金等級冒険者としての義務。

自由を失い、好きに行動できなくなるのは痛いが……

「……止むを得ん。この際、手段を選り好みしている場合もあるま

い」

そうと決まれば行動は迅速に。

これから先のことを決定した彼はすぐさまギルドへと向かい、かつて女性職員が言っていた一件——『金等級への昇級』を受けることとしたのだ。

そして――

「――む  
「む――」

ギルドの入り口付近。

ギルドから出ようとしたらデモンスレイヤーと、ギルド内へと入つてきた角付き兜の冒険者。

双角のうち片方は折れ、既に片角兜になつてはいるが、今はどうでもいい。

常に兜を外さず、鎧で身を固め続いている両者の邂逅は偶然であり、だが見る者から見れば必然なのかもしない。

「貴公……」

「……先日は、助かつた。再度、礼を言う」

「ああ……構わんさ」

私も、貴公のおかげで目が覚めた――。

やるべきことを定めた彼だが、その切つ掛けをくれたのは調査依頼を斡旋してくれた女性職員と、このまだ名も知らぬ若き冒険者。

聞けばこの男、あの日工房で出会い、助言をくれてやつた若者だったのだ。

どうりで覚えのある鎧だと思ったが、まさかあの時の若者だつたとは。

まあ、こうして共に生きて帰つて来れたのだから、何であろうと良しとするべきだろう。

「依頼か」

「いや、これから少し準備をな」

「そうか」

「そうだ」

それからしばらく、彼らは何も言わなかつた。

無言で、まるで案山子のように突つ立つ鎧兜の2人が向かい合う光景は、ある意味滑稽とすら見える。

受付の方で何を勘違いしたのか、三つ編みの若い新人職員が怖がるようになんか青ざめさせ、それを先輩である女性職員が「大丈夫だよ」と言い聞かせている姿が見えたが、やはり2人にとってはどうでもいいことだつた。

「貴公は……これからどうするのだ？」

「決まつてゐる」

「ゴブプリンだ」

彼が言う言葉を先読みし、わざとそう訊ねた後、彼が言うであろうタイミングに合わせて、デモンスレイヤーも同じ言葉を口にした。む、と兜内で彼が呟いたように聞こえたが、デモンスレイヤーも同じく兜内でくつくつと笑うのみだ。

「貴公は本当にゴブプリンばかりだな。他の依頼を受ける気にはならんのか？」

「興味がない」

「今、鉱山の方ではちよつとした大事が起きているようだぞ？ 確か、何と言つたか……ロツクイーターとやらが出たそุดが」

「興味がない」

そうか、とそう答えながら、またもデモンスレイヤーはくつくつと笑つた。

どうしてか、この若者の相手をしていると笑いが止まらぬ。

これはあれか、私がこの者を気に入つたからか？　どこが？　不愛想な点か？　それともこの機械的な返答か？――否。

この者は――私と同類だ。

特定の者にしか興味がなく、特定の者しか殺したくない。何かを殺すことこそが生きがいであり、目的であり、存在理由。それ以外には何もないし、正直に言つて興味もない。

“だが、流石の私もここまでひどくはないがな”

そんなことを思いながら、彼は再び眼前の若者を見つめる。

ボロボロの鎧、漂う汚臭、中途半端な長剣に円盾。

ゴブリンを倒すため、彼なりに作つた対小鬼用特化装備と見るべきか。

しかし、どうしてこんな有り様となるまで、この若者はゴブリンに拘るのか。

いや――それは考えるまでもないだろう。

「ゴブリンどもに怨みでもあるのかね？」

「……」

若者は、答えない。答えようとしない。

しかし兜越しでも分かる。この若者は今、耐えている。

かつて受けた屈辱を、もたらされた悲劇の苦痛を堪えて、その問いかけに答えようと我慢している。

「……昔、故郷を奴らに滅ぼされた」

「ほう……」

いつごろか、と問うと、5年前だ、と返答がきた。

そしてその後、彼はとある老爺に拾われて、彼のもとで修業を受けたそうだ。

生きるために必要なもの。小鬼を殺すために必要なこと。

考えることの重要性。自分という存在の再認識。

どうにもこの若者、その老爺のもとで叩き込まれ、染みついた癖なのか、それとも元来有するものなのか。

誰かに何かを質問されれば、余程のことがない限りは必ず答える気質のようだ。

これが普通の人間ならば、言いたくないことなどは絶対に答えないとはずなのに……良くも悪くも、この若者はどこまでも機械的な輩と言うべきか。

(ああ、成程な……)

そして理解した。この若者の正体を。

5年前。ゴブリンに滅ぼされた村。老爺に拾われた。

冒険者になれる年齢は15歳。たまに歳を詮々までして来る輩も少なくはないが、もしこの若者が本当に15ならば、5年前は10歳だったということになる。

その年頃であればまだ、体の方も成熟している筈もなく、故にあの時見た少年の姿がぴつたりと当てはまるというものだ。

「……これも縁か」

「何がだ？」

「いいや。こちらの話だ」

愉快げに、そして不気味に笑うデモンスレイヤーに、だがやはり若者は興味なさげな様子のままだ。

だが、その反応がデモンスレイヤーにとつては心地よかつた。これでいい。それでいいのだ。

もはや壊れてしまつたものを元に戻すことなどできない。

ならばこそ、壊れたなら壊れたものなりに次を築けばいい。

私はかつての記憶を既に忘却している身だが、あの裂け目に入る前に、確かに『かつての私』とやらはいたのだろう。

だがそれも既に時の果てのもの。過去の遺物。

失くした自分を今の自分で代わりとする——それが今 デモンスレイヤー の私のなのだ。

「お前は行かないのか？」

「ん？」

「その……何とかいう……」

「ロツクイーターか？」

「それだ」

乾いた笑いを上げて、行かんよとデモンスレイヤーは答える。

当然だ。確かに冒険者が一人犠牲になつたとか、片腕を食い千切られたとかと聞いたが、知つたことではない。

「行かんよ。興味もない。他の連中にでも任せておけばよからう」

「そうか」

「そうだとも」

何故ならば——私は。

「私は魔性殺し——『デモンスレイヤーを殺す者』だ」

それ以来、彼らが出会うこととはなかつた。

翌日デモンスレイヤーは都へと向かい、そこで昇級試験を受けた後、はれて金等級へと昇級。

若い冒険者の方も、毎日変わらずゴブリン討伐の依頼を受け、それを淡々と遂行し続けた。

変わらぬ日常。変わらぬ景色。変わらぬ人々。

魔性を殺す辺境の英雄と、小鬼を殺す辺境の英雄。

辺境最凶と、辺境最優。

壊れた2人が織り成した、ただ一度の討伐譚は此れにておしまい。  
殺す者たちの殺戮譚、その次幕が上るのは、それからさらに5年後のこと。

異界の神、その救世心<sup>あくい</sup>が再動する——5年後のことだ。

## 8. 殺戮者たちの再会

「——ヌンツ!!」

「A R R E M E E ッ!？」

巨大な鉄塊の如き大得物の一撃を受け、魔神の断末魔が夜天の下に響く。

魔神——『下級魔神』と呼ばれるその魔物は、混沌の勢力に与する存在だ。

下位とはいえ魔神の名を冠するその存在は、未だ秩序の勢力と交戦状態にある故か夜中に群で都を襲撃してきた。

だが、タイミングが悪かつたというべきか。あるいは骰子の出目が悪かつたというべきなのか。

襲いくる混沌の眷族どもを待ち構え、迎え撃つたのは1人の冒険者。

肩に担いだ大斧を振るい、力任せに魔神どもを叩き潰し、最後の一匹に至るまで例外なく、彼らを肉塊と変えて殺戮した。

悍ましき光景。吐き気を催すほどの殺戮劇。

だがそれを咎めるものはなく、もたらされるのは万雷の喝采。

やつてくれた。また奴らを倒してくれた！

やはりあいつこそが英雄だ。かの六英雄にも劣らぬ猛者だ！

今回の敵は、これまでに相手してきた者共と比べればひどく劣つていたのだが、それでも彼らは魔神を打ち負かしたという現実に、ただただ酔いたいだけなのだろう。

黄金にも勝る人々からの感謝と拍手。

それを一身に浴びるその人物は、青紫の血に塗れた大斧を肩に担いで、

「……フンツ」

ひどくつまらなさそうに、兜内にて一息を発した。

\*

「——よくやつてくれた、デモンスレイヤーよ」

絢爛たる玉座の間においてなお、一層強い存在感を放つ玉座。その至高なる席に座す者などは、この国において唯一人——即ち、**国王**。

年若き国王。その美麗なる顔から垣間見える勇猛さは、かつて彼が1人の冒險者であつた頃の名残りか。

ともあれ、そんな彼が直々に礼を言つた相手は今、彼の眼前で片膝をつき、最上の礼節を以て王に頭を垂れていた。

しかし、その顔に浮かべられた表情をることはできない。

何故ならば今の彼は、その顔を鉄兜で覆い隠しているからだ。顔だけではない。屈強な長躯、剣や盾を握る両の腕、地を踏み締める両足。

その一切を鎧で固め、肌の露出を許さぬと言わんばかりに鋼で覆い尽している。

これが臣下たちの前であれば、「不敬であるぞ！」と怒号の1つや2つは飛んでいたやもしけないが、生憎と今この場に臣下の姿は存在しない。

文字通りの2人きりのこの状況を作りだしたのは、誰であろう国王本人なのだ。

「繰り返される魔神どもの襲撃、その迎撃の任を果たしてくれたこと、嬉しく思う。

毎度のことではあるが、そなたがこの都に常在し、混沌の勢力を相手にその剣腕を振るつてくれることは、とても頼もしい」

「……勿体無き御言葉にござります」

言葉だけであれば感激しているように見えるが、実際の彼は、た

だ事前に暗記しておいたセリフを繰り返すような口調で言つており、  
国王に対する敬意もなければ、感謝の念など欠片もない。

そのことについては国王自身も既に理解していた。

当然だ。何せこの態度を取られ続けて、もう3年ほどは経過しているのだから。

「……ここに臣下の姿はない。故にそなたの不敬を私は許すが、代わりに私も常では言えぬ本音を言わせて貰う」

「……」

無言。されど首肯を以て応じる。

そちらがそう来るのなら、こちらもさせて貰うという意思ゆえ、と。  
この時国王は、何となくそう彼の行動を解釈した。

「そなた……現状にかなり不満を抱いているのだろう？」

やはり、件のデーモンか？ と。そう問い合わせる国王に、デモンス  
レイヤーは今度は首肯のみではなく、言葉を用いて返答する。

「……5年前、私が金等級冒険者へと昇級する際、監督官を通じて御身  
にお伝えした言葉をお覚えか」

「ああ、無論だ。確かに國家の難事、並びに魔神どもの迎撃にいち早く応  
じる代わりに、そなたの言う『異形のデーモン』とやらの情報を集め、  
伝えよとのことだったか」

「如何にも」

5年前、彼は金等級への昇級の際、ある条件を冒険者ギルド、そして国王へ向けて出した。

それは先に国王が述べた通り、『異形のデーモン』なる存在の情報を  
集め、その一切をデモンスレイヤーへと伝え教えることだった。

そして来るべき時が来れば、金等級の座を降り、再び銀等級冒険者

として行動を開始する——というもの。

仮にも国家直々の依頼を受ける金等級冒険者が、好き勝手に動くことはそう許されることではない。それが長旅となるものならば尚更だ。

故に、考えた末に導き出したものが、銀等級への降格だった。

金銭に余裕はあり、地位や名声を求めているわけでもない。

デーモン殺しの旅に出るというのなら、最適な等級は銀等級。金に拘る意味もない。

その条件をギルド上層と国王——当時は渋々といった感じだったが——は受け入れ、彼を金等級冒険者として迎え入れたわけなのだが、

「金等級へと上がつて5年。あの約定を交わして以降、デーモンどもに関する情報は一切寄越されてはおりませぬ。」

私自身、個人で情報収集を行い続けておりますが、未だ連中に関するものはなく、ただ時が過ぎるばかり。

もしもこのまま、これまでのような状態が続くのであれば……」

その先の言葉を彼は紡がなかつた。

あるいは、紡ぐ必要がなかつたと見るべきか。

位階への拘りもなく、地位や名声にも興味がない。

必要な分だけの金銭と、ある程度の基準を満たした拠点があればそれで事足りる。

そんな彼だからこそ、銀等級への自己降格も躊躇いなくやつてのけるだろうと、国王も既に察していた。

察してしまつたからこそ、彼は頬杖をつき、困つたように嘆息しつつ、指で肘掛けをトントントンと叩き始めた。

「……そろそろそう言う頃だろうと思つてな。故に今回、わざわざ一仕事の後にそなたをここに呼んだのだ」

「……？」

何、と兜越しに放たれる視線が、彼の感情を告げていた。

だがそれは、同時にあることへの期待の表われとも見て取れた。

その鉄兜の下を見たことは一度もないが、こうも分かり易い反応を示してくれると、兜の有無などどうでもよくなる。

そして僅かに気分が乗った国王は、フツと不敵さを感じさせる微笑を湛えて、今回彼を喚び寄せた真の理由を語る。

「一ヶ月ほど前、西方辺境の地での小鬼どもの動きが活発化しているとの報が入った。

被害規模とおおよその個体数から見るに、おそらくは統率者……それも優れた個体がいるのは確実だ」

「討伐任務の類ですか？ それであれば、私を喚び出す必要がありますまい」

他の輩にでも任せればよろしいでしょう、という彼に国王は嘆息1つと共に首を左右に振つて「違う」と否定した。

「だが一ヶ月後、その小鬼たちの動きが一層活発化し、被害は以前の倍近くにまで膨れ上がつてているとの新報がきたのだ。

伝え聞きゆえ私も半信半疑ではあるのだが……どうも件の小鬼どもの中に――」

――見たこともない小鬼の姿があつたそうだ。

また――小鬼。

されど――小鬼。

まるで5年前の繰り返しのようだ、それでいてそれでもない、全く新しい怪事件。

つまり、国王が言いたいのは、その未知のゴブリンこそがデモンスレイヤーが常々口にしている『異形のデーモン』ではないか、という

ことだつた。

「この都に迫る悪魔<sup>デーモン</sup>の数は増すばかり。本来ならば、このような事態の最中にこんなことを言うべきではないのかも知れないが……」

そこで一旦言葉を区切ると、若き国王は咳払いを1つ。

己が内にある迷いを取り払うように行われたその後、若王の双眸に鋭さが宿り、王者たるもの重厚な威厳と共に彼は眼前の冒険者に命を下した。

「金等級冒険者<sup>デーモンスレイヤー</sup>『魔性殺し』よ。そなたの王都守護の任を解く。

己が目的のためとはいえ、よくぞこれまで我が国に尽してくれた。

……最初に交わした約定を、今こそ果たそう」

行くがいい——そう言つた国王の顔は未だ刃の如き銳利さに満ち、しかしそこに湛えられたほんの僅かな微笑が、彼なりの優しさの表われともなつていた。

その言葉に、少なからずデモンスレイヤーは驚いていた。

いつかこの時がくることは予想していた。

いや、例え来ずとも、その時は己の方から手繰り寄せ、無理やりにでも行動に移るつもりだった。

しかし、その必要はどうやらなくなつたようだ。

心よりの敬意を払うことなく、ただ利用すべく頭を垂れ、従い続けたこの国の頂点たる男に、この時ばかりは彼も感謝せざるを得なかつた。

もたらされたデーモンについては1匹。それもまた同じ小鬼の似姿ときた。

存在が確定しているわけでもない。あるいは敵方が何らかの手段を用いて自分を誘き寄せようと講じた罠やもしれない。

いずれであれ、彼の答えは決まつていた。

真偽についてを問うのは、直接現場に赴いてからだ。

これまでがそうであつたように、これからもそうし続ける——それが『彼』という存在であるが故に。

「……感謝致します、陛下」

がちやり、と武骨な鋼鎧が音を鳴らし、急ぎ件の地へ向かわんとするデモンスレイヤー。だが、

「待て。まだ話は終わっていないぞ」

その歩みを止めたのもまた、国王であつた。

まだ？ と首だけを動かして、肩越しに国王を見つめるデモンスレイヤーの顔——鉄兜越しではあるが——には、心なしか苛立ちのようなものが見えた。

「任を解きはしたが、まだそなたには仕事が残つているのだぞ？」

件の小鬼どもは今、上の森ハイエルフ人たちの森近くに巣を作り、そこを拠点に今も被害を拡大させているという。

そして魔神王の軍勢に対処すべく、森人、鉱人、蜥蜴人の長、そして我ら人間の諸王が集まり、会議を開くのだが、その小鬼どもを何とかせねばならんとの話も出ている

「つまり……二重の理由で、小鬼どもを討たねばならないと？」

「そうだ。だからこそ、各種族より冒険者を出し、一党を組ませてその住処と、そこに住まう小鬼どもを殲滅して貰うこととなつた。

既に森人、鉱人、蜥蜴人の代表は、人間われらの代表者と成り得る冒険者のもとへ向かっている

そなたには、その者たちと合流した後、小鬼討伐に向かつて貰う——。

そして続く形で告げられた街の名と、そこに居るであろう人族の代表者の名を聞き、彼は本日2度目の驚愕を味わうこととなつた。

街は、かつて西方に身を置いていた頃に拠点としていた西方辺境の一街。代表者の名は——

——『ゴブリンスレイヤー小鬼殺し』、と言つた。

\*

——『ゴブリンスレイヤー小鬼殺し』。

その名は、この5年間で度々耳にしていた。

辺境勇士、小鬼殺し。

開拓の進まぬ辺境の地において、数を増すゴブリンどもの被害を抑え、損得抜きに小鬼討伐を請け負い続ける男。

対象がゴブリンということで、同業の連中からはあまり評価されていないうだが、逆に辺境の村人たちからすれば、彼のような男は英雄譚に出てくる英雄の如き存在として映つているのだろう。

詩として語られる『小鬼殺し』の印象は、一言で言えば使命に殉じ、孤高に生きる英雄そのもの。

しかし、何となく——いや確実に実物は違うと、デモンスレイヤーは断定していた。

その名で呼ばれるようになつて以降は会つたことがないが、少なくともその『小鬼殺し』とやらが誰なのかを、彼は理解していたからだ。

「——久しぶりだな」

馬車より下り、到着した見覚えのある建物の前に立つデモンスレイヤー。

あの頃と大して変わつていなかつたのは幸いと言うべきか。さもなくば、例え場所が変わつておらずとも、本当にここで合つているのかと疑ふところだった。

湧き出る懐かしさに浸つた後、彼は鎧を鳴らして開閉戸を開け、建物の中に入ると、まず彼を出迎えたのは同業者ぼうけんしゃたちの視線であつた。

彼が金等級——という理由で皆の視線が集まつたわけではあるまい。

彼の首にぶら下がる認識票は、既に金から銀へと変わつてゐる。あの若王の計らいだ。

よくも悪くも、金等級はその存在を認められている。故に金等級冒険者がやつて来たとなれば、何か大事でも起きているのではないかと、周囲に余計な心配を抱かせる可能性もなくはないのだ。

それに最初に交わした約定のこともあり、再び自由に行動できるよう、再度彼を銀等級冒険者へと戻したのだ。

だからだろうか、冒険者たちの視線はすぐに彼から外れ、皆それぞれのことを為さそつと再動し始めた。

(確か森人、鉱人、蜥蜴人、そして例の『ゴブリンスレイヤー小鬼殺し』であつたか……？)

どこにいる、とギルド内を見回す。

前の三種族についてはすぐに見つかるだろう。特に蜥蜴人などは珍しく、都でも何度も何度か会つたことがあるので見つければすぐにでも分かるというもの。

視線を泳がせ、あちらこちらを見ていくとそれらしい一党の姿を確認し、本当かどうかと凝視する。

森人の少女、鉱人の老魔術師、蜥蜴人の武僧——。

その他にも金髪が目立つ神官らしき少女の姿が見えたが、その隣にいる人物へ視線を移す前に、彼の耳がある言葉を聞き取つた。

「これで残るはあと1人ね。確かに、この街で合流つてことになつてたわよね、鉱人？」

「おうよ。しつかし、人族の諸王も思い切つたものだの。まさか噂の『くだき丸』を寄越すとは」

『ラウグドリング』よ、『ラウグドリング』。さつき受付で鉱人言葉での呼び名で言つたら、分からぬいつて言われたこと忘れたの?」「それを言やあ、お前さんの耳オルクボルグ長言葉も同じだろうがよ」

「まあまあ、そこまでになされよ御二方。種族内での呼び名に拘る気持ちについては分からなくもないが、それではまた間違われては、拙僧が再び通訳する羽目になりますゆえ」

『くだき丸』？『ラウグドリング』？渾名か何かか？

全く聞き覚えのない異名の類に彼は首を傾げつつも、その視線は動き続けている。

若い女神官の隣にいる人物は、正直に言つてかなり『異質』であった。

薄汚れた鉄兜と革鎧。

腕に括り付けた円盾は傷だらけで、腰にはいざこの鍛冶屋でも見掛けない中途半端な刃渡りの長剣。

新人でももう少しまともな格好をしているだろうと思えるほどに、奇妙で異質、そして不気味な姿形のその冒険者を見た瞬間、デモンスレイヤーは直感的に理解した。

否。正しく言えば、直感のみではなく、もう1つの要素から導きだした答えでもある。

剣や盾、纏う革鎧は異なれど、被つた鉄兜には覚えがあった。

片折れ角付き兜は今や双角を失い、けれども一層小鬼退治向けに相応しい形となつていて。

そして兜に穿たれた幾本もの縦線を思わせる覗き目スリットから窺える赤光は、あの時と同じく爛々と、そして不敵に輝いている。

その視線に相手方も気づいたのか、薄汚れた冒険者は喧嘩の最中である森人と鉱人の間を抜け、ずかずかと遠慮なくギルド内を進んでいく。

やがて開閉戸近くで佇むデモンスレイヤーの前に立つと、何かを確かめるように視線を頭から爪先に至るまで走らせていく。

「ちよつと……オルクボルグ？」

「かみきり丸、そこの全身鎧に何かあんのか？」

「……何やら、かの御仁について確かめているように見えますな。

小鬼殺し殿は

「ゴブリンスレイヤーさん……？」

オルクボルグ、かみきり丸という呼び名についてはともかく。

後で蜥蜴人の僧侶と少女の神官が口にした名を耳にした時、彼はようやく確信を得られた。

そして眼前に立つ彼の方も確認を終えたのか、彼同様に確信を得たらしく、変わらぬ佇まいに彼に言葉を——5年ぶりにその声をかけた。

「——戻ったのか、『魔性殺し』  
『久しいな、貴公。いや——』『小鬼殺し』?」

殺戮者たちの再会。

かつての名もなき若者は、『小鬼を殺す者』の名を獲得し。

かつて魔性殺しの名で知られた英雄は、再び始まりの地へと帰還した。

互いの異名を呼び合う2人の、その口から発せられた異名を耳にして他の4人——そしてギルドにいた冒険者たちが驚愕の声を上げたのは、その後すぐのことだつた。

## 9. 語り

紅と翠の双月が夜天に昇り、淡い光を地に注ぐ。

早いもので既に3日が経過した。

『ゴブリンスレイヤー』と『デモンスレイヤー』  
『小鬼殺し』と『魔性殺し』。

2人の殺戮者たちの5年ぶりの再会の後、一党は街を出て件のゴブリンたちの住処がある森人の森近くへと向かうべく進み始めた。最初こそゴブリンスレイヤー、そしてデモンスレイヤーという2人の奇人に振り回されていたが、そこは女神官の手助けもあり、そこまでひどいものにならずに済んだ。

そして現在。

双月を頂く星空の下、広野の真中で焚いた炎を囲う形で円陣を組み、6人は腰を下ろしていた。

「しつかし、まさかあの英雄くだき丸が、こんな平々凡々な鎧を着こんでおつたとはのお。やっぱ詩や噂を真に受けるモンじゃないわな」「そうねえ。オルクボルグもそうだけど、ラウグドリングの方も大概よ」

詐欺よ詐欺、と続けて言う森人こと『妖精弓手』は、紡ぐ言葉とは裏腹に大層楽しげな笑みを浮かべていた。

それは『鉱人道士』についても同じであり、共にまんまと詩と噂によつて生まれた理想姿<sup>イメージ</sup>と現実<sup>リアル</sup>の差を叩きつけられたこともあつてか、「違ひねえわな」と豪快に笑つていた。

損得抜きにゴブリン退治の依頼を受け、辺境の村々を救う勇士というのが『辺境勇士小鬼殺し』の詩ならば。

王都に攻め来る魔神たちを悉く返り討ちにし、都の守護者として君臨し続けた英雄というのが『英雄魔性殺し』の詩だ。

都や町村でこれらが語り始められれば、皆すぐさま集つて聴きに入るほどに人気の叙事詩ではあるのだが、その人気の高さゆえか、実物を見れば幻滅、あるいは驚愕するはある意味当然だ。

片や薄汚れた鉄兜と革鎧に身を固め、腰に佩く剣は真銀<sup>ミスリル</sup>の名剣などではなく、数打ちを擦り上げて自作した独特的の刃渡りの長剣。

片や絢爛とは程遠い、兜を除けばどこにでもありそうな鉄製の全身鎧と直剣、そして騎士盾。

およそ勇士や英雄とはかけ離れたその姿を見れば、きっと妖精弓手や鉱人道士でなくとも同じ気持ちと反応を抱くこととなろう。

「じゃが、やはりかの武勇に偽りはなさそうじゃな。

見た目こそ平々凡々じやが、刻まれた溝と肩当ての形状、そして要所を覆う部位の鉄は厚めながらも動きを妨げず……」

「つまり、どういう意味かな？ 術師殿」

「こやつの纏う鎧は、かみきり丸のように特定の相手にのみ特化しとするわけじやないが、逆にあらゆる敵に対して一定の守りと動きやすさを得られるよう作られておる。

この鎧が何処の地にて鍛え、造られたのかまでは知らんが、うむ……中々に工夫の凝らされた一作つてことよ」

ほう、と嘴兜の内側にて、デモンスレイヤーは驚愕と感心の念を含んだ一声を上げる。

確かに鉱人というのは、子供でも只人の玄人も裸足で逃げ出すほどの鋭い鑑定眼を有すると聞くが、どうやら、強ち嘘ではなかつたらしい。

確かにこの防具『フリューーテッド装備』はボーレタリアと彼の故郷——故郷の名は覚えていないが——においては、騎士たちの間でよく利用されていたので一般装備化していたが、利用されていたということはつまり、それに足る性能を備えていたからに他ならない。

薄い鉄板で構成されたこの板金鎧。

制作費用の都合か、あるいは意図して用いられたのかは分からないが、薄鉄板のおかげで多少なりは重量が従来のものより軽減され、また薄さ故に欠けている防御力については、板金に刻まれた溝によつて対斬撃耐性を上げている。

残念ながら金属鎧特有の打撃についてはそこまで強くはなく、金属ゆえに電撃にも弱いが、少なくともこの装備のおかげで今日までモンたちと渡り合つてこれたことは事実だ。

「……自慢の装備だ」

「じゃろうな。それにしても……」

褒め称えていた時とは異なり、鉱人道士の目が細められる。

彼の双眼が映すのは、デモンスレイヤーと、そしてその隣に座るゴブリンスレイヤー。

隣同士で座っていることもあつてか、全身鎧姿の男が2人もいると、妙な存在感というか、奇妙さを感じたのだろう。

「さ、焼けましたぞ」

そんな鉱人道士の前に、蜥蜴僧侶が獣肉を刺した串を翳す。

すると全身鎧2人に向けられていた視線は瞬く間に肉へと移り、豊かな白髭を周りに蓄えた口から舌を出して舌なめずりをする。

「そう言えども、みんな、どうして冒険者になつたの？」

篝火がぱちり、と音を立てたと同時に声を発したのは、妖精弓手である。

灯る火をして、煌々と燃えるそれを見ながら言つた彼女の目には、少なからず未知へと好奇が垣間見える。

「……つぐう。わしや、当然、旨いモンを喰うためじやな。耳長の、お前さんはどうじや？」

「あなたの見れば分かるわよ。……私は外の世界に憧れて、つてとこね」

「拙僧は異端を殺し、位階を高めて竜となるため」

「えつ？」

「む？」

「む？　冒険者になつた理由を問われ、その問い合わせに答えたまでですが」

何かおかしなことを言いましたかな？　と長い首を蛇の如きに曲げ、傾げる蜥蜴僧侶。

リザードマン  
蜥蜴人<sup>リザードマン</sup>というのは『恐るべき竜』なる存在を父祖に持ち、いづれは自分たちも父祖と同じ竜へと至ることを共通の最終目標と定めていふとは聞いていたが、正直半信半疑であつたので、それが事実であつたことを知れば、驚くのも無理はない。

（しかし、竜となる……デーモンどもが土地の伝承や畏敬からその存在の似姿となるように、蜥蜴人にも変化の性質があるのか？）

「……ゴブリンを——」

「あんたのは何となく分かるからいいわ」

「あ、あはは……」

むう、と隣で重々しい声を吐き出すゴブリンスレイヤーだつたが、これは流石に妖精弓手の言葉に納得せざるを得ない。

5年の間に聞こえし小鬼殺しの噂。それら総てが事実であるのなら、彼が冒険者になつた理由など『ゴブリン』以外あり得ないのだから。

「で、あなたはどうなの？　ラウグドリング」

「む？」

「そうじやそうじや。かみきり丸は耳長のがいう通り、小鬼以外にあり得んじやろうが、お前さんはどうなんじや？」

「悪魔や魔神どもを相手し続けてきたこととも、関係があるやもしれませんな」

まあ、この流れであればいつかは訊かれるとは思つていたが、いざ訊かれるとなると何と答えればよいものか。

『異形の「デーモン』を求めて冒険者になつた、と答えても、そこから先の説明が正直面倒である。となれば……

「……以前、あの辺境の街にいた女性職員の言葉が切っ掛けだ。

その時、私には決まつた職がなかつた故にな」

「えー、それだけ？」

「……他にも理由はあるが、語るほどのものでもない」

「別にいいじゃない。聞かせてくれたって」

「まあまあ、野伏殿。そこまでに。

この御仁も、何か事情があるようで

「……」

不満げに頬を膨らませる妖精弓手と、それをやんわりとなだめる蜥蜴僧侶。

その様子を困った様子で見ながらも、どこか楽しそうに笑つている女神官に、やはり串焼き肉を頬張つている鉱人道士。

やがて話は進み、女神官が豆のステップを作り、妖精弓手が森人特製の保存食を出し、鉱人が対抗するように火酒を出したりと――。

最後には酔っぱらつた妖精弓手に絡まれながら、ゴブプリンスレイヤーが出したチーズを食べて蜥蜴僧侶が未知の美味さに思わず歓喜の咆哮を上げた。

まるで小宴会でも開いているような心地に思わず頬が緩むのを感じたが、それは肌に触れた鎧の内側部分の冷たさによつてすぐに引つ込んでしまつた。

思えばこうして、誰かと語らうのは随分と久しぶりな気がする。この異境――否。既にここが異境ではなく『異界』であることは、この10年を通して理解していた。

だがその10年の間ですら、こうして他の誰かと火を囲み、温かみの中で言葉を紡ぎ合う機会などはなかつた。

いや、正しく言えば、自分がそれを拒んでいたというべきなのかな……。

「ところで貴公。その雑嚢の中に入っている書物、それはもしや魔法の巻物か？」

「ああ」

「それもやはり、小鬼どもの殲滅用に揃えたのか？」

「無論だ」

不意に目に入った巻物の話題を機に、次々と話題を変えて話を続けていく全身鎧2人組。

主にデモンスレイヤーが質問し、ゴブリンスレイヤーが短く返事をするという単純なやり取りではあるが、僅か一月ほどとはいえ彼と組んでいる女神官としては、その光景にひどく驚いていた。

そして無論、その光景に何かを思わぬ妖精弓手ではなく、膨らませていた頬にさらなる空気を溜め、まるで不貞腐れた子供のように不機嫌な態度を表わしていた。

「まつたく……何よ、2人だけで話し込んだやつて。オルクボルグもオルクボルグだけど、やっぱラウグドリングもラウグドリングよ」「その……先程から思っていたのですが」

「ん？ なに？」

「オルクボルグと、ラウグドリングつて、どういう意味なんですか？」

「オルクボルグ、ラウグドリングは森人の伝説にててくる刀のことよ」

ふられた話題が森人の伝説に関係するものだと知ると、彼女は誇らしげにその薄い胸を張り、その細い指を指揮棒のように見立てて虚空を泳がせながら語る。

「オルクボルグはオルク……つまりはゴブリンが近づくと青白く輝いて、ラウグドリングは悪魔<sup>デーモン</sup>、もしくは所有者の敵が近づくと青白い炎

を宿して輝く名刀なの」

「鍛えたのはわしら鉱人ドウーフじやがの」

「確かにそうだけど、それなら名前の方も、もう少しまともなのを付けなさいよ。

『かみきり丸』だの『くだき丸』だのって、ほんつと鉱人ドウーフつて細工物以外のセンスはないのね』

うるせえやい、と火酒を豪快に呷いだ後、またも始まる鉱人と森人の口喧嘩。

とはいえるこの3日間、そのやり取りを見てきた彼らとしては、それが本気の罵り合いでないことはすぐに察せられ、女神官は苦笑いを浮かべ、蜥蜴僧侶は老爺のように「はつはつは」と笑うのみ。鎧2人組に至つては相も変わらず。

「そう言えば、拙僧も1つ氣になつておつたのだが……小鬼どもは、どこから来るのだろう」

拙僧は地の底に王国があると父祖より教わった――。

蜥蜴僧侶が吐き出した疑問は、なるほどこの一党にとつてはある意味で重要なものだろう。

これから彼らが相手するのは、まさしくその小鬼。ゴブリンだ。ならばこそ、その連中がどこから生まれ、やつて来るのかを知りたがるのは当然のことだ。

「わしらは墮落した圃人レーフ、あるいは森人エルフの成れの果てと聞いておるの」「酷い偏見ね。……あ、私は黄金に魅せられた鉱人ドウーフの成れの果てと聞いたわ」

「お互いまじやのお、結局は」

「人族の方は如何かな？ 神官殿」

「え、はい。えつと、確か……」

それぞれが種族内で伝えられている小鬼たちの伝承について語つた今、どれが正しくて間違っているのかは問題ではない。

どのような説が、どう語られているのか。それを彼らは知りたがっているのだ。

「そうですね……わたしたちは、誰かが何か失敗すると1匹湧いて出る、と聞いていますね」

「そりや大変じや！」

女神官の話を聞いて、鉱人道士がわざとらしげに大声を上げていつた。

「この耳長娘を放つておけば、うじやうじやと小鬼ばらが増えるということではないか」

「まあ、失礼しちゃうわね！」

フラフラと揺れながらも仁王立ち、夜風にその翠髪をなびかせながら鉱人道士を妖精弓手が見下ろす。

対する鉱人道士は気にした様子もなく、白い歯を剥き出しながら面白そうに笑っている。

話題を変えれば再開する両者のやり取りは、もはやこの短期間だけでこの一党の名物と化している始末だが、今回、それは長く続かなかつた。

「俺は——月から來た、と聞いた」

その理由は、ゴブリンスレイヤーだ。

ゴブリンと言えばこの男、と辺境ではもはや有名を通り越して代名詞化している彼が居るのだ。ここで何も答えないわけがなかつた。

だが、そんな彼が口にしたのは、先に答えた4人とはまた異なる、想像の斜め上をいく説であつた。

「月?」

「ああ。緑の方の月だ」

作業をする手を止め、人差し指で彼は天を指す。

その先に浮かぶ月の色は緑。淡く美しく、されどあの邪悪で汚らわしい、下卑た笑みを浮かべる小鬼どもと同じ——緑。

「それじや、流れ星は小鬼なわけ?」

「知らん。だが、月には草も、木も、水もない。岩だけの寂しい場所だ」

そこからゴブリンスレイヤーは、まるで普段の様子からは考えられない調子で続けた。

何もない場所から来たからこそ、他のものを欲しがり、それを持つ者を羨ましがり、妬む。

だから誰かを妬むとゴブリンとなる。只人の間で伝わる駄け話の一種だ。

「どなたから教わったのですか?」

「姉だ」

「お姉さんがいらっしゃるのですか?」

「ああ——いた」

いた、とその部分を強調した理由を、隣に座るデモンスレイヤーだけは知っていた。

あの日、初めてこの異界の土を踏み締めたあの時、彼はゴブリンに滅ぼされた村を見た。

攫われた3人の姉妹は無事救出できたものの、彼女らを除けば、あの村での生き残りは彼1人と言つても過言ではない。

事実そうだ。あの時村を見て回つたが、他に生存者の姿はなく、あるのは虐殺の末に残された無惨な骸の数々。

「少なくとも」

だから、彼はこうなつてしまつたのだろう。  
だから、彼はこうなつてしまつたのだろう。

まだ年若く、勇者や英雄を夢見る少年が、小鬼を殺すための装置となることを望んだ理由こそが、あの廃村の姿なのだ。

自分がもつと早く駆けつけていれば、などとは思わない。  
この世は總じて残酷で、どこまでも善や無垢に厳しいものなのだ。  
悪が蔓延り、されど榮えずは世の常であるように、善と無垢が真っ先に犠牲となるのも世の常なのだから。  
それでも――

「さて……それじゃあ最後はお前さんじゃな、くだき丸」「む……」

そう言えば、自分だけまだ答えていなかつたな。  
とはいえ、どう答えていいものかと彼は思った。

何せ彼のいた世界にはゴブリンなどという魔物は存在せず、また自分の故郷に伝わる伝承はおろか、故郷の名すらも彼は忘却してしまつている。

思考の末、唸り声を止めると彼は俯かせていた顔を上げ、変わらぬ嘴兜のまま、自身の持つ『小鬼故郷説』、あるいは『小鬼誕生説』を語ることとした。

「かつて友人にも言つたことなのだが、私の故郷にはゴブリンという魔物は存在しない」

「ほう？」

「うそ、ゴブリンつて一番多い魔物なのに？」

「ああ。だからこれは言い伝えや駄け話ではなく、私自身の持論ではあるのだが……」

昔、遙か時の果てともいえるほどの大昔、旅の助け手として喚んだ白靈の同士が語つてくれたこと。

この世総ての汚濁と不要物が流れ着く地に住まう異形の住人は、一部のデーモンスレイヤー<sup>デモンスレイヤー</sup>を殺す者の間では『ゴブリン』の通称で呼ばれ、忌み嫌われていたという話。

あの時はどうでもよいことだと脳の片隅に追いやっていたが、今思えばあの時の会話は、この時のためにあつたのやもしない。

「遙か遠く、この世総ての汚れが流れ着く地に住まう者たちが『ゴブリン』の渾名で呼ばれたようだ。」

貴公らの知る小鬼は、この世の汚濁が何者かの手によつて具現化した存在なのかもしけん」

汚濁はものを生み出さず、ただ万象一切を汚すだけ。

最後の語りを終えた彼らは、その後前もつて決めていた順で見張りつつ、夜天の下で眠りについた。

明日はいよいよ、件の群れの住処に突撃する。

そして、きつとそこに――『デーモン』が。

\*

ヒュウ——ツ。

と、風を切る鋭さと共に放たれた矢が、遺跡入り口前に立つ見張り番<sup>ゴブリン</sup>2匹の頭蓋を貫き、最後にその先にいた狼の顎を砕きつつ、その脳を抉つて射殺した。

人間などでは到底真似できない、文字通り弓の申し子たる森人でしかできぬ魔法めいた絶技。

その光景を目にして、流石のデモンスレイヤーも驚嘆せずにいられなかつた。

「凄いな」

「でしよう?」

充分に熟達した技術は、魔法と区別がつかないものよ、と。

薄い胸をふんと張り、得意げに語る彼女に、鉱人道士がため息と共に言つた。

「それを魔術師のわしの前で言うかね」

「一、一……」

そんな鉱人道士とは別に、ゴブリンスレイヤーは死んだゴブリンの数を数えつつ、その骸の傍に片膝をつく形で腰を下ろすと、帯に通していた複数の短刀のうち、1本を抜いて――。

「……っ!?

「おいおい……」

抜いた短刀をゴブリンの膨らんだ腹に突き立て、容赦なくその肉と皮を割いて内臓を取り出す。

何をしているのかと、デモンスレイヤーも最初は思つたが、顔を強張らせた妖精弓手と、嘆息している女神官の姿を見て、彼が何をしようとしているのか凡そ察し、その光景を見続ける。

やがて取り出した内臓を手ぬぐいに包むと、彼はそれを絞り、白い布は見る見るうちに赤黒く染まっていく。

「奴らは臭いに敏感だ。特に女、子供……森人の臭いには」

「げ……っ」

血塗れの手ぬぐいを片手に迫るゴブリンスレイヤー。

その姿から、彼が自分に何をしようとしているのかを察した妖精弓手は、逃げるよう背を向け、怯えた子供のように声を上げる。

「い……いやよ！ ちょっと、こいつ止めてよ！ ねえ！」

「慣れますよ」

継りついた先の女神官の言葉は、たったそれだけ。

蒼玉サファイアを思わせる青の双眸から光が消え、死んだ魚のような目のよう見えるのはおそらく気のせいではあるまい。

徐々に迫る血と臓物の臭いを放つ手ぬぐいと、それを手に持つゴブリンスレイヤー。

寿命を迎えた者のもとに訪れる死神の如く、ソレを塗りたくらんと迫るゴブリンスレイヤーに妖精弓手は顔をひくつかせていると、

「待て、ゴブリンスレイヤー」

すんでのところで鋼に包まれた右手が彼の行動を遮った。

「確かに小鬼どもは臭いに敏感だが、女子供にいきなり血や臓物を塗りたくれというのははどうかと思うぞ」

「だが、これをしなければ奴らはすぐに俺たちに気づく」

「であれば、他のもので臭い消しを済ませれば良い話だろう。例えば……これとかな」

そう言つて彼が割り込ませた右手を振り、皆の視線を集中させた。見ると彼の右手には白い蠅のような塊が握られていて、そこから奇妙な臭いが発せられているのが分かつた。

決して良い臭いとはいえないが、少なくともゴブリンの血と臓物で塗れた手ぬぐいでやられるよりかはマシだ。

「早くそれ貸して！」

そう言つて彼女は跳びあがり、身長差のあるゴブリンスレイヤーの右

手から奪うようにその白い塊を取ると、それを肌や装束に塗りたくり始めた。

「妙にべたべたするというか、何か粘液っぽいっていうか……。あ、でも、よく嗅いでみると何となく香ばしい臭いがするわね」

「ところで魔性殺し殿。貴殿が持っていた……アレは何ですかな？」

「白くべたつく何か、と私がいた場所では呼ばれていた。

ああ。別に卑猥な代物というわけではない。アレはただの——」

——大ナメクジの老廃物だ。

この後、白い塊の正体を明かされた妖精弓手は絶叫じみた悲鳴を上げ。

僅かに香る良い臭いを理由にゴブリンスレイヤーが「やはり塗るべきだ」と血塗れの手ぬぐいで彼女の体を染め、妖精弓手は二重で汚されるという末路を辿った。

## 10. 犯し、襲い、冒せ

産めや増やせや小鬼をさ  
産んで増やせば群となる  
産めや増やせや小鬼をさ  
続けて増やせば軍となる  
武器を持たせろ小鬼にさ  
持たせて教えりや兵士となる  
術を教えろ小鬼にさ  
教えて極めりや切り札さ  
産まれて増えた小鬼の巣穴、溢れた糞で汚れてる  
糞で汚れた巣穴には、毒がどんどん溢れてる

\*

白亜の壁に囲まれた狭道を、下りながら進んでいく一行。  
中途半端な剣で壁を叩きつつ、先頭を進むゴブリンスレイヤーと、  
その後に続く5人。

これまでに見たどのゴブリンの住処とも異なるその場を見回しつつ、ふと思いつくような口調で蜥蜴僧侶は呟いた。

「これは神殿だろうか？」

「この辺りの平野は、かつて神代の頃に戦争があつたそうですから」

蜥蜴僧侶の呟きに答える女神官。

壁に彫られた絵と、壁の造りから見ておそらく製作者は只人か。かつてはきっと人が住まう場所としても設計されたのだろうが、今やそれも小鬼どもののさばる魔窟と化している。

「時の流れは残酷なものですね」「残酷といやあ……」

「うえええ……気持ち悪いよお……」

横目で見た妖精弓手の口から、情けない声が漏れる。

だが無理もない。今の彼女の体躯には、所々赤黒い汚れがついていて、そうでない部分にもテカテカとした光を放つ白い粘液が付着しているのだ。

言うまでもなくそれは、入り口前で塗られたゴブリンクの血と、そして白くべたつく何かである。

「……臭いについては問題なしとして、魔性殺し殿。あの光はどうにかならんのですか」

「アレの効果は大して長くない。もう間もなく効果切れとなる、その時に光も失せる筈だ」

問題ない、と続けて言つたデモンスレイヤーを妖精弓手はキッと睨みつけ、さらにその前で先頭を進み続けるゴブリンクスレイヤーにも視線を向けて睨みつけた。

「あんたたち……後で覚えてなさいよ」

「覚えておこう」

「忘れるまではな」

片や真面目に、片やいい加減な調子で答える全身鎧2人組。

細かな違いこそあるものの、身形や会話内容などからこの2人はよく似ていると思う者もいるかもしだれないが、こうして両者が共に歩いている姿を見ると、まるで鎧が違う兄弟のようにすら見える。

「——待つて」

すると、先程の情けない姿から一変。

妖精弓手の鋭い声が一行の進行を止め、躍り出るようになに彼女の体が

前に出る。

そして屈み、這うように手を床に走らせるとやがて彼女は動きを止めて、確信したように小さく頷く。

「鳴子か」

「多分。真新しいから気づいたけど、うつかりしてると踏んでしまうわね」

「罠の類か……小鬼どもめ。小癪な真似を」「……」

妖精弓手は発見した罠に、鉱人道士は忌々しそうに咳きを漏らすが、ゴブリンスレイヤー、そしてデモンスレイヤーの2人はそれに対して奇妙さを覚えていた。

罠を張るということは、つまりそこそこの知性を敵が有していることの証明だ。

だが欲望に忠実な一般の小鬼どもには、無論そこまで高等な知性など存在する筈も無し。

であれば上位種。特にシャーマンあたりがいそうな気がするのだが……

「……トーテムはなしか」

「だな。故に奇妙でならん」

「トーテム……あ」

2人の咳きから唯一、彼らの言いたいことを察したのは女神官だった。

かつて彼女は、初めての冒険に向かった際、ある洞窟内でトーテムを見たことがある。

その際ソレに対して違和感を覚えつつも、初心者ゆえの知識不足と注意力不足が原因でそれを素通りし、結果、組んでいた一党のうち2人は死に、1人は冒険者として再起不能の状態にまで陥る事態となつ

てしまつた。

嫌なことを思い出した彼女の表情が曇るのを背に、鎧2人はさらに続ける。

「シャーマンがいないということは、これはまた厄介なこととなつたな」

「え、呪文詠唱者<sup>スペルキャスター</sup>がいないのは楽でいいことなんじやないの？」

「ふむ。どうも御二人は、その『いない』というのが問題と言いたいのでしような」

「そうだ」

そう言つてゴブリンスレイヤーは松明を前へと突き出す。

薄暗い闇の中に在つて、光はとても貴重なものだ。

魔性が潜む闇を暴くのは、いつだつて光や火の輝きなのだから。

「ただのゴブリンだけでは、こんなものは仕掛けられん」

「指揮者がおるつちゅうことか」

「以前、小鬼殺し殿は大規模な巣穴を潰したと伺つたが、その時はどのように?」

「焼り出し、個別に潰す。火をかける。河の水を流し込む」

手は色々だ、と。そこまで言うゴブリンスレイヤーに、妖精弓手が何とも言えない表情を浮かべていた。

たかがゴブリンにそこまでのことをするのか、と言いたげではあつたが、この場でその策に何か思う者はいても、実際に口に出す者はいないうようだ。寧ろ……

「素晴らしいな。巣穴ごと潰すか……私も、機会が来たらやつてみよう」

「おい、英雄様が凄く物騒なことを言つとるんじやが……」

「何であれ、ここでは使えん。……足跡は分かるか」

問う彼に、妖精弓手は首を左右に振った。

自然物の洞窟ならともかく、人工的に造られた石造りの床から足跡を探すのは、森人の目を以てしても不可能らしい。

だがここで、代わりに前へと出たのは鉱人道士であった。

彼はその小柄な体躯を屈ませ、石床に視線を這わせて凝視し、少しの間確かめるように見続けていると、やがて立ち上がってゴブリンスレイヤーたちの方を向いた。

「わかつたぞい、かみきり丸。奴らのねぐらは左側じゃ」

「……どういうことですか？」

「床の減り具合じやの。奴らは左から来て右に行つてから戻るか、左から来て外に向かつておる」

「床の減り具合でそこまでの分かるのか？」

「そら鉱人ドワーフだもの。石や鉄造りのモンならば、わしらに分からんことはないぞ」

「では……こちらから行くぞ」

そう言つて彼は松明を持つ手を右に向け、その燃え上がる先端をその先へと突き出した。

「ゴブリンたちは左側にいるんじゃないの？」

「ああ。だが、手遅れになる」

「……そうか」

そういうことか、と密かに納得するデモンスレイヤー。

ゴブリンどもの巣穴について、その共通点はこの10年を通してよく理解していた筈だった。

だが、理解はしていてもすぐにソレと結びつけ、察するには多少の時間と思考が必要なのだ。

それをこの若者は、ほんの一瞬のうちにソレと断定し、決断してみ

せた。

熟練の冒険者でもこうはいくまい。それは即ち、彼が本当にゴブリノンのみを討伐し続けてきたことの証明であり、そのためにあらゆる経験と知識、技術を培つてきたのだろう。

そして彼の言葉に従い、一行は左ではなく右側の通路の方を進んでいき、やがてソレが漂い始めた。

「ぬつ！」

「もう……!?」

鉱人道士が顔を顰め、蜥蜴僧侶がその長い口の先端を鼻穴ごと両手で覆う。

妖精弓手と女神官も口と鼻を手で押さえ、漂う臭気が入るのを拒んだ。

「なに、これ……？」

「……ビンゴ当たりだ」

「みたいだな」

ただ、やはり殺戮者スレイヤーズたちは平然としていた。

ゴブリンのみを専門に殺す若者は、それ故に幾度となく体験してきたが故に。

そして魔性殺しの英雄も、これよりも遙かにキツイ臭気を漂わす谷を歩き回った経験から耐性を得ている。

そうして鎧2人組は武器を取り、先にゴブリンスレイヤーが片足で眼前の木の扉を蹴り壊した。

吹き飛んだ扉の残骸が中に散ると、その後に中で何かがはねる音がした。

びちゃり、ぱちやり、と。まるで液体が宙を舞うようなその音は、およそ間違いなどではなく。

扉を開けたその瞬間より、漂う臭気は一層その濃さを増して彼らの

鼻をついた。

「これって……！」

「ゴブリンの汚物溜めだ」

「おぶつ——!?」

暴かれた室内に満ちるのは、文字通りの汚物の山。

氣色の悪い色をした液体に、ばら撒かれたように転がる糞、ゴミの数々。

その中に埋もれるように横たわる男性の死体の存在を確認すると、妖精弓手は遂に堪え切れなくなつた吐き気を、胃の中にあつたモノと一緒に吐き出した。

（男の死体……？）

そこで発見したモノを見て、デモンスレイヤーは違和感を感じた。何故、男の死体がここに放されている。

基本、ゴブリンは、只人であれ鉢人であれ森人であれ、男ならば肉と変えて喰らってしまう筈だ。

女ならば生かして凌辱し、孕み袋とするのが常ゆえ、生かされていても普通ではあるのだが……

「……、して……」

思考の途中、不意に耳に入つた声を聞き取り、彼の嘴兜がその方角へと向く。

その先には、壁の前で吊るされるように囚われた女が一人。

暗闇の地を進み続けたゆえに発達した双眸が映すのは、金紗の如き長髪を汚物で汚され、右半身をブドウのように青黒く腫らした森人の姿。

孕み袋か、あるいは玩具か。

どちらであれ、小鬼の楽しみのために生かされている、哀れな犠牲者の姿がそこにはあつた。

「……ころ、して……ころして……よ」

「分かつている」

「つ、ゴブリンスレイヤーさん!?」

横で剣を構えたゴブリンスレイヤーが前のめるように体勢を低くし、準備をしていた。

その傍で彼が何をしようとしているのかを気づいた——いや、勘違いしている女神官が声を上げたが、その時には既に、彼の体躯は汚物の原に飛び出していた。

「オルクボルグ——！」

後ろで呼ばれる妖精弓手の声。

悲鳴じみたそれを聞きながらも、彼の進撃が止まることはなく、その長剣の切つ先を煌めかせながら、

「ころして……こいつをお——！」

「——GORBBGッ!!」

そして囚われの森人が絶叫したと共に、その傍の影に潜んでいた者——ゴブリンが遂に姿を現わす。

毒塗りの短剣を逆手に構え、跳びはねる形でゴブリンスレイヤーに迫る。

肌に一撃受けければたちまち体躯を巡る毒に、だがゴブリンスレイヤーは当たる気などさらさらなく、見事に回避すると共に剣を振り下ろし、その脳天に刃を叩き込んだ。

響く断末魔の叫び。されどその死を悼む者などはなし。

汚物の海に沈んだ小鬼の死体に目もくれず、ブツブツと呟きを続け

る森人に、ゴブリンスレイヤーは傍まで寄ると共に彼女を拘束から解放し、抱きかかえる。

「何を勘違いしているのかは知らんが」

森人を抱く彼が、一体何を考えているのかは分からぬ。  
だが少なくとも、彼が森人の言葉を真に理解し、影に潜む脅威を討つため行動したことについては、今しがた証明された。

「俺は——ゴブリンを殺しにきただけだ」

その言葉は、だが今の森人にとっては「助けにきた」の一言よりも嬉しく、怒りと共に抱き、欲し続けてきた言葉そのものだった。  
殺してよ、あいつらを——そう呟く彼女を汚物溜めより連れ出し、外の通路にまで運ぶとそこで寝かせる形で彼は下ろした。

「すぐに水<sup>ボーション</sup>薬を……！」

「いや、これほど弱っていると喉に詰まるやもしれませぬ」

そう判断した蜥蜴僧侶は、視線を再び女神官へと向ける。  
彼女は神官だ。当然、奇跡の類も神殿で授かっている。  
彼の視線に込められた意味に気づくと、彼女はすぐに奇跡の行使のための詠唱に入る。

「《いと慈悲深き地母神よ、どうかこの者の傷に、御手をお触れください》」

紡がれる言葉の1つ1つが、天上の存在に対する祈りそのもの。  
そうして紡がれた祈りを神が聞き届け、それに応えるように奇跡がもたらされる。

傷つき、疲弊していた裸身を優しい光が包む。

傷も幾分か消え、どうにか死は回避できたと安堵する神官と僧侶だつたが、その間に割つて入る者が1人。

「まだだ」

現れたのは全身鎧の戦士。  
デモンスレイヤー

鎧を鳴らして屈む彼の手には、いつの間に出したのか金属細工のタリスマンお守りが握られており、それを掴んだ右手を森人の腹に乗せ、嘴兜の内側で何かを呟く。

「——《解毒》」

発動は一瞬。淡い光と共にもたらされた奇跡は、森人の体躯に残っていた僅かな毒気も消し去り、真実今の彼女を脅かすものはなくなつた。

「……奇跡の類が使えたのですか」

隣で蜥蜴僧侶がその大きな目をギョロリと剥き出し、驚きに満ちた目で見ている。

「ああ」

簡素な返事をしながら立ち上がると、握っていたお守りを虚空に戻し、呟く。

「必要だつたからな。……あの地では」

呟く声に含まれた感情を知る者は、この時誰もいなかつた。

\*

それから後、彼らは休憩を挟みつつ遺跡内を進み続けた。

先に寄つた汚物溜めから見つけた、あの森人のものらしき雑囊の中にあつた地図を頼りに進んだおかげで、彼らの進行は予定よりもずっと捲った。

その森人も蜥蜴僧侶が喚びだした奇跡『竜牙兵』ドラゴントウースウォリアーの手で森人たちのもとへと運ばれ、余計な心配はこれで皆無となつた。

そして間もなく、地図の通りに進んだ彼らを迎えたのは回廊だった。

吹き抜けの回廊は目を見張るほどに巨大で、見上げた先の穴はきっと地上にまで至つて いるのだろう。

何たる技術力か。これほどの巨大なものを建てるのに、一体どれほど歳月を費やしたことか。

だがそれ故か。そのかけた歳月を嘲笑うかの如く、このうちに蔓延る小鬼どもの数をして、妖精弓手が怒りに耳を逆立てたのは。

「何よ……これ」

「どうした」

「……アレを見て」

そう言つて彼女が指を差し、示した先に見えたのは——緑だつた。木々や草花の緑などではなく、凶惡な毒の類が持つ同じ色合いの緑色を備えた、小鬼の群れ。

その数、ざつと見たところでおよそ——100匹。

「そこそこに居るな」

「そこそこつて……100匹はいるわよアレ! あんな数の中に突入したところで、勝てっこないわよ」

「それでもない」

「え?」

いい策がある——。

そう口にしたゴブリンスレイヤーの策を聞き、一同は了承したと頷き合う。

しかし、唯一人だけは頷くことはせず、言葉を以て彼に意見を発した。

「それならば、私も一手加えさせて貰おう。その方が、より効率的だ」

それは言うまでもなく——デモンスレイヤーであった。

「《呑めや歌えや酒の精。<sup>スピリット</sup>歌つて踊つて眠りこけ。酒呑む夢を見せと  
くれ》」

詠唱の後、口に含んだ酒を霧と変えて噴き出す鉱人道士と。

「《いと慈悲深き地母神よ、我らに遍くを受け入れられる、静謐をお与  
えください》」

続く形で祈りを捧げ、先とは異なる奇跡を願う女神官。  
《酔酔ドランク》と《沈默サイレンス》。

片や酒の酔いによる眠気を促し、片やこの世から音を奪い去り、そ  
の代わりに静謐を与える業。

2つの魔法と奇跡の合わせ技により、下層のゴブリンたちは覚めか  
けた眼りへと戻され、音もなく微睡みの海へと沈んでいる。  
と、ここまでやつたなら本来であれば、ここから残る4人による無  
音の処刑劇が行われるのだが、それをデモンスレイヤーが止めたの  
だ。

もつといい手がある——そう述べた彼は壁の上に立つと、虚空から  
木の杖を取り出して、その先端を眼下で微睡む小鬼たちへと向ける。

「では、始めるぞ」

「ああ、任せた」

後ろに控えるゴブリンスレイヤーたちへと一度振り返り、確認した後、彼は本格的に詠唱を開始し始める。

とは言つても、この世界のものとは異なり、彼らの魔法は長い詠唱を必要とはしない。

必要なのは大規模な奇跡くらいではあるが、今回行使することは奇跡ではないのでその心配もない。

「——『死の雲』」

紡がれた魔法名と共に、杖の先端のさらに先より変化が生じる。何もない虚空に生み出されたるは、炭よりも黒く、何よりも悍ましい汚濁を備えた雲。

まるで汚濁を氣化させればこんなものが生まれるのではないかと、そう思わざるを得ない代物はやがて高度を下げ、下層にいる小鬼たちの中へと墮ちていった。

「——ツ、——!?

「——ツ?  
!!?」

瞬間、突然己の内側を蝕む痛みに耐えかね、ゴブリンたちが目覚めと共に絶叫した。

だが響かない。当然だ。眠気は消えても『沈黙<sup>サイレンス</sup>』による無音状態はまだ続いているのだから。

「——『死の雲』」

だがデモンスレイヤーは容赦しない。

続けて放つた魔法も、やはり同じものだ。生み出された黒雲は、先

に生み出されたものと同じく落下し、

## 「——《死の雲》」

やがて落下した黒雲が撒き散らす病魔は、その内側からゴブリンたちの身を蝕み、冒し、喰らい尽していく。

元より汚れで満ちた存在であろうとも、真に穢れたる存在ではない。

この世総ての穢れを受け入れた女のデモンズソウル魂魄より生み出された魔法に抗える不淨など、存在しない。

## 「——《死の雲》」

そして最後の魔法を使いし終え、暫くの後に下層に満ちていた黒雲は晴れた。

欠片もなく失せた黒雲の後。そこに残るのは病魔に冒され、死に絶えた100を超える小鬼の死体。

一切の疲弊なく、ただ杖を振るつて口より呪文を紡ぐだけで、これほどの命を奪つて見せた男。

そんな彼の姿に、ゴブリンスレイヤーを除く一党の皆は、驚愕と恐れの視線を向けていた。

「ちよつ……大丈夫なの、下は！」

「問題ない。黒雲が霧散した以上、疫病魔が残留している可能性は皆無だ」

「そういうことじゃなくて……！」

妖精弓手の言いたいことは既に察していた。

大方、あんな危険なものを使いして、もし自分たちにまで及んだら、とか何とか言うつもりなのだろう。

——だが。

「それがどうしたというのだ」

相手は小鬼、ゴブリン。魔性のものだ。人に仇なす魔物である。容赦など要らず、情けの一欠けらもかけてやる価値もなし。ただ1匹の例外なく、その総てを皆殺すのみ。

そう——それ即ち、

「魔性デーモンも、小鬼ゴブリンも。

人に仇なす輩に例外はない——鏖殺マラセイである」

取り出した香料によつて魔力を補給し、吐き出した言葉と共に彼は瓶を投げ捨てた。

「——ORG G G R G A A R R ツ!!」  
「——G O R B B B G G A A A A ツ!!」

「——ツ!?

直後——下層の方より咆哮が轟いた。

下層の一部に穿たれた、洞穴の如き通り口。

そこを大きな足音と共に進み来たる、巨大な影が2つ。

暗闇という衣を脱ぎ捨てて、光のもとに姿を晒したのは、言うまでもなく異形——『祈ノンフレイヤーらぬ者』。

青黒い巨体。額に生えた角。手にした巨大な戦鎧。

その異形の存在をして、まず最初に口を開いたのは妖精弓手。

「……『人喰い鬼』！」

そしてもう1つ、巨影が光のもとに現れる。

先に現れたオーガが、巨大で凶悪な印象を与えるならば、こちらの方は巨大で——そして醜悪だ。

見上げるほどの巨体は鍛えこまれ、しかしそれは隣の人喰い鬼とは異なり、無駄な盛り上がりを省いた筋肉だ。

肌の色は緑、けれども森のそれを思わせる深緑色に染め上げられ、顔付きも同族とは異なり、恐ろしくもどこか端正だ。

だがそれを台無しにするかの如く体のあちこちには只人、森人などの全裸の女性が太縄で縛り止められ、腰に巻き付けた長大な布には多数の盛り上がりが見られた。

「ゴブリン……!?」

「……ああ。だが、あれは……！」

産めや増やせや小鬼をさ  
産んで増やせば群となる  
産めや増やせや小鬼をさ  
続けて増やせば軍となる  
神さまが作つた怪物さ  
そいつの名前は——

——『小鬼<sup>ゴブリン</sup>巨雄<sup>スタッフ</sup>』

## 11. 鬼たち

曰く——その剛き一撃は堅固なる騎士の盾を担い手ごと碎き。

曰く——その魔術は百智を極めた術者を返り討ちにするほどに凄絶。

人の身では勝つことの叶わぬ恐ろしき存在。

そう語られる者は数多く存在するが、かの怪物もまた、その存在の一角であることを、この語りは証明していた。

人喰い鬼——『オーガ』。

人を喰らいて厄災を撒き散らす、紛れもなき混沌の使徒たる悪鬼の出現に女神官は錫杖を握り締めつつ歯を鳴らし、妖精弓手や鉱人道士、蜥蜴僧侶すらも格上の敵を前に、最上の警戒にて応じる。

「……ゴブリンか」

「ほう……」

だが、その中でただ2人だけだが違った。

既にこの四方世界にて、その強大さを示しているオーガの出現など知らんとばかりに無視し、その兜越しより放たれる計4つの視線は、オーガの隣に仁王立つ存在へと向けられていた。

まず、繰り返すが、ソレは紛れもなくゴブリンであつた。

醜惡の権化ともいいくべき同族のゴブリンどもと比べ、恐ろしさを滲ませながらも端正とすら言える顔立ちを有した、異形の巨鬼。

腰布以外に何もまとわぬという点では、従来のゴブリンと大して変わらぬのだが、その巨体については言うまでもなく脅威であり、そして——。

「捕えた女を縄で縛り上げ、張り付けるように自身に密着させる……隨分と悪趣味な鎧だな」

「肉盾というものを奴らは用いる。おそらくは、その応用だろう」「そういうものか」

「ああ」

太縄で縛りつけ、密着させている多数の囚女で出来たソレは、ゴブリンスレイヤーの言葉を借りるならば、肉鎧ともいうべき代物か。悪趣味かつ醜惡であることに変わりはないのだが、それにも劣らず存在感を示し、視線を集めるのは腰布を盛り上げる——。

「つ、貴様ら！ この我を前にしてその態度、侮っているのか！」

そんな思考を横から吹き飛ばすように邪魔したのは、突如上げられたオーガの怒声だ。

前者4人は己に対しても恐れの視線を向けているにも関わらず、残る2人は恐れるどころか己の存在を認知すらしていないといった有り様に、彼も我慢ができなくなつたようだ。

無論、存在そのものを認知していなかつたわけではない。

ただ、片方は小鬼以外に興味はなく、もう片方もオーガなどという存在はこの10年で数多く相手してきたゆえ、今さら意識を割く必要もないと判断したまでのことだった。

「私は魔神将より軍を預かり、この地に遣わされた者なるぞ！」  
「知らん」

高らかなるオーガの一声を、だがゴブリンスレイヤーはひどく冷めた声でもつてバツサリと切り捨てる。

「貴様も、魔神将とやらも知らん」  
「オーガなどはこれまでに幾度も相手してきた。  
既知の敵より、未知の敵へと意識を割くのは当然であろう  
「ヌウオオオオオオオオオオオオツ!!」

大気を震わさんばかりの怒氣を込めた咆哮と共に、手に握る戦鎧を

白亜の石床へと叩きつける。

砕き割れて隆起した石床の様は、彼が抱いた怒りの度合いの顕れである。

「ならば、その身を以て我が威力を知るがいい！」

青黒い、人の頭など容易く握り潰せそうなほどの巨大な手を掲げる  
ように伸ばすと、その掌中より紅蓮が灯る。

『カリブンクルス<sup>火石</sup>……クレスクト<sup>成長</sup>……』

灯った紅蓮はやがて巨大化し、石ころほどしかなかつたそれは今  
や、巨岩もさながらの大きさを得て、灼熱を発していた。

あらゆる魔法の中において、もつとも代表的な攻撃魔法の1つであ  
り、そしてそれゆえに最も知られているその術の名は――

『火球<sup>ファイアボール</sup>』が来るぞおつ!!

『――投射<sup>ヤクタ</sup>』!

魔術師である鉱人道士の一聲が放たれると共に、死をもたらす灼熱  
の大玉が放たれる。

「散つて！」

焦りを滲ませる上擦つた声で、妖精弓手は一党<sup>パーティメンバ</sup>の仲間たちへと告げ  
る。

特定の相手に対し必中の効果を持つ魔法ならともかく、広範囲を  
巻き込む攻撃ならば一塊にならず、散開して避ける方が確実に安全  
だ。

それは『火球』に関しても言えることではあるのだが、今回ばかり  
はそうではないと、鉱人道士<sup>専門家</sup>が強く否定した。

「無理だ、耳長の！ あんなデカいのじや、散つたところで同じ——

！」

「——私が出よう

だが、その否定の言葉を無視し、前に出た人物がいた——デモンスレイヤーだ。

先頭に立つ彼の手には、先程とは異なる盾が1つと、やはり同じく、先程にはなかつた盾がもう1つ。

攻めの武具を仕舞い込み、守りに特化した武装で仁王立つ彼はそのまま2つの盾を石床に突き立て、固定し、

「ぬ、ウ——ツ！」

受け止める。

2つの盾——『紫炎の盾』と『柴染の大盾』で以て極大の火球を受け止める彼。

共に炎に對して高い耐性を誇る武具とはいえど、その熱の總てを防ぎ切れるわけではない。

伝わる灼熱は彼の身を灼き、苛み、苦痛をもたらす。

されど彼は一切苦悶を漏らすことなく、ただ耐えに耐えて、耐え続ける。

「デモンスレイヤーさん！」

「——」

ならばこそ、彼女が準備を整える時間は得られた。

灼熱に苛まれる彼へと声を発したのは、後方で錫杖を翳すように構えた女神官。

彼女が如何なる術を用いるのかについて、その総てを把握しているわけではない。

だが、あの偏屈な冒険者が引き連れて、共にゴブリン狩りを行わせているのなら、相応の術がある筈だ。

でなくばあの目が、あそこまで決意に満ちているはずがない。

「——任せた……！」

そう言つて大盾を両手に、デモンスレイヤーが横へと大きく跳ぶ。そうすることで、先程まで道を遮つていた障害物が消えたことにより、火球は進撃を再開する。

立ち塞がる一切を灰塵と帰さんばかりの勢い。

紅蓮の死を前に立つ女神官は、構えた錫杖を一掃強く握り締め、祈りを天に捧げる。

「《いと慈悲深き地母神よ、か弱き我らを、どうか大地の力でお守りください》……！」

——『聖壁』！  
——『聖壁』！

少女の祈りが天に届き、そこに座すであろう至高の存在が奇跡をもたらす。

不可視の、しかし確かにそこに存在する守護の壁によつて灼熱は阻まれ、それは今度こそ勢いを失い、壁諸共散り失せた。

壁の消失と共に吹き抜ける熱風。

本体ほどではないとはいえ、それに含まれる熱は尋常ではない。

その証拠に、先の『死の雲』によつて息絶えたゴブリンたちの骸は干からびて、吐き出された血は綺麗に乾き切つっていた。

「はあ……はあ……！」

しゃん、と錫杖を鳴らして彼女の体躯が膝をつく。

並外れた破壊の力を真正面から受け止めたことと、その破壊を防ぎ切るに足る奇跡を祈つたことによる精神力の消耗。

それでも、まだ戦えないわけではない。

奇跡1つで済んだのは、偏にデモンスレイヤーが先に盾で火球の威力を削つてくれたからだ。

そして敵の初撃が終わつたとなれば、その隙をついて反撃に出ぬ冒険者ではない。

「ドラゴントウースウォリアー『竜牙兵』を出せ。手が足らん」

「承つた、小鬼殺し殿！」

パン！ と力強く両掌を合わせる——合掌。

続けて地に触媒たる小さな牙をばら撒くと、蜥蜴僧侶の口より詠唱の詞が紡がれる。

「イワナ『禽竜の祖たる鉤にして爪よ、四足、二足、地に立ち駆けよ』！」

ばら撒かれた牙は、瞬く間に膨張して形を変え、そこに骨身の小竜が顕現する。

「リンタオロン『伶盜竜の鉤たる翼よ。斬り裂き、空飛び、狩りを為せ』！」

続けて紡がれるのは シャープクローラー『竜牙刀』の祈祷。

掌に握り締めた牙が、先の竜牙兵同様に膨れ上がり、竜の牙が如き曲刀へと変じる。

それを竜牙兵に握らせると、自身もまた装備していた小刀を抜こうとし、

「これを使え」

不意にデモンスレイヤーより放られた一振りの剣を受け取ると、その鞘に納められていた剣を抜く。

どこにでもありそうな、ひどくありふれた形状のロングソード長剣。

しかし、鍛えこまれた証なのか、その刃には早く敵の血を啜りたいとばかりの、妖しくも鋭い輝きが湛えられていた。

「その小刀が名刀の類ならいいが、そうでないならそれを使うといい。斬れ味については、保証しよう」

「……感謝致しますぞ、魔性殺し殿」

抜刀した長剣を片手に、蜥蜴僧侶がオーガと小鬼巨雄を睨み据える。

相手は2匹。それも巨躯ときた。であれば、攪乱させつつ攻め続けるのが最良か……！

「いや、片方は私が受け持つ」「む？」

考えていたことが口から漏れていたのか、横でデモンスレイヤーがそう言つたのが聞こえた。

彼はそう言つているが、片や凶悪無比なるオーガ、片やゴブプリンとはいえ未知の敵。

どちらも並大抵とは思えぬ強敵であることは間違いないだろうに、それを片方、1人で相手するなど正気の沙汰ではない。

「私があの新種のゴブプリンを相手する。だから貴公らは、あちらのオーガを」

「できるのか」

そう訊ねるのはゴブリンスレイヤー。

相手がいつまでも待つてくれるわけではないが、それでも確認を取るのは、一時的とはいえ、一党の長たる故か。

あるいは、確実に片方を相手取れるかどうかを尋ねてているのかもしれないが、どちらであっても問題ではない。

「できるとも」

そういうデモンスレイヤーの声は、どこまでも真直ぐだった。  
相手がいかに強大であろうとも、それこそ世界を滅ぼすに足る厄災の具現であろうとも。

敵が1匹であるというのなら――

「一対<sup>（タイマン）</sup>に限れば、相手が如何なる輩であろうと、討ち勝てる」「……」

その沈黙の中で、彼は何を思ったのかまでは分からない。  
ただ、彼はデモンスレイヤーの言葉を信じ、抜いた長剣と円盾を構えてオーガの方に向き直ったのだけは事実だ。

そんな彼の行動を見つつ、蜥蜴僧侶が他の仲間たちへ向けて指示を飛ばす。

「拙僧と竜牙兵、小鬼殺し殿がオーガを！ 魔性殺し殿があの小鬼めを相手取る！ 術師殿、野伏殿、援護を頼む！」

「おうよ！」  
「任せて！」

力強い言葉を以て、妖精弓手と鉱人道士が応じる。

種族の格という点と、先の発言からしてこの遺跡に巢食う混沌勢力の長はあのオーガだ。

知性や統率力に秀でた者が群れや軍の長となるのは当然のことであるが、そこはやはり混沌。求められる条件に力量の高さは確実に存在するだろう。

であれば、例え個々の力が劣ろうとも複数人でのオーガに当たつて貰つた方がいい。

新種とはいえ、相方はゴブリン。一騎討ちに持ち込めば、油断や慢

心さえなければ勝てない相手ではない。

「さて……」

構えた盾と直剣を手に、件のゴブリンへと向き直るデモンスレイヤー。

対する相手方はやはり変わらず不敵に笑つており、巨躯に縛り止めた数人の女たちで出来た肉鎧を揺らしながら、ずんずんと歩み進み始めた。

巨躯というのは、ただそれだけで充分脅威に値する。

巨体ゆえの重量と、それを利用した破壊力。

広範囲の攻撃に、尋常ならざる耐久性。……どれも軽視してはならない要素だ。

(さら問題は……)

ここでさらに厄介となるのは、あの肉鎧だ。

太繩で女たちを縛り上げ、簡単に固定しただけの、正直鎧と呼ぶことすら烏滌がましい代物。

同じ混沌や、あるいは混沌に属さぬ野良の魔物ならば問題ないだろうが、これが人間相手に用いられたとなれば話は別だ。

ゴブリンは、時たま攫つた女子供を盾に縫い付け、人の村を襲う際の武具として用いることがある。

それは一般には『肉の盾』と呼ばれ、人間——特に神官や司祭など善心ある者に対しても、非常に高い効果を發揮する。

もしもその盾を気にすることなくゴブリンの群れに突っ込めるような輩がいるとすれば、その者はきっと他者のことなどどうでもいい人面獣心か、あるいは生糀の外道かのどちらかであろう。

最悪の場合を考えつつ、どうにかあの鎧を外させた上で、あのゴブリンを倒す手はないかと思考を巡らせる。

だが、相手の都合などを考えないのはいつの時代、どの勢力も同じ

ことであり。

そしてそれがゴブリンであるのなら、尚更であつた。

「G O R B B G ッ!!」

身を固める太縄の内、その1本を解いて手に携えると、長く太い剛腕で以て勢いよくそれを回し始める。

無論、太縄で縛り止められていた女性諸共だ。

「……っ！」

「G O O O O R B ッ!!」

ぐしゃり――！

耳にするのも悍ましい音と共に、太縄が石床に叩きつけられる。

鉄鎖にも劣らぬ頑丈さを攻撃に転用した、極太の鞭。

当たれば例え全身鎧を纏っていてもただでは済まないであろうことは容易に察せられるが、問題はそこではない。

太縄での叩きつけの際、縄に縛り止められていた女性の1人が潰れ、即死した。

熟れ過ぎた果実のように原型を失った女性の姿は、真つ当な人間であれば、この時点での戦意を大幅に削られてしまつていただことだろう。この一党<sup>パーティ</sup>と例外ではない。

女神官や妖精弓手ら女性陣は言うまでもなく、冒険者として経験を積んでいる鉱人道士や蜥蜴僧侶も、彼女らほどではないにしろそうなつてしまふ可能性がある。

唯一、ゴブリンスレイヤーだけは変わらぬ姿勢のまま、女囚を救い、その上で小鬼<sup>このゴブリン</sup>巨雄を倒す策を練られるかもしれないが、何であれ彼らにコレを相手させなくてよかつた。

「ん……？」

そう考えている最中、彼の瞳が不可思議なものを捉えた。

いや、ソレ自体は彼にとつてひどくありふれたものだつたのだが、この場所で発生したという点から不可思議という言葉が浮かんだのだ。

ソレは、ソウルであつた。

潰れた女性の体より、まるで湧き上がる湯水の如く出現したソウルはやがて宙を漂い、太縄を伝つてその先——小鬼巨雄の口内へと吸い込まれていく。

「——ああ」

そこで彼は確信した。そして忘れかけていたことを思い出した。そもそも、今回の冒険は国王よりもたらされた『未知のゴブリン』が切っ掛けとなつてのもの。

かつての調査クエストの最中に出くわしたゴブリンがデーモンであつたように、今回の『未知のゴブリン』、つまりこのゴブリンスタッフ小鬼巨雄ゴブリンスタッフがデーモンである可能性も皆無というわけではなく、そして今しがたの光景から、もはや疑う余地はない。

“このゴブリン小鬼巨雄は——『デーモン』だ”

そうと確信すると共に、腹底よりドス黒く、そして熱いものが込みあげてくる。

怒りと、憎悪。

歓喜と、興奮。

デーモンという存在そのものを殺し尽す、一種の殺戮機構へと自身を変じさせる。

敵が次撃に移る前より早く駆け出し、構えた直剣を槍の如く突き出し、太縄で覆われていない肌へと突き立てる。

「GORRBツ!？」

けたたましく上がる悲鳴。

痛苦に歪まされた小鬼巨雄の端正な顔は、今の一撃が確実に効いていることを明確に表わしていた。

5年前の『小鬼溜り』はゴブリンの集合体であり、体躯の構造の違うという点こそあれど、この程度で悲鳴を上げるとは。

与えられた痛みが怒りと変わつてか、小鬼巨雄は太縄を握る手を離すと、剣を突き立てた敵対者を潰さんと剛拳を繰り出す。

勿論、デモンスレイヤーもここで追撃をかけるような愚を犯すことなく。

突き立てた剣をすぐさま引き抜くと、引き締まつた小鬼巨雄の腹部を跳躍台代わりに蹴り上げて、再び巨雄との間に距離を取る。

振るわれた拳は空を虚しく切ると、重量に任せた一撃だったのか、小鬼巨雄の巨体がバランスを崩し、縛り止めた女囚たちを潰しながら石床の上にゴロンと転がり伏せる。

「つ、ええい、この役立たずがアツ!!」

すぐ隣の戦場でゴブリンスレイヤーたちと戦闘中のオーガが、その様子を見てか顔を紅蓮に染めて怒号を飛ばす。

「女の臭いを嗅ぎつけて、駄々を捏ねるゆえ連れてきてやつたというのに……。」

やはり奥で繁殖に専念させるべきであつたか……！」

戦鎧を振るい、強烈な衝撃波を生み出しながら剛撃を放つオーガに、ゴブリンスレイヤーたちは上手く立ち回りながらオーガに攻撃を仕掛け続けている。

妖精弓手の矢が気を引きつけ、鉱人道士の魔法による石弾が顔や目などの急所を狙い撃つ。

足元では蜥蜴僧侶と竜牙兵、そしてゴブリンスレイヤーが剣を片手に攬乱させつつ、その柱もさながらの太い両足を切りつけている。矢も石弾も、そして幾多の剣撃さえも、きつとオーガにとつては蚊

に刺された程度のものでしかないだろう。

加えてアレラには強力な自己再生能力がある。例え目玉を潰しても、剣や矢を引き拔かれ、眼球がある程度形を保つていればすぐに元に戻ってしまうほどだ。

あの再生能力にはデモンスレイヤーも手こずらされ、以降オーガ種を相手する際には、必ず大得物を以ての巨大な一撃で仕留めると決めている。

白磁の女神官は除くとして、同じ銀等級であるあの3人の中で、はたしてあのオーガを再生不能に陥れるだけの破壊力を持つ一撃を繰り出せる者はいるのだろうか。

あるいはゴブリンスレイヤーあたりが、何かしらかの手を既に講じているのかもしれないが……。

(まあ、どちらでもよかろう)

ともかくこれでこちらは終いだ。

あとは未だ起き上がることの叶わない小鬼巨雄の、その首を断つて命を完全に絶つだけ。

握る直剣を虚空に戻し、代わりに止め用に取り出した『肉切り包丁』を肩に担いで歩き出す。

すぐにあちら側へ加勢に向かわねばならないので、彼の足取りは早く、すぐに担いだ巨大包丁を振りかぶり、血に塗れたその大刀を首に狙い定める。

「させるか、鎧の只人ウツ！」

瞬間、さらなる絶叫が回廊内に轟響する。

見ればオーガがこちらの様子を横目で窺っていたのか、憤怒を露わに戦鎧を振るつて、こちらへと走り迫つてきている。

新種とはいえ、たかが配下の一ゴブリンを救おうとするなど、普通ならば絶対にあり得ない。

よくも悪くも、混沌の連中は基本自己中心的であり、ゴブリンなど種族の性質に由来するものもいれば、その圧倒的な力を起因とする者もいる。

オーガの方は、種族由來の傲慢さもあるであろうが、やはりその身上に備わった圧倒的武力が大元と見るべきか。

とにかく、基本は主たる魔神王以外に關しては、自己中心的な思考を持つ混沌の眷属が、こうも感情を露わにして仲間を助ける光景はひどく珍しい。

それはこの10年の間、ただの1度も見たことのないものであり、特に混沌勢力との戦いが増加したこの5年の間でも、全く目にすることのなかつた代物だ。

（だが、もう遅い――！）

オーガが辿り着くよりも早く、振りかぶった巨大包丁を勢いよく振り下ろす。

もはや大刃の一撃を阻む者はいない。

例えオーガが辿り着き、その戦鎧で自身を殺しにかかるとも、その時には既にゴブリンの首は胴と別たれている。

5年——あの北の地で経た繰り返される戦いの日々を思えば、豆粒程度にも及ばない歳月ではあるが、常人からすれば決して少なくない時間を掛けて見つけ出した、四方世界で2匹目の『異形のデーモン』。その命を、存在を此処で絶ることに対する歓喜を感じながら、いよいよデモンスレイヤーは包丁の大刃で小鬼巨雄の首を両断しかかる。

「——GORBツ！」

そしてソレは——暗闇より放たれた一振りの剣によつて、遮られ

た。

投擲された剣の存在に気づいたのは、ほんの一瞬前のこと。

されど既に武器を構えた状態からその投擲を防ぐことは容易であり、すぐさま彼は包丁を盾代わりに用いてその剣を弾く。しかし、

「オオオオオオオオオオオオオッ!!」

しかし、その後に繰り出されたオーガの戦鎧の対処までは回らず、その剛撃をまともに受ける形となつた。

「がふつ……!?

壁に叩きつけられ、全身を強烈な痛みと衝撃が駆け巡る。

久方ぶりに味わった痛み。並みの輩であれば即死していたであろうオーガによる憤怒の一撃を受けて生きていらるのは、偏に人外の域にまで達した彼の肉体の頑強さゆえか。

だが、それを知らぬ者たちからすれば、今の彼はまさしく危機的状態と映つただろう。

「ラウグドリング！」

「くだき丸！」

強烈な一撃を受けてなお、五感が正常に働いているのは奇跡か、あるいは頑丈さゆえの当然か。

耳に響く己の別名を呼ぶ声と、瞳に映る一時の仲間の姿から、妖精弓手や鉱人道士に焦りが生じたのが察せられた。

危機的状況だからこそ、冷静さを保たなければならぬ。

だが、人は勿論、鉱人や森人も完璧な生物ではない。

仲間が危機に陥れば、焦つて冷静さを欠いてしまうのは当然で、だがその当然がこれまでに幾多の冒険者を殺してきた。

自己以外の者のことを考える、祈る者たちの良点であり、欠点。

ブレイヤー

どうにかこの状況を打破せねばと、軋む体躯を起き上がらせて、再びオーガと小鬼巨雄のいるであろう方角へ視線を向けると、

(……！)

そこに、1匹の鬼がいた。

毒々しい緑の体躯は、目測だが自分と同等程度の背丈か。その逞しい肉体を覆うように纏われているのは、革や鉄など、継ぎはぎだらけの歪な鎧。

されど腰に差し、手に携えた武具の数々と、何よりその佇まいが、ソレが単なる祈<sup>ノンブレイヤー</sup>らぬ者ではないことを明確に証明していた。

「ゴブ、リン……!?」

もう一体いたのか——その事実に、デモンスレイヤーは少なからず己の愚かさを恥じた。

ここは敵陣地。であれば、切り札の類に1つや2つあつてもおかしくはない。

オーガと小鬼巨雄。明らかな大物2匹が出てきたことで、これで全部かと確信してしまったのがいけなかつたか。

先の投擲術と、何よりその佇まいからしてあの小鬼は間違いなく強敵だ。

加えて、先の小鬼巨雄の吸魂の際に感じた独特の気配が、あの小鬼からも僅かながらに感じられる。

間違いない——アレも『デーモン』だ。

土地の伝承や人々からの畏敬の念を糧や基として変生するのがデーモンならば、あの個体は一体、何のゴブリンクの伝承を骨子に定めて誕生したものなのか。

「肝を冷やさせておつて……！」

ズシンツ——と。

炎が如き憤怒の貌を引つ込めて、しかし変わらぬ恐貌でもつてデモンスレイヤーを見下ろすオーガ。

既に戦鎧は振りかぶられ、いつでも彼を叩き潰せる準備を整えていた。

「団体ばかりデカくて、女と聞けばすぐに出たがる阿呆だが、アレでも我らには必要な奴よ。

それを殺めんとしたのが貴様だ。生かす余地などないと知れ」

元よりそのつもりもないくせに、と頭の中で思つたが、それを口にしたりはしなかつた。

挑発や煽りの使い所は弁えている。ここでそれらを使つたところで、自身の首を一層強く絞める自殺行為としかなり得ない。

「残りの者共は貴様の後、ゆつくりと甚振りながら殺してやる。

あの世で己が愚行を悔みながら待つていいとい——！」

ぐしゃり——！

振り下ろされた戦鎧が石床に叩きつけられる。

白亜の大地を碎く一撃は、その際に肉の弾ける音を伴わせていたのは、おそらく気のせいではあるまい。

撒き散らされた多量の血。

赤黒く染まっている夥しい量の液体は、紛れもなくデモンスレイヤーのもの。

死——僅か数日とはいえ、仲間であつた男が死んだことに、頭目を除く一党の者たちは嘆くような絶叫を上げた。

「つ！——デモンスレイヤーさんツ!!」

響く女神官の悲鳴。

続くように放たれた妖精弓手、鉱人道士、蜥蜴僧侶の彼デモンスレイヤーを呼ぶ声は、しかし応える者などいるはずもなく、虚しく空に漂うのみ。

その光景を愉快げに見つつ、オーガは高らかに咲笑を上げた。

まずは1人。残るは5人。場数を踏んでいるとはいえ、所詮は冒険者。

只人などは言うまでもなく、鉱人や森人、戦上手と名高い蜥蜴人も脅威には値しない。

あとは順次、ゆつくりと戦鎧や魔法で潰し、焼き殺していけば済むだけの話だ。

万が一のことがあつても、自分の側にはまだあの小鬼がいる。

「さて、残るは貴様らのみだ。順次嬲り殺して、女はこれまで同様捕え、死ぬまで孕む袋として利用してやる」

ズシン、ズシン——。

大地を揺らす巨獣の如く、ゆつくりと前進してくる人喰い鬼オーラガ。

人の身ではまず敵う筈のない強敵を前に、冒険者たちは各々ができる最善、最良を思考し、得物を手に携えて迎え撃つ準備をする。

その中でただ1人、雑囊をまさぐつて何かを探しているゴブリンクンスレイヤーであるが、絶対的優勢の位置にいるオーガにとつては、もはやそれすらもどうでもよい些事でしかなかつた。

だからこそ、気づけなかつた。

危機的状況を脱し、絶対的優勢に至つたからこそ、彼は慢心していた。

彼の背後に迫る、青緑色の鎧の存在に——彼は全く気づけなかつた。

「ぬ、グ、オ——!」

痛みは一瞬であつた。

背部に何かを突き立てられ、続けて何かが己の内側へと侵入していく

る感覚。

されど肉を搔き分けるような嫌な感覚はない。

もつと深く、それこそ魂の領域を深く冒され、貪り尽されていくようなものが、今の彼にはあつた。

「——死んだと思って、油断したな」

「——っ！」

不意に背後より聞こえたその声は、先に殺したあの鎧の冒険者のも の。

首を限界まで回しても姿が見えないのは、きっと彼の背中にへばりつく形でくつついているからだろう。

実際、デモンスレイヤーは剣をオーガの背中に突き立て、杭のように固定し、それに捕まりながらソレを行つてているのだ。

「真つ当な生者であれば、今の一撃で終いであつたろうよ。だが生憎、私は既に真つ当ではない故な」

「貴様……！」

オーガにしか聞こえない小声で、囁くように紡がれていく言葉。それはさながら呪詛の如く、時を経ることにオーガの精神を蝕み、形容し難い痛みと共に彼という存在を苛んでいた。

「できればコレは使わずに済ませたかったが、状況が状況、止むを得ん。

それに今、彼らの中で私は死んだことになつており、冷静さを大きく欠いている。

多少のボロが出たところで、あの状態ならどうとでもなる」

「き、さま……なぜ……！　これは、まぎれもなく、吸魂……業……！」

「ほう。吸魂の概念を知っていたか。見た目の割に知識が豊富なのだな。まあ——」

——もう無意味だがな。

会話という名の時間稼ぎ。吸魂の業によつて魂を貪り喰われたオーガの意識は遂に絶え、その巨躯が力なく倒れ伏した。巻き上がる土煙。視界を埋め尽くす土色のカーテン内を見通すことは、優れた目を持つ森人であつても不可能だ。

そして時が経ち、回廊の最上部に穿たれた大穴を通じて吹き入る風により、土色のカーテンはめくられ、消え失せる。せき込む音を幾つか響かせながら、装束を汚しながらも姿が露わとなつていく一党。

その1人であるゴブリンスレイヤーが兜越しに周囲を見回し、向けて視線の先にまず捉えたのは――

「――まずは1匹、だな」

変わらぬ鎧姿で屹立し、剣と盾を携えたデモンスレイヤーが、1人。死んだと思われた仲間が生きていたこと、そして強敵たるオーガを討ち取つたことに、彼らは後に歓喜を声を上げることとなる。

混乱を極めた此度の戦い。イレギュラー異常に次ぐ異常により、搔き乱された今回の冒険は、遺跡に巢食うゴブリンたちの長たるオーガを討伐したことにより、一応は成功と言つてもいいだろう。そして、だからこそだろう。

オーガが倒れ伏した後、白亜の最下層領域から――

――あの2匹の異形のゴブリンデモが姿を消していったことを、すぐに察することができなかつたのは。

## 12. 勇者訪問

率直に言つて、彼は不機嫌であつた。

遺跡に巢食うゴブリン群、及びその首領たるオーガ討伐を経て数日。

件のゴブリンたちを掃討し終えた彼らは、迎えの馬車に乗つて辺境へと戻ると、各自の帰路についた。

妖精弓手ら3人はギルドが経営している宿へ。

女神官は神殿へ。

そして一党の頭目たるゴブリンスレイヤーは、幼なじみがいる牧場へと。

となると、辺境に着いてすぐに冒険に出たデモンスレイヤーだけは戻る場所がない。

王都にある自室にまで戻るという手もあるのだが、折角辺境まで来て、1つの依頼をこなして「はい、さようなら」というのはあまりに馬鹿げている。

よつて彼もギルドとは別に、街中の宿屋に滞在することを決めた。では何故、彼が不機嫌であるのか。  
その理由は言うまでも無く……。

「……ない」

クエストボード  
依頼掲示板に張り出されている紙。

紙の数だけ依頼があり、内容は下水道のネズミ退治やどぶ浚いを始め、難易度の高いものではトロールやドラゴンの討伐まである状態だ。

無論、混沌の勢力が直接襲つてくる激戦区の王都とは異なり、辺境の冒険者の質はやや劣っている。

例外を挙げるとすれば、『辺境最強』の槍使いと『辺境最高』の一党を率いる重戦士か。

ともあれ、如何に報酬が高くても、最強種と名高いドラゴンを相手

に戦える冒険者など限られており、だからこそこんな時間帯になつても残つているのだと容易に察せられる。

そして余り物の依頼において、代表的な類を挙げるとすれば、それはもう1つしかない。

言うまでもなく——『ゴブリン』だ。

「北西の山に小規模の巣……南東の森林に中規模の……東の川を中心に周囲一帯を荒らし回っている群れ……これは渡りか」

毒を用い、数に優れ、けれども依頼者の大半が村人ゆえに報酬も微々たるもの。

故にゴブリン討伐はあまり好まれず、こうして数多くの依頼が残つてしまふ始末なのだが、それはまあ、納得せざるを得ない。

自分も上位の等級に上がつてからは、報酬の少ない依頼はなるべく避けるようになつた。

食事や睡眠については必ずしも取らねばならないというわけでもなく、宿を取るのも、一時的な拠点として利用するだけで、快適に睡眠をとるためではない。

とはいって、理由は何であれ宿を取れば金が掛かり、また冒険へ行くにも必要なものを揃えなければならないのでやはり金が掛かる。

とにかく、この冒険者稼業というのは金が掛かる仕事だ。

デモンスレイヤー自身は基本単独<sup>ソロ</sup>であり、達成した報酬は丸ごと彼の懐に入つて来るからまだいい方だが、一党を組んでいる冒険者たちの場合、人数に応じて分けねばならないので、受ける依頼も限られてくる。

そんな金のかかる仕事だからこそ、報酬の割に数だけは多く、そして危険度も地味に高いゴブリン討伐は忌諱される傾向があるので。

「やはり……アレらに関する依頼は無しか」

まあ話をもとに戻すと、彼の不機嫌の理由は前回の冒険。

その最中で邂逅した2匹の新種ゴブリン——否。『異形のデーモン』たちだ。

多数の女囚をその身に縛りつけ、防具と為した巨躯のゴブリン。革と鉄の継ぎはぎ鎧を身に纏い、数種の武具を帶びた武装ゴブリン。

前者の方は直接戦つてみた結果、戦闘能力は然程ではないことは確認済みだ。

問題は後者の方、武装ゴブリンの方だ。

投擲の練度の高さに加え、纏う気魄や佇まい。

アレは強い。『つらぬきの騎士』や『老王オーラント』のような、無駄を省き、研ぎ澄ました強さがアレにはあつた。

あの遺跡でオーガを相手している間に逃走を許してしまい、以降こうして探しているのだが、やはり奴らはその姿を未だ晦ませている。流石はデーモンというべきか、それとも小鬼どもの狡賢さまで真似た結果なのか。

どちらであれ、現状においては奴らを見つけ出す手段は限られており、きっとこの先、混沌の勢力あたりが大規模な動きでも見せぬ限りは、アレらも当分身を潜めて機を待ち続いているかも知れない。

「賢しい奴らめ……」

兜内でそう吐き捨てるも、仕方なく彼は他の依頼紙へと目を向ける。

事は早急に為すが吉であるが、焦る必要もない。

あちらが動きを見せぬのなら、こちらはそれまでに備えておくまでのこと。

幸いにも、まだ残っている依頼の中にはそことこの報酬のものがあり、いずれもデモンスレイヤーの実力ならば完遂できるものばかりだ。

鉱山に住み着いたトロール。山の遺跡に縄張りを張ったドラゴン。大沼の巨人——。

「さて、いづれを受けるべきか……」

「あ、あのお……」

「む？」

掲示板を睨むように見つめていると、不意に声が掛けられた。

振り向くその先にいたのは1人の女性職員。

ギルド職員の証明たる制服を見事に着こなし、緩く結んだ三つ編みが特徴的な若年の女性。

昔どこかで見たような覚えがあるのだが、いまいち思い出せない。

「あのお、デモンスレイヤーさん、ですよね？」

「……？　いかにも、私がそうだが」

妙に引き攣つた、あるいは恐れが滲み出ている笑みは、デモンスレイヤーを怖がつてしているのか。

今でこそ『デモンスレイヤー魔性殺し』としての呼び名が定着している状態だが、一時期に付けられていた不名誉かつ恐ろしい渾名の方を知つていれば、怖がるのも無理はないが……。

「そうですか。実は、神殿の方より招待状を預かつております。これを『デモンスレイヤーさんにと』

「神殿の者が？　何故……」

そうして差し出された封筒を取ると、その場ですぐに封を切つて中の紙を開く。

ご丁寧に記された、ごく綺麗な文字の羅列。そして紙の端に押された印。

成程、正式な書類というわけか、と中身を改めると彼は受付嬢に礼を言い、ギルドを出ていった。

がしやり、がしやりと鉄の音色を奏でながら進んでいく彼の後ろ姿

を目に、受付嬢はそれまで張り付けていた笑みを消すと、「ふう」と溜まつていた諸々を吐き出すように息を一つ。

「どうしたの？ そんなに緊張した？」

その様子を傍から見ていた友人である監督官がそう訊ねると、受付嬢は首肯を以て彼女の問いに肯定した。

「あの人、5年前にここで働いていた先輩の友人なんですよ」

「ああ。そう言えばそうだつたね。先輩とデキてるつて噂も立つほど良い仲だつたから、都の方に引越したつて聞いた時はまさかとは思つたけど」

「まあ、実際結婚した相手は違いましたし、お二人は変わらず友人関係のままだそうですが」

何せあの『魔性殺し』だ。

幾多もの魔神を討ち、混沌勢力に少なくない打撃を与え、遂にはあの魔神将の一角さえも屠つた歴戦の猛者。

金等級へ昇級の際に都へと拠点を移し、以降は王都守護に専念して襲撃してくる魔神デーモンらを悉く討ち果たした『最新の英雄』。

そんな彼が突然、王都からこの辺境へと舞い戻つて来たのだ。それもわざわざ、金から銀の認識票へと変えて。

「あの人気が防衛を失敗したつて噂も聞かないし、やつぱり今回の件も、彼をあのゴブリン討伐に参加させるためにわざと銀等級へと一時降格させただけかもしないね」

「まあ、その可能性の方が高いでしょ？」

「それで？ 何をそんなに怖がつてたの？」

確かに彼はあの『魔性殺し』だけど、別にそこまで怖がる必要はないんじゃない？」

「それは、なんんですけど……」

「ごによごによ」と言い淀む受付嬢の姿に、監督官は「？」と首を傾げて不思議そうな表情を浮かべる。

「あの人……たまに怖い、冷たい目で見て来る時があるんですよ」

まるで、人間を人間と思わないような、冷たい目で――。

監督官に、受付嬢の言つた言葉の意味はよく分からなかつた。

魔神を葬り、人の営みを守護し、混沌を阻む英雄。

そんな彼が人を人と思わぬ外道であるなど、彼女は微塵も思つてなどいなかつたから。

\*

神殿へと辿り着くと、まず最初に神官たちが彼を出迎えた。

とはいえ数はごく僅か。まるで彼の来訪を他者に悟られぬよう、密やかに行われた歓迎。

そうして迎えられたデモンスレイヤーは、1人の神官に連れられて応接室らしき場所へと案内されると、そこには3人の人の姿があつた。

1人は女。胸元の開いた戦装束を身に纏い、腰に見事な剣を佩いた長身の美女。

もう1人も女。こちらは先の者とは違つて小柄で、その体躯を猫耳を思わせる2つのふくらみが付いたフード付きの外套で覆つている美女。

そして最後の1人。こちらは頭から膝当たりまでを外套ですっぽりと覆い隠していて、その素顔もはつきりとは見えない。

だが、そのフードから覗く長い髪からして、おそらくはこちらも女性であろう。

「……貴公らが、私を呼んだ者たちか」

向かい合う形で設置された2つのソファア。

その内の1つに座すのは、未だ顔を見せぬフードの人物ただ1人で、他の2人はその後ろで石像の如く屹立している。

「突然の呼び出し、誠に申し訳ない。だがこうでもしない限り、我々と貴方のみで話す状況は作れなかつたのです」

どうかご容赦を、と。

長身の美女がその高い背を曲げ、丁寧に頭を垂れる。

こういう手合いは無駄にプライドが高いと認識していたのだが、どうやら彼女はそうではないのか、それとも自分を『魔性殺し』と知つての対応なのか。

どちらであれ、そこまでされてはこちらも文句の1つを言うのは無礼であろう。

先に許可を取つた後、鎧姿のまま向かいのソファアの前に立ち、携えていた剣と盾を傍に置いて、自らもソファアに腰掛けた。

「……おや？」

「……」

そうして3人と向かい合うと、そこでようやく彼は1つのことに気がついた。  
いや、正しく3人の内、その1人が誰なのかに気づいたというべきか。

長身の美女でも、そしてフードの人物でもなく、もう1人の――

「貴公……賢者殿ではあるまいか？」

「……お久しぶりです、魔性殺し殿。変わらず息災のようで、何よりです」

ペコリと簡素に頭を下げてきた彼女。

『都の賢者』——王都に拠点を移した後、国王を介して出会った都隨の一の知恵者。

魔法の腕前もそうであるが、何よりも注目すべきはその異名に恥じぬ莫大な『知識量』。

彼の側のデーモンである『異形のデーモン』について、遠回しに何度も尋ね訊いたことがあり、内容の大小と違いがあるが、何度も彼女には世話になつていてる。

「貴公がこのような辺境に姿を見せるとは珍しい。

……ひよつとすると、私を招き寄せた張本人とは、貴公か？」

「申し訳ない。ただ、陛下からあなたが王命を賜り、任務としてこの辺境へ向かつたことを聞いた。

任務中に呼び出すのは流石に気が引けたゆえ、ギルドに手紙を残して来たのだが……」

「そうか。……それで、賢者殿はともかく、残る2人には面識がない。素性も分からぬ相手と話す言葉を持ちはせぬ故、まずは彼女たちを紹介してはくれまいか？」

特に……そこのフードの者について

「……ふーん。彼女たち、ね。かのじょ剣聖の方はともかく、どうしてボクも女の子だつて分かつたの？」

そこで初めて、フードの人物が声を上げた。

やはり、かの人物は女性であった。

背丈は目測で、およそ賢者と大差ないと思つていたが、声音から察するに、齡は彼女よりもさらに下と見るべきか。

座していたソファから立ち上がり、被つていたフードを勢いよく脱ぐと、そこでようやく彼女の全貌が露わとなつた。

「……子供？」

「む、失礼な。これでもボクは15歳、成人したての立派な女性だよ

レディ

？」

自分から女性と名乗る人物は、目の前の長卓に乗らないであろう——  
」。

そんなことを言い掛けた口を噤ませて、兜越しに視線を少女へと向ける。

長く豊かな赤い髪。凹凸の少ない小柄な体躯。

纏う装束は、下に着込んだ帷子イシナを除けばそのほとんどが純白。まるで穢れを知らぬ童のように、無垢な白地に長い赤髪は映えて、その歳以上の魅力を彼女に持たせている。

ただの少女ではないな——思考の末、そして直感も合わせた上で、彼はそう答えを出した。

平々凡々な单なる少女であるのなら、あの賢者が付いているなどあり得ない。

まして曲がりなりにも自分は『英雄』と呼ばれる人物だ。容易く呼び寄せられぬ身の上となつた自分を、賢者が神殿を介してまで召喚するほどの人物となれば、王族の類か、あるいはそれとはまた別の大物か。

「……それで、貴公らは何者か」

「初めに名乗らずにいたことについては、どうかご容赦を。

私は剣聖と申します。そしてこちらが、貴方もご存知の通り、都の賢者。そしてこの方が——」

「うん！ 初めまして、デモンスレイヤーさん！ ボクは勇者！」

「勇……者？」

勇者というと、あの勇者か？

そう問い合わせると、少女——勇者は大きく首を振つて肯定し、その顔に晴れやかな笑みを湛えた。

勇者——その名は知っている。

古い文献においては、世界を危機より救う者。悪しき者共を討ち果

たし、世に平和をもたらす選ばれし者。

邪悪なる魔神の王と対を為す、秩序にして善なる側の切り札。

よもやこの少女こそがソレであつたとは……。

「あれ？ 疑わないの？」

「まあ、普通ならば疑うべきところであろうが——そこに立て掛けたモノの存在もあれば、納得せざるを得まい」

視線の先に見えるのは、鞘に納められた一振りの剣。

精巧な細工と装飾が施された鍔と鞘、そして鞘に秘されし刀身より滲み出る聖なる力。

同じ類のモノを知り、また所有しているからこそ分かる事実だ。

「それで、その勇者殿が私に何用か？ 一介の冒険者如きに、貴公のような大物が、何故にこのような回りくどい形での邂逅を望んだのか」「一介の冒険者如き、とはよく言いますね。貴方も」

そう言つたのは長身の美女改め、剣聖。

何んまいは先と変わらず、しかし一層鋭利さを増した視線で、彼女はデモンスレイヤーを見つめ、その先を続けた。

『デモンスレイヤー——10年ほど前に冒険者となつて以降、数多くの依頼をこなし、魔物たちを葬り続けた方。

ドラゴン、巨人、オーガ……特に魔神王の直接的な眷属たる魔神種<sup>デーモン</sup>の討伐数は目を見張るほど。

『最新の英雄』とさえ讃えられる貴方を、そこらの冒険者と同じに扱うことにはできません」

「……」

剣聖の指摘に、デモンスレイヤーは沈黙した。

別に予想外の称賛に照れて、言葉を口にできなくなつたわけではな

い。

そういう類は聞き飽きて いるし、何より事実なのだから恥じるべきものも何もない。

問題は、彼女らが事細かにデモンスレイヤーについての知識を持ち、その上でこのような形での訪問を取つてきただと いうことだ。

こういう場合、後の展開は大体決まつて いる。まして相手がかの勇者の一党となれば、考えられるものはただ 1 つ。

「飾つた言葉はあまり好かないの で、率直に言わせて貰います。

——デモンスレイヤー殿。私たちと共に来てもらいたい」

「——ふむ」

兜内にて小さく呟き、顎部分に籠手を嵌めた手を添える。

彼のいつもの癖である、考え込む仕草。あるいは、考えるフリだ。こういう態度を示せば、相手は勝手にその先をべらべらと語つてくれるこ とを、既に彼は経験していた。

そして今回も例に漏れず、剣聖は自分たちの有利な方向に持ち込もうと、さらに話の続きを語り始める。

「貴方も知つての通り、現在世界は混沌の勢力による脅威に立たされています。

これは神代の頃より変わらぬ事実ではあります が、近年はさらにその問題が深刻化している。

その理由は言うまでも無く……」

「彼奴らの頭——『魔神王』<sup>デーモンロード</sup>の復活であろう？」

「はい。王とは、即ち国や軍など、一組織や一国家の象徴にして頂点。確かなる主を得たかの者共の動きは一層活発化し、最近では超規模の大軍勢を編成し、いよいよ我らとの全面戦争に持ち込もうとする動きまで見られます」

「そんな折に伝説の勇者殿が見つかり、我ら人間勢力も確固たる頭目を得た故、対混沌勢力用の戦力を集めている……そんなところか?」

「（）理解が早いようで。それでは、我らが貴方の同行を求める理由も、既に察せられておいででしよう」

魔神の軍勢、悪魔たちの大軍団に立ち向かうには、相応の武を誇る猛者が求められる。

一騎当千の猛将、千智万謀を極めた術師——前衛、後衛、問わず、腕の立つ者は幾らいても足りない。

ましてかの勢力は魔神デーモンを中心とした組織だ。ならばこそ、その魔神を誰よりも多く屠り、彼奴らについてよく知る人物が求められるのは当然のことだ。

即ちデモンスレイヤー——数多くの魔性を屠り、魔神狩りとして名を馳せた『最新の英雄』こそが、今の人間勢力にとつて勇者にも劣らぬ切り札と成り得るのだ。

「かつて魔神王を討ちし『六英雄』も居ますが、今現在、最も混沌勢力が恐れているのはこちらに居られる勇者様と、そして貴方の2人のみ。

『魔性殺し』の異名で知られる貴方が我らと共に来てくださることを宣言してくだされば、兵の士気も高まり、民も安堵の内に眠ることができます。

「……陛下から、何か言伝は賜っていないのか？」

「……？　いえ、特には何も。……ああ、しかし1つだけ」

「何だ？」

「それが……『そなたの好きなようにせよ』、と

「……ほう」

賢者より『陛下からこの辺境へ向かつたことを聞いた』という言葉を聞いた時より、何となくだが彼から何か言葉を受けていないかと思つていたが、どうやら当たりだつたようだ。

そしてその内容がソレだとは……どうやらかの若王は、本気で自分の約定を守る気でいるらしい。

(であれば、私もその厚意に甘えさせて貰うとしよう……)

ならばこそ、答えは今この時に確定した。

その意を視線を以て示すと、彼女たちも一層真剣みを帶びた顔付きで彼と再び向かい合い、その言葉を今か今かと待ち続ける。

「返答は、定まつたようですね」

「ああ。陛下よりその言葉を賜つたのなら、私が口にするべき言葉は1つ——『否』だ」

『——!』

驚愕——予想外の一言。

魔神王の復活と、悪魔の大軍勢の来襲という未曾有の危機。

祈る者ブレイヤーと祈らぬ者ノンブレイヤーによる全面戦争。

そう遠くない未来の話であることは、彼も重々理解している筈だと彼女たちはそう解釈していた。

であれば、魔神狩りたる彼もまた、世界を救うべく共に立ち上がりてくれるものばかりかと思つていたが、

「つ、何故です！」

ドンツ！　とソファの一部を叩き、咆哮の如く剣聖が叫び問う。

その際、あまりの衝撃でソファが一瞬浮かび、そこに座つていた勇者の体躯も一瞬浮かんだので「やめてよ、もう！」と非難の声が上がつたが、それで空気が変わるような状況でもない。

「世界の危機なのですよ？　混沌の者共が総力を結集し、魔神王の指揮下のもと、迫つて來ているのです！」

そのような状況であるというのに、どうして――！

「落ち着いて。ここで言葉を荒げて問い合わせても、意味はない」

「……っ！」

荒ぶる剣聖を抑える賢者。

しかしその双眸に宿る感情はおそらく、剣聖が抱えるものよりもお激しいものに違いない。

そうでなくば、彼を見つめるその視線に、これほどの熱が籠つてゐる筈もないのだから。

「……理由を、聞かせて欲しい。魔性殺し殿」

「理由か。そうだな……何と言えば貴公らは納得してくれることか」

再び顎に手を添えて、勿体ぶるように唸り込むデモンスレイヤー。とはいゝ、どんなに形を変えようとも、この答えはきっと、彼女たちを納得させるには足らぬ代物だろう。

何せこれは世界の危機とは関係ない、ひどく個人的な、私的返答に他ならないのだから。

「まず最初に言わせて貰うと、私は人々のために魔神どもを葬り続けてきたわけではない」

「それは……どういう意味かな？」

問い合わせるのは勇者。

この中で最も幼く、経験に乏しい筈の少女の瞳は、だが万象一切を見通すが如き鋭さを有していた。

まるで神か何かにでも見透かされているような感覚を覚えるが、デモンスレイヤーは構わずその先を紡いだ。

「デーモン的な理由でね。私は、とある事情からデーモンが嫌いだ。人の世を脅かし、泰平を碎き、蹂躪する。

生ある者の一切を踏みにじり、その魂魄一欠けらに至るまで貪り尽す……そんな奴らを心底嫌悪している」

「ならば！ なおのこと我らと共に来るべきです！」

今奴らが行おうとしていること、そしてその先にもたらされようとしている災禍は、今しがた貴方が仰つた内容そのままなのですよ!?」「だろうな。だが、だからと言つて私が貴公らに手を貸す理由にはならない。

世界を滅ぼす魔神の軍勢は、確かに脅威であり、恐るべき代物なのだろう。

だが今ここに、その大軍勢さえも恐れる切り札がいるのだから、必ずしも私が出なければならないというわけではない……何より」

そこで彼は一度、言葉を区切った。

まるでその先の言葉を紡ぐのに、一握りの覚悟を要するかのように。

「何より、かの魔神デーモンどもは——私の求める『デーモン』ではない」

その一言で、3人の内にあつた熱は一気に治まつた。

いや、正しくは彼が何を言つているのか分からず、疑問の内に熱も冷めてしまつたという方が正しいのかもしれない。

私の求めるデーモンとは違う？ だから一緒にには行けない？  
……何だそれは。意味が分からぬ。

「デーモンはデーモンだろう！ 人の世に仇為し、厄災をばら撒く混沌に違ひなどあるものか！」

「いいや、違うな。貴公らがこれより相手するであろう魔神デーモンと、私が生涯に渡り殺し続けてきた『デーモン』とは、全く別の存在だ。

金等級への昇級。そして陛下に仕え、都の守護役を務めたのも、総ては『デーモン』を討つがため。

目的の存在をようやく捉え、本来の仕事に戻つたというのに名前繫がりで他の駆除にまで駆り出されでは、それこそ本末転倒というものだろう？」

「つ！……貴、様——！」

遂に怒りが限界を迎えたのか、剣聖が腰に佩いた剣の柄に手を掛け、圧するように剣氣を放つ。

しかし、それもデモンスレイヤーにはまるで効果がない。きっと彼女は英雄と呼ぶに足る超人なのだろうが、所詮それも『人域』のもの。

人の力などまるで及ばない、真に恐ろしき『人外』の発する圧に比べれば、この程度の剣氣など、そよ風にも等しい。

「剣を振るつて我が首を刎ねるか？ それも良からう、やつてみるがいい。

だが、殺した程度で私を死——いや、滅ぼせるとは思うなよ。何より……」

そう言いつつ、彼は虚空に手を伸ばし、歪めた空間を通して自身の内側ソウルより一振りの剣を取り出す。

それはかつて、都に出現した魔神将を相手した時に用いた聖劍ソウルとは異なる、もう一振りの名剣。

かの聖剣が穢れを払い、魔を退ける『白』ならば。

かの一振りは魔を纏い、生ある者の一切を貪る『黒』。

それ即ち魔剣。魂を切り裂き喰らう魔剣——銘を『ソウルブランド』。

「貴公如きに、このデモンスレイヤーを倒せるのかね？」

「……！」

「魔剣……单なる魔力を宿した武具ではなく、真なる魔性の一振り……！」

魔性殺し殿、あなたは一体……！」

出現した魔剣が纏う禍々しさと、その魔性を帶びてなお平然として

いるデモンスレイヤー。

魔性を殺す英雄が、魔を纏う一振りを扱うという矛盾の現実を前にしては、彼女たちの反応も当然であろう。

ならばこそ、重要なのはこの先。このまま剣と彼の放つ圧に押され、彼の同行拒否を認めるか。

それとも武具を取り、ここで一戦交えるという愚行に走るか。さて

「はいはい、そこまでそこまでー！」

カラーン——。

剣呑な雰囲気を打ち破り、最悪の展開に待ったをかけたのは勇者。三者の間に割り込む形で、真中の卓に仁王立つと、手に携えた抜き身の聖剣で圧しつつ彼らを見下ろす。

「君たちも、もうここまでいいでしょ？

きつとこの人は、ボクたちがどれだけお願いしても付いてくれるつもりはないよ」

「ですが、勇者様——！」

「どんな事情だとしても、嫌がる人を無理矢理連れていくのはボク、嫌だなあ」

勇者由来の圧倒的存在感とは裏腹に、彼女には微塵も交戦意識は存在しなかつた。

聖剣の抜刀も、本当に三者を抑えて戦いに発展させないための行為なのだろう。

「ごめんね。えっと……デモンスレイヤーさん、だつけ？」

本当なら一緒に来てくれた方が、ボクとしても嬉しかつたりしたんだけど、まあ、しようがないよね。君にも君のやりたいことがあるんだし」

「む……。あ、ああ」

カラーン——。

何だ。何だ、コレは。

こちらにもその気がなかつたとはいえ、どうしてこうも、この少女に有利な展開へと進んでいくのか。

まるで世界——否。運命そのものが、彼女に味方しているようではないか——！

「こんな」とを言うのは何だけど、ここはボクの顔に免じて、どうか2人を許してあげてくれないかな」

「……」

カラーン——。

まだだ。

先程から鳴るこの乾いた音。鳴るはずのない音。聞こえる筈のない音。

まるでどこかで骰子遊びでもしているかのような、そんな虚しく、乾いた音色。

そしてこの音色が奏でられる度に、この少女の為した言動の数々は、総て成功へと収まっている。

そんな考えを巡らせている内に、その沈黙を是と受け取つたのか、勇者は笑顔で「ありがとね」と言つて、剣聖と賢者を連れて応接室を後にした。

「じゃあね。もしさまた会つたら、その時は色々とお話ししよう!」

そう言つて去つていつた彼女の姿はどこまでも眩しく、まるで地上にもたらされた人型の奇跡とさえ思えてならなかつた。

だからこそ、だろうか。あまりに人間離れした魅力を有するからこそ、彼はソレに違和感を覚えていた。

あの感覚には覚えがある。人ならざる身であり、その正体がデーモンの似姿とはいえど、決して陰ることのなかつた頂に立つ者の気魄。北の地において最後に相対したデーモン——かのオーラント王の似姿たるデーモンが纏つていたものと同じ、人外の王氣。

そして――

「あの骰子の音は、一体何だつたのか……」

ソファに座したまま、ぎしりと身を沈ませて天井を見上げる彼の咳きに、答えてくれる者は誰一人としていなかつた。  
カラ・ラン――と。また1つ、骰子の音が聞こえた気がした。

### 13. 小鬼狩りの夜

神殿に祀られし女神像。

人々を見守り、守護せし偉大なる神の姿を模したであろう女神の像こそは、その神殿において最も高く、そして神聖なるもの。

その気高き女神像の前に1人、跪いて首を垂れ、祈る者がいた。流れれるような長髪は頭巾で覆い隠され、女性としては長身の体躯も純白の修道服で覆われている。

それでも服越しでも分かる2つの膨らみと、その他の部位との均衡は、彼女が女性としての豊かさに恵まれている証明であろう。

そんな彼女——白の修道女の元へ歩み寄る人影が1つ。この神殿の神官長であった。

「今日も変わらず祈祷ですか。本当に、貴女は熱心ですね」

困ったようで、しかし同時に嬉しげな笑みを湛えた顔を向ける神官長。

けれども白の修道女は変わらぬ姿勢のまま、やはり祈りを捧げ続けて動かすにいる。

「……神官長様が仰るほどのものではありません。わたしのこれは……」

「…………そうですか」

修道女が途中で口を閉ざした理由を、神官長は既に知っていた。

彼女がこの神殿に運ばれてきたのは、今からおよそ10年前。

同じく神殿に帰依した2人の妹と共に、彼女はギルドから神官たちの手で此処にやつってきたのだ。

後にギルドから聞いた話では、ゴブリンの巣穴へと攫われて、凌辱の限りを尽くされたとのこと。

だが後に彼女たちを救つたとある人物の手でゴブリンたちは巣穴

ごと壊滅させられ、彼の手で彼女たち姉妹は救出されたという話だ。

しかし、故郷を滅ぼされ、挙句に乙女の純潔まで奪われた彼女たちが立ち直るのとは別問題。

今でこそ姉妹はどうにか人並み程度にまで立ち戻りこそしたが、その心奥には、今もあのゴブリンたちにつけられた癒えぬ傷<sup>トラウマ</sup>が残つてゐる。

この祈りも、神への信仰からくるものではなく、その傷を起因とした縋りでしかないのだ。

「……そうだとしても、今日はここまでになさい。

例え理由はそうであつても、祈祷の末に体を壊してしまつては、それこそ我らが神に対して失礼ですよ」

「……」

白の修道女は、すぐには答えなかつた。

それでもごく個人的な理由とはいえ、今は主と崇める神に対して無礼であると言われれば、彼女もそれに従わざるを得なかつた。

豊かな胸の前で組んだ両手を解き、スッと立ち上がり、礼拝所を離れようとして。

ふと、新たな足音が響いたのは、丁度その時であった。

「もうお済になられたのですか？」

「……ええ。つい先程に」

礼拝所に響くのは、この神殿では珍しい低く、そしてくぐもつた男の声。

興味を引かれ、振り向いた先に見えたのは、全身を鉄で覆つた長身の人物だつた。

2 m近くはあろう長躯を板金鎧で覆い固め、頭に頂くのは鳥の嘴を模した特徴的な鉄兜。

腰に佩いた直剣。背に帶びた騎士盾。

見掛けだけならば騎士階級の身分の者に見えなくもないが、所有者自身が醸し出す雰囲気ゆえか、そういう類の者とはどうしても思えない。

そんな鉄鎧の人物が神官長と軽い話をした後、ゆっくりとした足取りで白の修道女の傍まで進み、その隣を通り過ぎようとして、

「……」

「……あの、なにか……？」

「……いや。特に、何も」

——失礼しました。

一瞬立ち止まり、兜越しに視線を感じたが、それもほんの僅か。すぐに歩みを再開し、がしやり、がしやりと鉄鎧を鳴らしながら彼は先へと進んでいき、やがてその後ろ姿は見えなくなつた。

この10年、礼拝をしに来た男性の姿を見ることはあつても、言葉を直接交わしたことは本当に数少なかつた。

特にあのような鎧姿の人物と、一修道女に過ぎない自分などはどうやっても接点など生まれるはずもなく。

それゆえだろう。ほんの少しだけ、あの人物に興味が湧いたのは。

「あの、神官長様。あの方は……」

「あら、知らなかつたの？ まあそうですね……基本貴女は、外にはあまり興味を持たなかつたものね。

でも、名前くらいならどこかで聞いたことはあるでしょう？」

「……？」

神官長の言葉に、白の修道女は最初こそ首を傾げて「何だろう？」と思つたが、続けて述べられたかの人物の名を聞いた途端、その目を驚きに見開いた。

曰く、魔神を狩る王都の守護者。

曰く、六英雄にも劣らぬ金等級冒険者。

曰く、勇者に並ぶ人類側の最高戦力。  
曰く、今世最も勢い猛き『最新の英雄』。

「——あのお方が、『魔性殺し』……<sup>デモンスレイヤー</sup>」

「ええ。……そう言えば、10年前に貴女と2人の妹たちを救出して  
ギルドに運んできた人物というのも、あんな感じの全身鎧の方だった  
と聞きましたね」

「え……？」

何気ない口調でこぼされた神官長の言葉を耳にして、白の修道女は  
一層目を見開き、突然その場から駆けだした。

頭の中では整理が追いついていないが、それよりも先に体が動いた

のだ。

あの時の記憶はない。あの忌まわしい小鬼どもに凌辱され、蹂躪さ  
れ果てた後のことなど、覚えていても思い出したくもない。  
けれども……そう、けれども。

もしも、あの地獄より自分たち姉妹を救い出してくれた人がいたの  
なら——。

「待つて——！」

必死の走行の末に辿り着いた神殿表口。

しかしそこにかの鎧の冒険者の姿はなく、ただ冷たい風が吹くのみ  
——。

\*

神殿での一件の後、デモンスレイヤーは考えていた。

まさか噂に聞く勇者とその一行に呼び出され、魔神王討伐のために  
勧誘されるとは思つてもみなかつたが、まあそれについてはどうでも  
いい。

賢者には申し訳ないが、混沌の勢力との決着は彼女たちに任せるとしよう。

ようやく掴めた2匹のデーモンの存在、ここでみすみす逃すつもりはない。

魔神王率いる混沌の勢力がこの世界に与える被害と影響について熟知しているつもりだが、それでもアレラを野放しにする気などは毛頭ないのだ。

アレラはそういう存在だ。

手をつけることなく、そのまま自由を許していれば絶え間なくソウルを喰らい、引き起こす災禍はますます拡大し、巨大となっていく。やがては大国すらも滅ぼし、その果てには世界そのものを呑み込んでしまう。

故にデーモン殺すべし。一切の例外なく、その存在総てを廻殺するのみ。

(しかし、未だ件の2匹の目撃情報は入っていない……)

ここしばらくは情報収集に徹し、かの2匹に関わるであろう依頼が来るのを待ち続けていたが、その期待も虚しく終わった。

やはり事を為すには積極的に動かなければならぬのか、と。かつて魔境に在りし頃の教訓を思い出しながら、デモンスレイヤーは歩を一層速く進める。

取り敢えず今日はこれまでのような待機ではなく、何かしらかの依頼を受けて、その最中に情報収集を行おうと予定<sup>スケジュール</sup>を脳内で組んでいくと、ふとそこで先のことを思い出した。

神殿の応接室で行われた、勇者一行とのやり取り。

その終盤で耳にした、あの乾いた音色。

勇者の言動、その1つ1つが行われる度に聞こえたあの音は、少なく述べてある状況で耳にすることはまずないものだ。

人外共が跋扈する魔境に永らく身を置いていたゆえか、デモンスレイヤーは経験と直感から、それを察し、確信していた。

アレは物を転がす際に生じる音色だ。それも鉄や銅などの金属を用いない、木か、あるいはさらに軽い素材で作られた何かを転がす音。そしてその音が鳴る度に、あの勇者の言動は悉く成功し、結果として勇者一行は本命こそ果たせずとも、これといった大事を起こすことなくその場を立ち去ることに成功した。

まるで何者かがそうなるよう、必死に手を尽したかのように。

「……馬鹿な。そんなことなど、あり得る筈もない」

たつた1人とはいえ、人間の——この地上に生きる生命の行い総てを思うがままに操るなど、誰が出来ようものか。

デーモンども世界を滅ぼすことこそ出来れど、他の存在を思い通りに操ることなどは出来なかつた。

あの愛おしくも忌々しい厄災の具現どもできえ不可能なことなのだ。それを現実に為して見せるなら、それこそ宗教などと口にされる『神』と呼ばれる存在でもなければ——

もとより、世界とは悲劇だ

故に、神は獸という毒を残した

ソウルを奪い、すべての悲劇を終わらせるためにな！

「

繰り返される悪夢の日々。

その中で幾度と相対し、殺めた醜きなりそこないの言葉が過ぎる。

デーモンとは、古い獸によつて生み出されし殺戮機構。

そして獸とは、『神』なる存在によつて創造された、世界を殺す猛毒。

もしあの老王の言葉が真実であるのなら、『神』とは真に存在し、あの世界を本気で滅ぼそうと画策していたこととなる。

そしてその『神』とやらが、あの世界だけでなくこちら側にも居たとしたら――

「……いや、流石にこれは妄想が過ぎる」

想像力は武器とはいえ、行き過ぎた想像や予想は時に、己の命すらも殺める刃となる。

例えそうはならなかつたとしても、これが他者に伝わりでもしたら良くて変人、最悪は狂人として見られるようになる。

そうなればこれまでに築き上げてきた物の何割かが失われることか。冒険者の位階は実力だけでなく、信用も含まれている。

王都の守護者とまで謳われるほどとなつた人物が、突然訛も分からぬ戯言を吐き、狂つたと民衆に思われるようになれば、今の位階を剥奪されかねない。

それは流石のデモンスレイヤーも勘弁願いたかつた。

金等級や白金等級の位階に対しても拘りはないが、銀等級——遍在する冒険者たちにとつての、実質の最高位階。こればかりは手放したくない。

最も多く、最も多種類の依頼を受けられ、かつ自由を保障されているのは、この位階だけなのだから。

そんな思考を巡らせていくうちに、見慣れた街並みを抜け、ようやく目的地のギルドの姿が見えてきた。

既に時刻は昼を過ぎ、中から賑わいの声が発せられているのが聞こえたが、心なしか今日はいつも増して明るげ……いや、寧ろ。

「——ん?」

歩を進め、ギルド内へ足を踏み入れようとしたデモンスレイヤーが、その場で立ち止まる。

別に道が通れないわけでもなく、かと言つて何者かが故の分からぬ因縁をつけてきたわけでもない。

彼が足を止めたのは、入り口の開閉扉のすぐ近くに、見覚えのある姿を確認したからだ。

「——ゴブリンスレイヤー」

「……話がある」

相も変わらず顔は鉄兜で見えなかつたが、この時1つだけ、分かつことがあつた。

鉄格子を思わせる縦の覗き目スリット、その奥で灯る赤い眼光——そこには、1つの覚悟があつた。

\*

——闇に響く戦の音。

陽の光は西に失せ、夜の帳が四方世界の天を覆う。等しく同じく夜空の下、その1つたる辺境の草原では今、久しく見ない大戦が繰り広げられていた。

迫り来るは緑の軍勢——ゴブリン軍団。

迎え撃つは多種族戦闘集団——冒險者たち。

数で勝るはゴブリンどもであれど、個々の強さでは冒險者らの方に軍配が上がる。

現に今、優勢を保つてゐるのは冒險者たちの方であり、緑の小鬼どもはその多くが冒險者に敗れ、血潮と共に骸を野に晒してゐる。

だが何か付け加えるならば、この戦況は彼らだけの手で成し遂げられたものではないことだ。

ゴブリンスレイヤー——この場には居ない、この辺境で稀に見る大戦の切つ掛けが1つである冒險者は、開戦前に数々の情報を共に戦うであろう冒險者たちに伝えていた。

曰く、奴らは奇襲には慣れておらず、故に待ち伏せが有効だ。

曰く、奴らは確実に『肉の盾』を使う。眠りの呪文をかけ、その間に虜囚を救出せよ。

曰く、群れが大きくなると狼を飼い、騎乗するようになる。その場合は充分な人数を揃え、槍衾で以て対応すべき。

その他にも数々の対策と情報を伝え、結果生まれたのがこの状況だ。

負傷者・死傷者が皆無などとは言えないが、少なくとも被害の面では雲泥といえるほどの差があつた。

「つたく、雑魚とはいえど、こんだけ多いと嫌になつちまうぜ！」

携えた槍を頭上で旋回させ、大振りの薙ぎ払いを繰り出しながら槍使いが吼える。

名槍の一薙ぎによつて足首を断たれ、苦悶の呻きと共に転がるゴブリンたち。

中には切断を逃れ、ただ転ばされただけに止まつた個体もいるようだが、その末路は等しく同じで、雄叫びを上げて飛びかかってきた蜥蜴僧侶の双刃により、悉く肉片と化された。

「小鬼殺し殿もお手上げですからな。これは当然のことでしょうや」「違ひねえ。……しつかし」

振り向きざまにもう一度一薙ぎし、転がるゴブリンを突き殺す。何度も言うようだが、ゴブリンは弱い。

学習能力が皆無というわけではないが、それでも決して知性が高いわけではなく、個としての身体能力は只人にも劣る、まさしく最弱のゴブリンゴブリヤー者。

だがその分、繁殖能力は凄まじく、現にこの大戦においては数の面ではゴブリンどもの方が勝り、ゴブリンスレイヤーの講じた策がなければどうなつていたか分からぬ。

そして策が上手く通じ、もはや大数の利を失いつつあるゴブリンど

もを個々に葬るのにそう手間は掛からないのだが……

「最弱つつつても、あそこまで一方的な蹂躪は初めて見たな」

槍使いの見据える方角に、同じく蜥蜴僧侶も視線を向けて注ぐ。

両者の視線の先に見えるのは、数多のゴブリンどもを相手に戦う冒険者たちの姿。

そしてその先で同等の数のゴブリンをまとめて相手取る、1人の鉄鎧の戦士。

短刀を逆手に構え、地を這うが如く接近するゴブリンたちを右手の斧槍で薙ぎ殺し、続いて飛びかかる個体に対しては左手の弩で以て撃ち落とす。

それを何度も繰り返すと、薙ぎ払いを潜り抜け、見事斧槍の間合いの内側に入つた個体が現れて、下卑た声を上げながら錆びた剣を突き立てんと一層深くへ接近し、そして。

「GORBBGGッ！」

「……喧しい」

右手の斧槍を放り捨て、新たにソウルより東方の曲刀<sup>打刀</sup>を取り出し、居合の如き一閃で迫るゴブリンを切り捨てる。

ぼたり、ぼたりと臓腑を撒き散らしながら草原に散るゴブリン。噴き出た血潮を鎧に浴びながらも、まるで気にもしていなかのように一切の動搖を見せず、新たに携えた刀を肩に担ぎながら、鉄鎧の戦士は兜越しに残るゴブリンどもを睨み据えた。

「——次」

吐き出されたその一言は、只人の言葉を理解できぬ最弱のゴブリン種族ですらも、何かを感じ取ったのかその醜悪な顔に怯えの色を生み出させた。

否、最弱であるからこそ理解できたのかもしれない。

馬鹿で愚かな、およそ獸と何ら変わらぬ本能で生きることしかできない醜悪な種族。

その多くを上位種族の尖兵として扱われ、生誕さえも祝福されない嫌われ者。

そんな種族だからこそ最期の時に理解できたのだろう。

コレは人ではない。冒険者ではない。

自分たちの巣穴故郷を滅ぼし、時に気まぐれで追い出す形で見逃し、隙を突かれて殺されるようなヤツではない。

こいつは自分たちと同じ――

「――GORBBGGッ!!」

そんな恐怖の感情を支配され、身動きのとれぬゴブリンたちに助太刀する形で新たに参戦する小鬼ゴブリンライダーの乗り手たち。

彼らは全く知らないだろうが、鉄鎧の戦士にとつて、最大の難敵は『軍勢』だ。

規模の大小問わず、対複数戦を鉄鎧の戦士は苦手としており、現にかつての旅で幾度となく複数の敵に袋叩きに遭い、惨殺された記憶がある。

だからこそ、ある意味では彼らのこの行動は正しく――そして致命的なまでに間違っていた。

「――『炎の嵐』」

新たに握られた杖を触媒とし、噴き上るのは炎の柱群。

さながら怒れる竜の劫火を思わせるその大火災は、眞実『竜の神』の空想の存在を模して顕現した、1匹のデーモンのソウルより生み出せし大魔法。

荒ぶる竜の怒りを御することは叶わず、ただそこにある総てを焼き尽

くし、灰と変えて呑み込む紅蓮の災禍。

数を揃えたからこそ、対軍用として発動した魔法は彼に襲い掛からんとした小鬼のゴブリンライダの乗り手たちは元より、恐怖で動けぬゴブリンたちをも呑み込み、肉片1つ残さず灰と消えた。

「……あの旦那、マジで金等級冒険者だつたんだな」

「然り。……けれども、あのような大規模な魔法まで行使できるとは、拙僧も知りませなんだ」

苦笑しつつも変わらず敵を葬り、確実に数を減らしていく蜥蜴僧侶と槍使い。

かつてこの辺境を拠点とし、数多くのノンプレイヤー祈らぬ者を葬り続けた豪傑。やがて魔神狩りの功績を称えられ、金等級昇格と共に王都へと渡つたかの人物だが、その戦いぶりは今もある呼び名と共にこの辺境の地に伝え、残り続けている。

一切の慈悲を施さず、冷徹に冷酷に、氷の如き冷たさを伴い、敵を廻殺する冒険者。

平常における平凡な姿勢からは全く想像できない、悪魔の如き戦いぶりを、その時の人々はこう表わしたという。

「——『辺境最凶』。あの戦いぶりじやあ、その二つ名も納得だわな」

\*

近場でそんな話をされているなど露ほども知らない鉄鎧の戦士であつたが、彼としては寧ろ、この戦場で戦う冒険者たちの方に感嘆していた。

同じ場所を拠点としていても、いざ同じ依頼を受け、共に肩を並べて戦いに臨んでも、必ずしも上手いくとは限らない。

連携、役割、個々の能力の把握——このいずれかを欠けば、死傷率は大幅に上がり、最悪全滅という事態へと至ってしまう。

その点を考えれば、彼らの戦況は非常によろしいものであった。

前線の指揮は腕っぷしが強く、経験豊富な銀、銅等級の冒険者が担い、呪文詠唱者スペルキャスターたちは下手に前線には出ず、支援と妨害に徹することでより戦場に冒険者たちの有利なものへと創り変えている。

経験も実力も浅い白磁たちについては、比較的敵の少ない場所を担当し、幾人かは敵の動きを見て伝える偵察の役を担っている。

良い配置だ。良い士気だ。良い組み合わせだ。そして――

「――来たか」

劣勢に立たされ続いているゴブリン軍に、新たな戦力が投入される。

只人と同等か、あるいはそれ以上の体躯を誇る大柄な緑の魔物。小鬼の呼び名が偽りではないかと思えてしまうほどの巨躯を有した者たち、即ち田舎者ホブゴブリン。

そして彼らを率い、この劣勢を覆すべく遣わされた存在――『小鬼英雄』。

だが、はつきり言つて彼らはデモンスレイヤーの眼中にはなかつた。

1人で相手する時なら凶悪極まる難敵であるが、今は他に冒険者……それも銀等級クラスがいる。故に小鬼英雄やホブどもは彼らに任せればいい。彼が相手すべき相手は――他にいる。

『大物喰らい』が俺の本職だからなッ!』

遠方から咆哮さながら一声が響く。

目を凝らしてよく見ると、大剣を携えた巨漢――重戦士が切っ先を突きつけ、現れた小鬼英雄率いるホブゴブリンたちを睨みつける。

これで小鬼英雄たちの気は彼に集中するだろう。そして大物たち

の気が一点に集中したことで、動き出す奴は自分1人ではない筈だ。

「——GORB」

そいつは、何の前触れもなく現れた。

他の同族たちとは異なる、咳きのような静かな鳴き声を1つ上げ、まず1人の冒険者を相手取り、瞬時に殺した。

続いて剣士、槍兵、斧使い、槌使い——接近戦のみならず、弓術で以て弓兵まで相手取り、およそ魔術師を除く総ての職種の冒険者と一通り戦つた後、そいつはようやく彼の前に姿を現わした。

小鬼の呼び名が嘘に思えるほど、2m近くはある毒々しい緑の長軀。

その逞しい長軀を覆う、革と鉄でできた継ぎ接ぎ鎧。

右手には長剣を、左手には戦斧を携えて、左右の腰にも数種の武器がぶら下げられている。

背から覗き見えるのは、両手に携えた得物を優に凌駕する大剣と大斧、そして甲羅のように背負った盾と弓。

数種類の、それも扱えぬであろう武器を山ほど帶びて戦場に臨むなど、自殺行為も甚だしいことではあるが、逆に考えればそれら総てを使いこなし、かつ重荷にならないような動きができれば、その輩は一個の兵器と化して戦場で猛威を振るうだろう。

そして人ならざる怪物——『デーモン』ならば、そのような芸当など容易くこなして見せる。

「GORB、GORBBG……」

「……ああ。こちらも待ちくたびれたぞ」

別に眼前のデーモン小鬼の言葉が理解できているわけではなかつた。

だが、何となくだが分かるのだ。己も奴も、共に互いを求め、待ち続けていたことを。

思えばこの小鬼の正体、そこへ結びつく要素は確かにあつた。

あの遺跡の冒険の最中、森人<sup>エルフ</sup>の女冒険者が囚われていた汚物溜め。吐き気を催すほどの糞尿の中に紛れていた男の死体。今考えれば、アレはこいつの対戦相手だつたのだろう。

遺跡に忍び込んだ冒險者を罠に嵌めて殺さず、あえて深みまで誘い込み、全力を引き出させた上で決闘する。

そうすれば相手は持てる限りの総てを發揮し、挑みかかって来る。培ってきた総てをさらけ出し、この小鬼に教えてくれる。

そう、この小鬼は——「デーモンは、ゴブリンたちの『武器を奪つて使う』という特性を骨子と定め、具現した存在なのだ。

大量は、それこそ扱い切れぬほどの武器を『奪い』それを十全に『使いこなせる』よう、熟練の冒険者を相手取り、そ

結果、出来上がつたのは1人の戦士。

小鬼という小さな器には渉して收めらす 億りとはいふ種族の枠を超えた、1つの武の具現。

在り続けた達人。  
ゴブリンマスター

故に、名付けるならば——『小鬼達人』。

一  
九  
二  
一

だが、いかなる特性を表現し、極めようと関係ない。

外見が例え人や虫 エフリンや竜であろうと『テリモン』は『テリモン』。

そして『デーモン』であるのなら、己が為すべきことなどただ一つ。

「——G O B R R ——」

剣を、斧を、盾を構え、2人の戦士が衝突する。  
2 四の怪物

## 2人のの怪物四<sup>2</sup>

雄と達人の『デュエル』が始まった——。

## 14. 魔を以て魔を制す

——ごりツ。

硬いものが擦れ合う鈍い音と共に、暗闇の中に重いものが1つ転がる。

転がるソレが何なのか、暗視に慣れていない者では確かめることは叶わないだろうが、そこに巢食う者たちの双眸は確と視界にとらえていた——只人の首である。

はあ、と重いため息を吐き出して、そいつ——『小鬼巨雄』ゴブリン・スタツドは落胆した。

これで何度もだろうか。小鬼という種族には雌の概念がなく、従つて行為を為すためには異種族の女性メスを攫つてこなければならない。それについては仕方がない。そうであると割り切り、己を納得せざるしかない。

だが、問題は攫ってきた女どもの脆さだ。

女という生き物は、個々に差こそあれ基本は男よりも弱く、脆い。故にする際には壊さぬよう加減し、できるだけ長く使えるように調整しなければならない。

しかし、そこはモドキとはいえゴブリンはゴブリン。

快樂を得るためなら他のことなど一切考慮せず、本能のままに行うのは必然。

結果、こうなつてしまふ。どうやつてもこうなつてしまうのだ。

「GORB……」

ごろりと転がる女の首は、最期のその瞬間まで快樂に歪み、蕩けきつている。

『小鬼は女子供を攫い、凌辱する』という特性を骨子に定め、生まれた小鬼巨雄は、当然その方面に特化した性能となつていて。腰布に隠されている数多のソレも、総ては効率よく、そして組み込

まれた特性を十全に發揮すべく備えられたものであり、それが吐き出すものの中には、女性を巨雄の虜とさせる『媚薬』のような性質も含まれている。

だからこそ、彼女たちは逃げなかつた。逃げられなかつた。逃げたくなかった。

この快樂を忘れたくない。この快樂を手放したくない。

もう何も考えられない。考えたくもない。

そうやつて快樂の虜として逃げる氣力を無くさせ、遂には思考そのものを奪う。

その末路が今、そこで転がる生首ならば、ある意味では彼女の生は満たされていたとも考えられる。

もつとも、そうなつた元凶である小鬼巨雄にとつてはどうでもよく、また1人、愉しめる女が減つた程度でしかなかつたが。

「GOB……GOB——GORB?」

仕方ないと、すぐ傍で痙攣しながら横倒れている別の女を貪ろうと手を伸ばすと。

突然——その先が消失した。

「——GORB?」

痛みはある。だがそれ以上に、何が起きたのかが分からず、そちらに意識を割くことができなかつた。

視線を地面に落として見ると、暗闇の中に見えたのは、血溜まりの中に浸る緑の巨腕。

腕を切断されたという現実に、ようやく思考が追いつくことで、痛覚は完全に機能し、もたらされるべき本来の痛みを彼に味わわせる。悲鳴が響く。絶叫が木靈する。

痛苦に苛まれ、悶え苦しむ巨躯の小鬼。

先日、森の遺跡の中でオーガと共に並び立ち、冒険者たちを圧した

あの偉容はどこにもなく、童のように苦痛に泣き叫ぶ無様な小鬼があるだけ。

「——成程、あの男の言葉は真実だつたか」

洞窟内に響く、新たな1つの声。

当然ながら、それはゴブリンのような獣じみた鳴き声ではなく、明確な言葉を以て紡がれる只人のもの。

薄汚れた鉄兜と革鎧、腰に佩いた中途半端な長さの長剣、左手に括り付けられた傷だらけの円盾。

怪物どもの魔窟ゴブリンたちの巣に現れた人物の姿はそんなものであつたが、痛みに悶える小鬼巨雄は、それすらも認識できず、未だ苦悶の絶叫を上げるのみだ。

そんな無様を見つめる彼の右手には、普段扱う長剣はなく、代わりに別の武具が携えられていた。

暗闇の中になお輝く大振りの刀身。

大剣に分類されるであろうその一振りからは、邪惡なる者の存在を赦さぬ聖気が溢れていた。

『聖剣』——本来ならば勇者と呼ばれる者が扱う至高の武具を、普段そこらの武具屋で見掛ける数打ちしか扱わぬ彼が持つと何とも奇妙に映るのは仕方ないとして。

戦闘向きではないとはいって、『デーモン』である小鬼巨雄をこうも一方的に苦しめているのは、間違いなくその聖剣の力だつた。

「ただのゴブリンを相手にすれば、そこらの数打ちと然して変わらぬだろう。

こうも無様を晒すのは、つまり貴様が、この剣の特攻に含まれる存

在だという証明だ」

完全には扱い切れぬその聖剣を両手で掲げ、構え直し、

「つまり貴様は——ゴブリンではない」

先と同じ要領で、残るもう1本を切断した——。

\*

「——ぜああツ！」

「——GORBツ！」

ぶつかり合う鉄と鉄。

交差された二振りの剣越しに睨み合う2人。

魔性殺しと小鬼達人——共に両勢力の戦力、その要が一角たる両者の戦いは、間違いなくこの大戦の勝敗を決める大一番だ。

圧倒的物量こそを頼みとしていたゴブリン軍は、もはやその強みを失い、唯一勝利へと繋がる道は、相手方の主力たる熟練の冒険者たちを討つのみ。

そして冒険者たちもゴブリン軍のように必ずしも達成しなくてはならないわけではないが、やはり敵勢力の大物を討つ方が勝利へ至るには手っ取り早かつた。

森中の高台にいた小鬼王<sup>ゴブリンロード</sup>が解き放った二大戦力の内、その片割れたる小鬼英雄<sup>ゴブリンチャンピオン</sup>は現在、重戦士と女騎士の2人が相手を務めている。

小鬼英雄の剛力は確かに脅威ではあるものの、『辺境最高』の異名で知られる重戦士一党の実力ならば、必ず討ち取れるだろう。

ならばこそと、デモンスレイヤーは一層強く柄を握り締め、相手の剣と鎧迫り合う己<sup>ゴブリン</sup>が刀をさらに奥へと押し込まんとするが、

「GORBツ!!」

負けじと小鬼達人も長剣を押し込み、剣ごと叩き碎かん勢いで迫る。

最弱の種族の特性を基にしているのはいえ、何もその腕力までも彼

らのソレを複写<sup>コピ</sup>しているわけではない。

そもそも、ゴブリンとは言つても種類は多数だ。『武器を奪つて使う』という特性に加え、これまでに数多くの冒険者を相手取り、経験と鍛錬を積んできただろう小鬼達人の膂力は並大抵ではなく、少なくとも奇襲ではなく、デモンスレイヤーと真正面から戦うという姿勢を取らせるだけのものはあつた。

「——ツ」

相手が取つた行動は単純だつたが、しかしデモンスレイヤーは兜の下で顔を顰め、すぐさま鎧迫り合いを解いた。

振り抜く形で刀を一閃し、後方へ跳躍して距離を取ると、彼は武器を変えつつ小鬼達人を見据える。

力勝負に自信がなかつたわけではないが、如何せんそれをやるには武器の相性がよくなかった。

打刀を始めとする『刀』は、その鋭い切れ味の代わりに耐久度が驚くほどに低い。

鱗や鎧を持たぬ、柔らかな体躯の敵相手なら驚異的な性能を発揮するが、その耐久度の低さゆえにこういう打ち合いには不向きだ。

(それに……)

『鎧迫り合いを行つた』——この行為から、少なくとも小鬼達人がただの武器の扱いに長けただけの魔物ではないことは確かだ。

戦場の駆け引きを心得ているとなれば、これはもはや単なる殺し合いでではなくなる。

いかに相手の欠けた部分を突き、それを利用して倒すか……目指すべきはそこであつた。

そんな思考を巡らせながら、新たに取り出した長剣を手に取ると、小鬼達人の方も何を考えたのか、長剣を腰に吊るしたただ1つの鞘に納め、続いて空いた右手を背の方へと回す。

がしつ、と握り締めて抜いたのは、背に負つた大得物の内の1つたる『大剣』。

その長躯に相応しい、重量感溢れる武骨な得物を両手で構えると、小鬼達人は即座に地面を蹴り上げ、突進を仕掛けた。

「GOOGOGツ!!」

「……つ」

勢いは凄まじく、まともに受けければ重装甲であつても貫かれるであろう一撃。

しかし、重さと速さに任せたその一撃はそれ故に単調で、デモンスレイヤーは軽く横に跳ぶことで難なく回避し、がら空きとなつた背に長剣の一閃を叩き込む。

「GOOGOGツ——!?’

浅い——。

継ぎ接ぎ鎧の一部は今の一撃で容易く解けたが、その下にある肌は予想よりも硬かつた。

流石に小鬼を模したとはいえ、デーモンはデーモンか……と。そう小さく呟いて、再び一閃を叩き込もうと剣を構えると、

「——GOOOOBツ!!」

大剣の柄より左手を離し、その左手で背の大斧を引き抜き、一閃。半月を描くように振るわれた大斧は、盾を翳すことで何とか直撃こそ免れたものの、彼の身に強烈な衝撃と痛苦を巡らせた。

反撃が速い。反射が速い。決断が速い——！

奪い取つた武器総てを使いこなすべく、多くの冒険者や強者を相手に戦ってきたのは確かだ。

しかしこまでの実戦における判断力を養うほどとなれば、どうも

培つてきた経験は想像以上のものらしい。

既に持つっていた大剣ではなく背の大斧を用いたのは、相手の気が大剣に集中していたことを理解した上での判断。

それならば他に抜刀しやすい長剣や戦斧を用いればよいと考える輩もいるだろうが、先の回避を見たからだろうか、半端な長さの得物では、また跳ばれて避けられてしまうと思つたのだろう。

ならばこその大斧。長さに優れ、威力も十分。斧頭の重さを逆に利用し、遠心力で速さを増させての一撃。

今回は盾で防げたからよかつたものの、アレを直に受けければ致命傷は免れまい。

(戦の駆け引き、武具の特徴と性質を知り得て、それを十全に活かしている……どうにも面倒な輩だ)

ならばこそ——と。

構えた長剣をソウルに戻し、新たに彼は得物を取り出した。

蒼白い輝きの中より出でたるは、彼がこれまでに使つてきた得物の中でも、最も長大な一振り。

長柄の先に取り付けられた、無数の坂棘を有する穂先。

およそ常人の鍛冶屋ならば考えもしない造りの長槍をして、小鬼達人の目の色が変わった。

物欲——本能の域にまで達する極限の物欲が湧き上がり、デモンスレイヤーの長槍へと注がれる。

アレが欲しい。アレを奪いたい。奪わなければならない——！

蛙を狙う蛇の如く、滑りを帶びた視線の存在をデモンスレイヤーも感じたのか、その視線を小鬼達人と長槍へ交互に向ける。

「……そういうことか」

「GOB——GOORABBGッ！」

負つた傷より噴き出る鮮血も無視し、両手に大剣と大斧を携えて小

鬼達人が猛襲する。

刺突、上段、横薙ぎ、叩きつけ。

袈裟懸け、逆袈裟、切り上げ、大上段——。

およそ武器を以て放てる総ての技を繰り出して、小鬼達人の連撃は続く。

冷静さを失い、先程までの戦術眼は既に失せているが、その対価として得た凶暴性は比類なく。

繰り出される一撃をまともに受けたが最後、続く二撃三撃が獲物を襲い、刻ミシチまれるだろう。

「——フンッ！」

それを分かつた上で、デモンスレイヤーは長槍を振るう。

凶悪な穂先を突き出し、一撃一撃の間にできた隙を狙い、その間に槍の刺突や薙ぎで鎧や武器を攻めていく。

ガリリツ、と金属の擦れ合う嫌な音が鳴り響き、激しい火花が夜の草原に散る。

『武器を奪つて使う』という存在意義本能、その存在骨子より生じた物欲を起因とし、爆発した凶暴性。

餓獸さながらの猛襲は止まることを知らず、絶えず大得物の一撃が繰り出され、草原を壊していく。

そしてデモンスレイヤーの方もまた然り。手にした長槍で的確に隙を突き、その度に小鬼達人の武器や鎧を削つていく。

それから幾度の繰り返しを経てか、纏う継ぎ接ぎ鎧のほとんどが鮮血に塗れて真紅に染まりかけた頃、遂に小鬼達人の大剣がデモンスレイヤーの体躯を捉えた。

「が、あ——ツ!?」

「G O R B……！」

左肩に大きく食い込んだそれは、彼の身を切断するには至らずとも

重傷を負わせ、その動きに制限をかけたことは眞実。

もはや両手で槍は振るえまい。そう確信した小鬼達人は止めを刺すべく、残る左手の大斧を高らかに掲げ、その凶惡な斧刃を振り下ろさんとし、

「——阿呆が」

——バキッ。

何かが壊れる音と共に突き出された長槍。

槍の穂先が捉えたのは、今まさに小鬼達人が振り下ろさんとした大斧の斧刃。

凶惡な無数の坂棘を備えた穂先は、その分厚い斧刃を抉り、そこを起点にヒビが入り——やがて大斧は柄を残して碎けた。

「G O R G A A ツ?!」

ばらばらと碎け散る得物を目にし、小鬼達人は驚愕に満ちた悲鳴を上げる。

馬鹿な、こんなことがあつていいのか!? とゴブリンの言葉で喚いているのかもしれないが、内容などはどうでもいい。

肝心なのは、今まだ奴が武器を碎かれたことに対する事実に意識を持つていかれているこの状態だ。

隙だらけの敵の姿を逃すはずがなく、デモンスレイヤーは長槍を用い、続けて鎧や大剣、腰に吊るした武器の数々へと刺突を繰り出していく。

ガリガリと音を立てて削られゆく武具の数々は、やがて限界を迎えてか、その悉くが先の大斧同様、微塵に碎けて塵と散っていく。碎かれた鋼と革の無惨な最期に、所有者たる小鬼達人はただただ驚愕した。

何故、どうして、何だつてこんなことに——！

自分が持っていたのは冒險者から奪つた武具だ！ 連中と同じ武

オレ

具なのに、どうしてこんな簡単に碎ける！

言葉にならぬ言葉で以てそう叫ぶも、それを理解する者はいない。

ただ、その絶叫の内に秘められた憤怒は伝わったのか。

デモンスレイヤー——彼の武具を壊した張本人が、長槍を片手に屹立する。

「貴様の驚愕も理解できなくはないが、その上で言わせて貰えば、この結果は当然なのだ」

ぎゅっと握りしめた長槍の穂先を向け、そこに備えられた坂棘を見せつける。

その長槍——銘を『削り取る槍』。

今や亡びた北の大國、その大門の先に在つたデーモンのソウルより生み出されし一振り。

獸の牙さながらである凶惡な坂棘は飾りではなく、触れたものは例え革だろうと鋼であろうと関係なく、その一切を文字通り削り取つていく武具殺し。

その性質故に、異なる世界の『<sup>デ</sup>モンスレイヤーを殺す者』からも嫌われ、そして同時に恐れられた凶槍であった。

「耐久度の高い武具ならば、相応の時間を要しただらう。

だが貴様の武具は、見た目よりも耐久度は低かつたらしいが……ああ。成程、つまり貴様は——

——手入れをしていなかつたのだな？

デモンスレイヤーが小鬼達人の言葉を理解できないように、小鬼達人もまた、デモンスレイヤーの言葉を理解できない。

だが、何となくだが彼は察した。

今兜内より吐き出された言葉が、明らかに己を馬鹿にし、虚偽とした言葉であることを。

「貴様の技術は確かに見事なものであった。戦の駆け引き、武器の特徴を理解し、それを十全に活かした扱い方。

小鬼の特性を骨子と定めたとはいえ、流石は『デーモンだ』

砕け、形を失った武器の残骸を腰や胴体よりバラバラとこぼしながら、小鬼達人は前へ歩を進める。

唯一残つた盾を背より取り、右手に構えるも、その動作にもはやデモンスレイヤーは脅威を感じてはいなかつた。

「だがな、武器を扱う上で欠かせぬのは手入れだ。如何な名剣名槍も、錆びつき、欠ければいずれ壊れる。

戦場を駆けた者ならば、例え童であつても知つてゐる常識を貴様は知らなかつた。否、学ばなかつた」

吐き出される言葉が耳に注がれる度、小鬼達人の怒りは燃え上がり、その歩みは一層速さを増していく。

「武器を扱えたから己は強く、賢しいとでも思つたか？」

……愚か者めが。魂喰らいの怪物ソウルイータが、人のように気取るな

「——GORBGAAAAGAAAAT!!」

溜まりに溜まつた怒りが遂に溢れ、爆発。

解き放たれた憤怒のままに右手の大盾を乱暴に振るい、眼前の男を叩き潰さんと迫る。

そして一方、デモンスレイヤーも空いた左手を動かし、生じる痛み

を堪えながら己のソウルより1つの円盾を取り出して、

——その盾で小鬼達人の一撃を弾いた。

「——GORGツ!」

盾による殴打を弾かれ、大きく仰け反り、がら空きとなつた胴を刃

が貫く。

深々と肉を抉る坂棘槍。

臓腑の多くを食い破り、夥しい量の血を流させた槍の一撃は致命傷で、もはや小鬼達人に万が一の助かる見込みはない。

「……ああ。 一つ、伝えることがあつた」

彼の命を絶つであろう張本人が、肩口で囁くように小鬼達人に告げる。

「先は貴様を魂喰らいの怪物ソウルイーターと呼んだが……」

言葉を一度区切り、鉄兜に包まれた顔が彼の眼前に現れる。

鳥の嘴を模したのだろう、独特の形状を備えた鉄兜。

そこに穿たれた覗き目スリットのその先、暗い闇の中で灯る蒼白い眼光。

「私も貴様と同じ——魂喰らいの怪物デーモンなのだ」

人語を解せぬ小鬼達人が、最期の瞬間にその真実を理解できたのかは分からぬ。

だが、死の間際で垣間見た蒼白い眼光。

その妖しくも美しい生命の光を通して、あるいは彼は真実に辿り着いたのかもしれない。

自分もこの男も、共にこの世界に在つてはならない存在なのだと——。

## THE DEMON WAS DESTROYED

\*

『——ツ!!』

盤上に表示された文字を目にした途端、異界の神は怒りを露わに拳を叩きつけた。

幼体<sup>コマ</sup>を配置し、その地の伝承や恐怖を基に成長させ、生み出したデーモンが倒されたのだ。

配置した駒の数は少なく、その多くが小鬼の伝承や特性を骨子と定めて成長した個体だが、それでも弱いとは彼は思つてはいなかつた。

例え最弱の種族たるゴブリンであろうとも、デーモンはデーモンだ。

成長性はともかく、基礎能力はゴブリンなどとは比べ物にならないし、何より奴らには、吸魂による劇的成長<sup>レベルアップ</sup>の能力が備わつてゐる。

そのデーモンがこの短時間——四方世界では5年程であるが、その間に2匹も葬られているのだ。

これには流石の異界の神も我慢ならず、溜めた怒りがこうして噴き出してしまつたわけである。

そんな様子を《幻想》と《真実》が傍で見て、げらげらと下品に笑つてゐる。

当然だ。何せ彼らにとつて、異界の神は突然自分たちの遊びに乱入し、勝手に混ざつて盤上を滅茶苦茶にしようとした輩なのだ。

本来ならばすぐに追いだすべき存在だと彼らも理解しているのだが、何故だか彼らはそうしなかつた。

その理由は単純で、異界の神が配置したという『デーモン』なる駒を、盤上の何かが悉く打ち壊し、彼の思惑を台無しにしているからだ。

気に食わない奴が重要な計画の最中に失敗し、悔しがる様は傍から見れば非常に愉快であり、退屈を厭う彼らにとつてソレは非常に好ましい喜劇であり、新しい玩具でもあった。

だから今は気にしない。せいぜい次の駒を配置して、また盤上の何者かに壊されて、怒りに震えて悔しがるがいい——と。

そんなことを思いながら笑い続ける二神を横目に見つつ、異界の神は頭の中で思考を巡らせた。

幼生デーモンを配置し、新種のデーモンを誕生させるという案は悪くなかったが、如何せんあちらもこちらもゴブリンの伝承や恐怖ばかりで、どうしてもそれらを拾つて成長してしまう。

中には当たりも出てくるだろうが、当たりが出るのを長々と待つて

いるほど異界の神はのんびり屋ではない。

より早く、より強い駒を得るにはどうすればよいのか。より危険な土地であれば、その環境に適した魔物の伝承を取り込んで成長するだろうか。

様々な思考を巡らせていると、盤上が空いたからか《幻想》と《真理》、そしていつの間に現れたのか、新たな二柱——《生》と《死》が骰子を回し始めていた。

駒の選択、果ては運命を決めるであろうその行為は、だが今回は違うことに使われていた。

“6の目が出たら、此處にドラゴンの駒を置かせて貰うよ”

『ドラゴンの駒を置く』——その言葉を発したのは《死》であつた。数を指定し、骰子がその指定した数の目を出した場合、特定の駒を置くという新たな規則。

全く考えもしなかつたその方法を耳にした瞬間、彼の頭の中で思考がまとまり、固まった。

そうだ。何も盤上で成長させた駒だけしか扱えないわけではない

のだ。

様々な環境を生き抜き、それを経て成長する魔物も居れば、神より与えられた試練として、突如如何の前触れもなく出現する魔物<sup>イレギュラー</sup>も存在する。

ならばそれを応用し、自分も使ってしまえばよいのだ。

成長し、デーモンとして完成した駒は既に掌中にある。成長させた駒でダメならば、元から強い駒を置いて出してしまえばよいのだ。

そんな考えを抱きつつ、口元に不敵な笑みを湛えながら――異界の神は骰子を片手に、他の神々が集う盤上へと歩み寄った。

## 15. 大失敗

「——倒れていった仲間。私たちの勝利。牧場と、街と、冒険者——それから」

「いつつもいつつもゴブリンクゴブリンク言つてゐるあの変なのに……乾ぱーい！」

『乾ぱーいッ!!』

ギルド内ホールに響く幾多の声。

勝利を祝い、依頼の達成を喜ぶ祝宴の始まりはどこまでも明るく、とても先程まで激戦を繰り広げていたとは思えない様子だった。

勿論、暗い部分がないと言えば嘘になる。

設けられたテーブルの1つには誰の姿も無く、ただ汚れた鎧と武器、杖や魔導書などが無造作に置かれ、そこに綺麗なままの数々の料理が並んでいるだけ。

完全勝利とはいかず、少なからず冒険者の側にも犠牲者は出していた。

だが仕方ない。冒険とは本来、そういうものだ。

冒険の中に戦いがあり、戦いの中に生と死がある。

生きるか死ぬかを決するのは当事者たちの頑張りと、あとは天上の神々が回す骰子の出目次第だ。

前者はともかく、後者についてはまるで信じてなどいないが、ともあれ彼らの奮闘により牧場は守られ、ひいてはゴブリンクどもによる辺境の街への侵略計画が無と帰したことは喜ばしいことだつた。

美酒を豪快に呷り、美味なる料理に齧りつく同業者たちの姿を見つめながら、デモンスレイヤーは壁に寄りかかっていると、1人の人物が彼の元へと歩み寄ってきた。

「……ゴブリンクスレイヤー」

「ああ」

現れたのは、やはりいつもの鎧兜姿の小鬼狩り。

先の戦いで負傷したのか左腕は吊るされているが、声から察するにそれだけのようだ。

「話がしたい」

「そうか。だがここでは何だ、外で構わないかね？」

「構わん」

相も変わらぬぶつきらぼうな言いぶりに苦笑しつつ、デモンスレイヤーは背を預けていた壁から離れ、彼を連れて開閉扉の先へと出た。空は変わらぬ夜天。数多の星々を湛え、幻想的な美しさを纏つ正在するが、彼らの意識はその美しさには向かず、隣り合う互いにのみ注がれてい。

「まずは祝わせてくれ。今回の大戦、その最大の功労者は間違いないなく貴公だ」

「いや……」

「違うものか。貴公が培い、集めた小鬼どもの特性と彼奴らの戦術、行動原理。

それら総てを知り尽くし、それに最適な対応策を授けてくれたからこそ、今回の大勝は成ったのだ」

もつと誇るべきだぞ、と言うデモンスレイヤーに、ゴブリンスレイヤーは兜内で小さく「むう……」と呟いた。

普段の彼ならそれでも違うと言つてくるところだろうが、この反応を見るに、やはりまだ全快には程遠いのかもしない。

「思えば、貴公との巡り合いの切っ掛けもゴブリンであつたな……」

活発化したゴブリンたちを止めるべく、その原因を探つて向かつた先で出会った名も無き冒険者。

そしてその際に邂逅したゴブリン——この世界で最初に出会ったデーモン『小鬼溜り』<sup>ゴブリンパンク</sup>を即興のコンビを組んで倒し、そして5年の月日を経て、この街でまた再会した。

『デーモン』がどうしてゴブリンの伝承や畏怖のみを取り込み、具現しているのか、詳しい事情はまだ分からない。

だが、ゴブリンに擬態し、ゴブリンと化せばこの男がいずれそれらを葬らんと関わつてくるのは当然であり、デーモンでありゴブリンでもある奴らが存在していれば、時と場所こそ異なろうが、彼との再会は既に約束されていたのかも知れない。

「……感謝している」

「む？」

不意に告げられた彼からの感謝に、デモンスレイヤーは静かに、しかし明確に驚愕して彼の方を振り向いた。

「俺一人では、今回のゴブリンハザード小鬼禍は防げなかつた。

皆の協力がなければ、俺はまた、あの時のように失うところだつた」

「……ああ」

「だから……感謝している」

発する声の音こそ変わらずとも、込められた感謝の念が深いことは容易に感じ取れた。

小鬼に故郷を亡ぼされ、大切なものを総て奪われて、およそ人らしい要素の多くを欠いてしまった男。

小鬼を滅ぼすために存在する、一種の機構<sup>システム</sup>と化しかけている彼だが、それでもこうして感謝ができる点では、まだまだ『人らしさ』は失われていないようだ。

「——さて」

昔に懐かしみを覚え、今回の大戦の勝利の味わいを楽しんだ後、声  
音を変えて彼らはようやく本題へと移ることとした。

「私との約定——巣穴にいるであろうもう1体の『デーモン』の方は、  
確と処理をしてくれたか?」

「約定は果たした。お前より借りた聖剣を使って、奴の四肢と首を  
断つた」

「それで?」

「……その後、蒼白い塵となつて消えた。お前より事前に聞かされて  
いたとはいえ、やはりアレはゴブリンではなかつたのだな」

巣穴に籠つていたもう1体の『デーモン』、『小鬼<sup>ゴブリンスタッグ</sup>巨雄』。

その巨大な体躯と剛力とは裏腹に、『繁殖』に特化したかの『デーモン』  
は、おそらく今回の大戦で戦闘に参加することはないだらうと考えて  
いた。

遺跡の人喰い鬼<sup>オーバーガ</sup>が戦闘中に漏らしてくれた情報から知り得たこと  
だが、確かに戦闘向きとはいえない動作と愚鈍さ、そしてそのゴブリ  
ンの脅威性を最大限にまで活かすであらう特性を知れば、今回の大戦  
の首謀者たる小鬼<sup>ゴブリンロード</sup>王が参戦を許すはずがなく、やはりと言うべきか、  
あの個体は巣穴で待機を命じられていたようだ。

念には念をとゴブリンスレイヤーに聖<sup>デモンブランド</sup>剣を持たせて正解だった、  
と心内で呟く彼に、ゴブリンスレイヤーはさらに言葉を続けていく。

「お前はゴブリンの軍勢を他の冒険者と共に掃討し、俺はお前の言つ  
ていた『デーモン』を討つた。

取り交わした約定は果たされたと見ていいか?」

「ああ、それで構わん。……しかし、まさか本当に討つてしまふとは  
な」

「……? ……ああ、確かに殺した」

「そうか。……ああ、そうか」

——殺してしまつたか。

ぽつりと小さく吐き出された彼の咳きは、しかしぴブリンスレイヤーの耳に届くことはなかつた。

当然だ、聞こえぬように言つたのだから。魔性殺しの聖剣を使わせたとはいえ、彼は間違いなくデーモンを殺し、その莫大なソウルを得たのだろう。

本人にその意識がなくとも、主を失つたソウルは、次の宿主を求めて虚空を彷徨うものだ。

それでも多くはその場に留まり、名も無きソウルとして残留し続けているが、直接その手に掛けたなら話は違つてくる。

とはいへ、取り込んだソウルは火防女などのソウルの扱いに長けた者の手を借りぬ限り、その身に還され力となつて備わりつくことはない。

自分のこれも火防女の協力あつてのものであり、さらなる超人的な身体能力を得ようと考へるなら、彼女と同等のソウルの扱いに長けた者を見つけ出さねばならない。

そしてソウルの概念なきこの世界ではそれは叶わず、結果、デモンズレイヤーの身体能力は10年前のあの日と全く変わつていなかつた。

まあ、それはそれとして。

人外の極致たるデーモンを殺めたなら、超常の力の塊たるデモンズソウルを得たのは確実。

例え当初の目的であるデーモンを討ち果たすことは出来ても、あの強大な力を他者に渡らすことになつてしまつたのは、少々口惜しいものがあつた。

「そうだ。——これを」

「——！……貴公、これは」

雑囊に右手を突つ込み、取り出されたのは蒼白い塊。

外見的には光そのものとも言えるそれは、だが確かに実体を持ち、

ゴブリンスレイヤーの掌中に存在していた。

『デモンズソウル』——遙かな異界、極北の国にて跋扈した、人ならざる魔性どもの核。人を超常の存在へと変じさせる至高の品が、そこにあつた。

「奴を殺めた際に、俺の手元に現れたものだ。

俺にはどう扱えばよいか分からぬし、興味もない。……だからお前に

「だが、貴公……」

「あの『デーモン』とやらについて教えてきたのはお前だ。  
ならばこそ、そのデーモンから現れたコレをどう使えばよいのか  
も、お前は知っている筈だ」

——だからやる。

半ば押し付けられる形で渡されたソレを掌中に收め、デモンスレイヤーは兜内でじつとそれを見つめた。

かつて世に名を馳せた英雄豪傑、聖者賢者が求め、終に手にするこの叶わなかつたモノ。

己のいた世界では、およそ如何なる宝物よりも価値のある代物を、  
こうも簡単に渡されてか、何だか奇妙な気分になつた。

(いや、あるいは……)

ゴブリン退治に役立ちそうなものなら貰い、そうでないものには興味の欠片も示さない。

ひどく損な性格だと思ってしまうが、だからこそその彼なのだろう、と。

そんなことを考えて、デモンスレイヤーは小さな笑声を漏らした。

「聖剣の方は神殿にある。小鬼王に負わされた傷を治すために運ばれ  
た際、そこに置いてしまった」

ロード

「そうか。ならばすぐに取りに向かわねばな」

「……すまん。本来ならば、直接手渡すべきところだが……」

「構わんさ。貴公からは、その失礼すらも帳消しにして余りあるほど  
の贈り物を頂いたのだからな。

……さて。では、行くとしようか」

掌中のデモンズソウルを胸に押し込む形で取り込み、纏う鎧を軽く  
鳴らした。

そうして背を向け、そのまま神殿の方へ向かおうと歩み始めて――

「――そうだ」

十数歩歩いたところで、彼はその場で立ち止まった。

「もしも、貴公が力を欲した時。今の己では到底敵わぬ難敵と相対す  
ことになろうと思った、その時に」

がちやり、と鎧を鳴らして体ごと再びゴブリンスレイヤーの方を向  
き、そして言つた。

「もしも頼る者がいなければ、私の元へ来るがいい。

一度限りではあるが、貴公の供を務めよう。まあ、他の形で手を貸  
すことができなくはないが……」

「……その場合は、どうなるのだ」

「そうだな。――最悪、人をやめる覚悟をして貰うことになる」

「……」

それ以上先のことを、ゴブリンスレイヤーは問うことはなかつた。

そしてデモンスレイヤーもまた、それ以上先の内容を紡ぐことはな  
く、今度こそ背を向けて、神殿の方へ向けて歩み進んで行つた。  
冷たい夜風の中に、密かに混じる穢血の香。

何ら変わりない、あの頃と同じ血塗れの戦場の臭い。

忌々しくも懐かしい感覚を味わいながら、古い同類<sup>せんゆう</sup>を残して、魔性殺しの英雄は先へと進んだ。

——そして暫しの時が経ち。

場所は神殿。辺境に設けられた神を祀る聖域は静謐に包まれ、微かに鳴る寝息が聞こえるのみだった。

月明りが照らす礼拝所の女神像。その前に1人、静かに佇む女性の姿はあつた。

白い修道服に包まれたその豊満な身体は、夜ということもあってか僅かな寒さに苛まれてこそいるが、決して耐えられないほどのものではなかつた。

修道女の手の中にあるのは、長大な刀身を備えた白い大剣。

女性とはいえ長身の彼女の背丈ほどもあるうという、およそ常人では扱えない巨大な剣は、彼女が両手を使うことでやつと持てる程度に重く、正直に言つて、早く持ち主は来ないかと思わずにはいられなかつた。

この大剣は、先のゴブリン軍との大戦の後、この神殿に運ばれてきた冒険者が持つていたもの。

彼曰く、この大剣は借り物であり、後で本来の持ち主が取りに来るとのことらしく、神官長に頼まれて彼女がこうして預かり、その持ち主とやらを待つてゐる状態なのだ。

「おつとつと……！」

ぐらり、と傾きかけていた大剣を元に戻し、軽いため息を1つ。

夜更けではあるが、別に受け渡しの仕事を任せられたことに不満を抱いてはいない。

どのような形であれ、冒険者の方々はゴブリンの軍勢を迎え撃ち、見事この街を救つてくれたのだ。

いかに最弱の種族とはいえ、数という点においては他種族を多く上回るのがゴブリンであり、もし冒険者たちが迎え撃たず、この街から避難していたら、今頃この辺境はゴブリンたちの手で蹂躪されていたことだろう。

そして蹂躪された地でゴブリンたちにナニをされるかを、彼女は文字通り身を以て知っていた。

そう考えるだけで、体は小刻みに震えて止まない。

今は同じくこの神殿に修道女として勤めている妹たちもそうだが、彼女たち三姉妹は未だ、ゴブリンの恐怖を拭いきれていない。

この世界において、ゴブリンに娘が攫われ、慰み者にされて家に籠ってしまうことは珍しくなく、故に彼女たちの状態もごく当たり前のものである。

悪夢の如き時間を過ごし、人と、そして女として尊厳を汚し尽され、果てには苗床として奴らの同族を産ませることもある。

珍しくないからこそ、いつそれが起きてもおかしくはなく、身近な恐怖としてこの10年、それは彼女を苛み続けているのだ。

そう思うと、一層彼女の内で小鬼への恐怖は増し、預かつてている大剣を抱きながら、件の持ち主が早く来ることを強く望み始める。

早く、早く、早く、早く――。

(――早く……!)

――カツン。

思い出し、湧き上がる小鬼への恐怖。

それを突如遮つたのは、礼拝所内に響いた靴の音だつた。

硬い鉄靴の音と共に、鳴り響くのは鎧の音色か。

がちやり、がちやりと耳にその音が響くたびに、その音の主との距離が縮まっていくのが実感でき、月明かりに照らされ、伸びる影が静かに彼女の身体を覆う。

そうして音が徐々に大きくなり、近づく人影の姿がようやく明確になってきた頃に彼女は目を凝らし——そして驚愕に見開いた。

「あ……」

白の修道女の瞳に映るのは、武骨な鎧兜に包まれた長躯。

2m近くはあろう長身を覆う板金鎧。

腰に佩いた長剣と、背より覗く騎士盾。

そして頭を覆うのは、鳥の嘴にも似た独特の形状の鉄兜。

彼がいかなる人物であるのかは、昼に神官長より聞かされたことから理解していた。

だが同時に、これも同じく神官長より教えられたことであり、それが彼女にこれほどの驚愕を抱かせる要因となっていた。

10年前、まだ彼女とその妹たちが少女であつた頃のこと。

ゴブリンに故郷の村を亡ぼされ、身ぐるみを剥がされ、巣穴に連れていかれ、慰み者にされていた時。

あの醜悪なゴブリンたちを討ち滅ぼし、あの地獄より自分たちを救い出してくれた人物。

その人物も、同じような全身鎧を纏つていたという——その事実に。

「——デモン、スレイヤー、さま……」  
「貴公は、昼間の……」

\*

その神は、一言で言えばひどく上機嫌であった。  
『死』の一言を切つ掛けに始めた骰子振り。それを繰り返した結果、盤上には新たな彼の駒が出揃う形となつていた。

完成した『デーモン』は例え金等級冒険者という歴戦の猛者であろうと時に討ち倒し、弱卒ならば例え軍勢を組もうとも1体で葬れるほ

どに強力だ。

やがてデーモンが盤上の世界を蹂躪し、多くのソウルが世界に満ちた時、その時こそ愛すべき毒の仔が覚醒し、真にこの四方世界を救済<sup>終焉</sup>に導くであろう。

傍ではやはり、他の神々が何やら文句を垂れているが、彼は特に気にせず、再度駒を置かんと骰子を掌中で転がしていた。

そして、再度の骰子振り<sup>ダイスロール</sup>。

転がる骰子が軽やかな音色を奏で、ころころと刻まれた出目を変えていく。

狙うは『6』の目。それさえ出れば、また1つ、新たな駒を置くことができる。

これまで行つた2回は、その總てが成功し、彼の望んだ駒が四方世界に放たれる形となつた。

もしこのダイスロールが成功すれば、彼は3体目の駒<sup>デーモン</sup>を配置し、世界には3体の災厄が顕現することとなる。

それはかの世界に住まう者たちからすれば、何としてでも止めねばならないことだが、次元の異なる存在に干渉できるわけもなく、地上の彼らは、認識することすらできず、ただ駒の出目が決まることを待つことしかできなかつた。

そして骰子の動きが止まり、ようやく出た出目の数を異界の神が確認すると、

『  
!?

1

ここにきて初めての失敗。<sup>ファンブル</sup>

望んだ『6』の目とは全く真逆の『1』の目。

どこか不吉さを感じさせてやまないその出目を凝視していると、突如盤上的一部が発光し、そこに新たな駒が配置された。

一体どういうことだ、とすぐ隣にいた《真実》に問うと、何を言つているんだと言いたげな顔で、《真実》は彼にこう言うのだった。

“<sup>ファンブル</sup>大失敗になつたんだから、そりや相応の展開になるでしょ”

その言葉を聞いた途端、神々の領域に声にならない絶叫が鳴り響いた。

彼が<sup>ファンブル</sup>大失敗を引き起こした理由は1つ。

それは、彼がまだ、この世界の神々の遊戯に対しての『未知』を残していた——ただそれだけであった。

## 16・5. 色のない悪夢

鈍い鋼の輝きを湛えた、武骨な板金鎧。

腰には長剣、背には騎士盾を帯び、その頭部は嘴型の鉄兜で覆われている。

『デモンスレイヤー』——魔性殺しの呼び名で名高い人物。

その名が示す通り、数多くの魔性や怪物を葬り、人々から羨望と歓喜の声を一身に浴び続いている最新の英雄。

本来ならば、このような辺境にいるべきではない大物が、田舎に設けられた神殿を訪れることはない。

しかし、多くの事情が重なり、彼女が手にする聖剣を切っ掛けに、こうしてまた会えたことは偶然なのか必然なのか。

ともかく、昼間出会つた鎧の人物との再会が叶つたことに若干の安堵を覚える彼女であつたが、それ以上に予想外の人物の訪問に対する驚愕の方がそちらを上回つていた。

「デ、デモンスレイヤーさ——あ！」

「……つと！」

預かりものを抱えたまま、彼の元へ向かおうとする白の修道女。けれども女性である彼女が両手を用いることでやつと支えられるほどの重量を誇る聖剣は、一瞬のバランスの崩壊により、彼女ごと倒れかける。

そうなるだらうことを先読んでいたのか、デモンスレイヤーは甲冑の重みを感じさせない速さで動き、右手で大剣を、左手で倒れかけた彼女の体を支えた。

「気をつけるといい。その聖——大剣は男の腕力であつても持つことが難しい。

貴公のような細身の女性ならば、尚更だらう」「あつ……はい」

「うむ」

小鳥のさえずりのように小さな返事の後、左手で白の修道女の体を立たせる。

昼間は勇者一行との一件もあって、あまり意識は向けられなかつたが、こうして服越しに触れ、よく見てみると女性としては肉体的に恵まれてゐるようだ。

背丈も高く、肉付きも程ほどに良い。暗視を可とする自身の双眸には、麗しい金紗髪と整つた顔立ちが映つている。

これほどに容姿に優れているのなら、多くの男から言い寄られ、それなりに恵まれた家庭も築けただろう。

なのにそうはせず、このような神殿にて修道女として勤めているのは、つまりその類の事情があるやもしれないからだ。

「……つと。 そだつたな、これがまだだつた」

もう片方の手で握る白亜の大剣——『デモンブランド』。

真に魔性殺したる聖剣を己のソウルの内に収めると、確認するように鎧の胸部を軽く叩き、首肯の如く鉄兜を何度も上下させる。

「確かに返して貰つた。 短い間とはいえ、我が剣を預かつていってくれたこと、感謝する」

「いえ、そんな。 ……わたしたちにできることなどは、これぐらいしかありませんので」

実際その通りだつた。

位の高い神官長や、才ある他の娘らなら、奇跡を授かり人々を癒してあげることもできる。

だが、彼女にはそれがない。 それができない。

所詮は片田舎で生まれた三姉妹の長女でしかない彼女には、そういった才の類はなく、誰でもできるような小事をこなすことしかでき

なかつた。

「否、それは違う」

だがそれを、デモンスレイヤーは真正面から否定した。

「信仰とは寄る辺であり、力なき人々が安堵を得るために縋る縁だ。  
神殿はその象徴であり、そこに勤める貴公らの存在あつてこそ、世  
の民草は疑心を抱くことなく、真直ぐに信じ続けられるのだ」

「そう、なのでしょうか……？」

「そうだとも。……尤も、その信じる存在を見極める必要はあるがな」

「……？」

最後にぼそり、と咳きをもらしたデモンスレイヤーだったが、それ  
を白の修道女は聞き取ることができず、不可思議そうに首を軽く傾げ  
た。

「……では、私はこれで」

「……！　——あの！」

用が済み、その場から立ち去ろうと背を向けたデモンスレイヤー  
へ、修道女は叫ぶように呼び掛ける。

「……」のようなことをお訊ねするのは、失礼なのかもしれません。  
それでも、聞かせて欲しいのです……！」

——あなたは怖くないのですか？

その言葉は、彼女の心からの問い合わせであり、過去からの悲鳴その  
ものだつた。

突然、何の前触れもなく起こる怪物騒動。モンスター・パニック

荒ぶる怪物、魔物の襲撃の前では、人の築いた町村などはあまりに

も脆く、たつた一晩でこの世界から消え去ることなどは然して珍しくもない。

そして冒険者とは、そんな災禍の如き怪物を相手取り、命を賭けて戦う者たちだ。

冒険に生き、戦場に身を投じる理由は個々によつて様々だろうが、共通していることは1つ。

彼らが皆、あの恐ろしい者共の前に立ち、その身と命を危険に晒していることだ。

勝てばそれで良いが、負ければ、その末路の多くは死である。

あるいは死は免れても、生きたまま住処に連れていかれ、玩具や食料、またそれ以上の最悪な扱いを受けるかもしれない。

それこそ死んだ方が遙かにマシと思えるほどの、凄絶な体験を味わう羽目になるかもしれない。

それをデモンスレイヤーは理解しているだろうと思つたからこそ、彼女は問うたのだ。——怖くないのか、と。

「……怖い、か。そうだな……」

その問いかけに何か思うものがあつたのか、デモンスレイヤーは独り呟く。

その呟きは何かを思い出すための行為のようにも思えたが、その内容までを窺い知ることは、きっと誰にもできはしない。

「……恐怖を感じないわけではない。私も生者だ。死は恐ろしく、そして魔物どもから受けるであろう仕打ちなど、悍ましくて想像もしたくない」

沼の大ナメクジに群がられ、溶かされるように毒を注がれ、じわじわと攻められもした。

長い舌で巻き取られ、骨から肉をしゃぶり取られる感覚を味わい、その果てに絶命したこともあつた。

特に監獄塔の獄吏どもより受けた、あの冒涜的仕打ちなどは微塵も思い出したくもないほどにトラウマだ。

だが、それでも――

「恐怖に足を固め、歩みまで止めてしまつては死んでいるも同然だ。死にたくない、酷い目に遭いたくないと思うのは誰も同じだが、それを理由に立ち止まつていては、結局何も変わらない」

“だから前へ進むのだ”

周りを変え、世界を変えるにはまず、己から変わらねばならない。変わるには行動せねばならず、そのためにはまず一步でもいい、前へ進まねばならない。

例え1つ1つは小さくとも、積み重ねればいつか千里の果て、天上の頂へと届く。

その一歩を踏み出すために、彼は獲得したのだ。

地獄の如き日々の中で培い、育てた――強固なる『意志』を。

「過去の悲劇をなかつたことにはできん。だが、未来にて起き得るだろう悲劇は止められる。

己の歩みが止まぬ限り、それはきっと止められるのだ」

それを最後に、彼は再び歩みを再開し、今度こそ礼拝所を立ち去り、神殿の外へ向けて出て行つた。

1人取り残された白の修道女。彼の後を追うことなく、しかし自身の寝所へと向かうこともなく。

「悲劇は、止められる。自分の歩みを、止めない限り……」

ただそこで、彼の口から放たれた言葉を繰り返していた。  
まだ過去のトラウマから抜け出せない、己自身に言い聞かせるよう

\*

「……、……、……ツ！」

その小鬼は、独り走っていた。

短い両足を懸命に動かし、少しでも先へ進もうと、がむしゃらに突っ走っていた。

醜悪な緑の顔は、目と鼻より流れ出る液体に塗れ、その表情は恐怖一色に歪んでいた。

何故だ。何故、こうなつた。何で自分がこんな目に遭わなければならぬ——！？

言葉持たぬ小鬼の叫びは響けども、それに応じる者はいない。

当然だ。何せ此処はもう、まともな輩など存在していないのだから。

「……GOR Gツ!？」

疾走の最中、道端に転がっていた小石に躓くことで、小鬼の矮躯が地面に転がる。

土煙が立ち、緑の肌を土で汚されたことに若干の怒りを覚える彼であつたが、その怒りすらも、後を追ってきたモノの存在によつて、総て恐怖へと変えられてしまった。

——ズンツ。

一步——ただそれだけで、大地が揺れた。

路の左右に立ち並ぶ、森の木々が共に揺れ、その足音の主の存在規模を表わしていた。

——ズンツ。

一步——今度は天が別たれた。

空を覆う厚い雲が、ただ一步より発せられた淒絶なまでの存在感によつて真つ二つに割れ、隠されていた蒼穹を晒した。

進行の速さは然程ではなく、どちらかと言えば鈍重の部類に入るかもしれない。

だが一步一歩における歩幅の巨大さが、鈍重という枷を嵌めてなお、逃走する小鬼へと追い付かせたのだ。

「GORB……！」

確実に距離を縮め、近づきつつあるソレの存在を感じ取ったその瞬間より、小鬼は逃走のための足を止めた。

転がり、尻もちをつく形で地面に座り込む小鬼の腰布の一部が湿り、股間部分からは生暖かい液体が溢れ、同じように地面を湿らせていった。

そして、遂に——ソレは現れた。

——ズンツ!!

ソレは、あまりにも武骨であった。

全身を固める鎧は分厚く、至る箇所にて湛えられた鋼の輝きが、その鎧が只ならぬ代物であることを証明している。

ソレは、あまりにも堅牢であった。

尋常ならざる鎧を守護する、左手に携えられた大盾。ただそれだけでも、まるで1つの城塞の如き存在感を醸し出して止まなかつた。そして、ソレは、ソレは、ソレは――

ソレは――あまりにも巨大であつた。

「GORB！ GOR――」

泣き叫ぶように、そして己の悲劇を訴えるような小鬼の叫びは、肉を潰す鈍い音と共に途中で途切れた。

小鬼の座り込んでいた場所には今、ソレの巨大過ぎる足があり、その足裏からは、決して少なくないドス黒い色合いの液体が溢れ、流れ出ていた。

鋼色の鉄靴裏を魔物の血が汚すが、きっとソレにとつてはどうでも良いことなのだろう。

肝心なのは、そこに生ある者が存在し、奪うべきものを持っていたということ。

踏み潰した小鬼の骸より蒼白い光が生じ、宙に漂い浮び始めたそれを待つていていたように、ソレは兜を通して丸ごと呑み込んだ。

「——ツ!!」

言葉なき咆哮を森林に轟かせる。

咆哮と共に発せられた凄まじいまでの力圧に木々が潰れ、大地には幾つもの裂け目が生じる。

天変地異もさながらの凄まじい現象が世に顕現した後、ソレの背後より白く、されど透明な霧が現れて、

——やがて音もなく、静かに、その一帯総てを包み込んだ。

## 17. 霧を進むもの

「——ヌンツ！」

重々しく、低みのある一声と共に、超重量の一撃が振り下ろされる。人の身では決して扱えぬ漆黒の巨斧は、その刃なき斧頭の重みのみで眼下の敵——醜悪なる緑の小鬼を叩き潰し、かの者の身を赤黒い血肉の塊へと変えた。

これで10匹……潰した個体を含め、ここまでに葬ったゴブリンの数を数えると、鉄鎧の男——デモンスレイヤーは後ろの方を振り向いた。

「そちらはどうだ」

「——ああ」

ひゅんっ、と風を薙ぐように鋭い音を奏で、緑の醜悪な頭が刎ね上がる。

振り切られた剣は中途半端に長く、それを振るう扱い手の姿も、変な程度に半端なものだ。

薄汚れた革鎧と、両角を欠いた鉄兜。

腕に括り付けた、傷だらけの円盾には血が跳ね付いており、装備の汚れ具合も相まって、ひどく不衛生な印象を受けてならない。

そんな彼——ゴブリンスレイヤーは振り切った長剣を軽く振るい、血振りを済ませた後にそれを鞘に叩き込み、そこでようやく協力者デモンスレイヤーの方を振り向いた。

「問題ない」

「であろうな」

頭から爪先を鎧兜で覆い固めた者同士。

共に殺戮スレイヤー者の名を冠する熟練の冒険者2人は今、依頼のもとに遠出

をしていた。

目的は言うまでもなく、特にゴブリンスレイヤーがいることから、討伐対象はゴブリンである。

依頼内容は、山中の遺跡に巢食ったゴブリンの群の討伐。

最近いすこかの地より流れてきたのか、廃墟も同然であつた遺跡に縄張りを布き、そこを拠点に山下の村々を襲つてゐるのだという。

幸いというべきか、襲われてゐるのは今のところ家畜や作物の類だけであり、女子供を攫われたという被害は出ていない。

とはいゝ、放置しておくべき案件ではないのも確かで、例の如くゴブリンスレイヤーがそれを受け、こうしてやつてきたわけなのだが……

「それで、分かつたか？」

「……いや、すまん。正直なところ、普段のゴブリンどもと何ら変わらないな」

「そうか」

今回のゴブリン討伐に同行したのは、いつも彼と行動を共にしている女神官でもなければ、最近よく一党パーティを組むようになつた妖精弓手エルフ、鉱人道士ワードマン、蜥蜴僧侶リザードマンの3人でもない。

今回の同行者であるデモンスレイヤーは、ある目的のために依頼への同行を願い出たのだ。

それは、ゴブリンという魔物の生態、行動特徴の確認。

ゴブリンとは如何なる種族で、何を糧に日々を生きを、何を以て己の悦楽とするのか。

雄のみなのか、雌は本当にいないのか。攫つた女子供をどのようにして辱め、あるいは何の楽しみとして使うのか。

とにかくゴブリンという存在の、ありとあらゆる要素を再び確認し、記録するべく討伐に参加した彼であつたが、調査の方ははつきり言つて、芳しいものではなかつた。

「数に任せた典型的な人海戦術。糞尿と汚物を混ぜ合わせた毒を塗つた短剣。

たまにやつてくる、仲間を囮にした奇襲。……どれもこれも、私がよく知るゴブリンどもの戦闘手段と武具だ」

「奴らが繰り出してくる手はそれだけではない。

攫つた娘を人質にする。巣穴の中に数々の罠を張り巡らせる。

長に率いられた群れならば、さらに狡猾な手段を用いて冒險者おれたちを誘い込み、より大規模な群れならば狼を乗騎として扱いもする」

「聞けば聞くほど際限がないな、彼奴らめの悪辣さと、多方面における成長具合は」

「そうだ。だから常に学んでいかねばならない。

奴らがどのように行動するのかを。ある程度の収穫を得た奴らが、今度は何を求め、何に狙いを定めるのかを。

そしてその際に、どのような手を講じ、使つてくるのかを」

疑問と感想を述べるデモンスレイヤーに対し、淡々とその疑問に答えるように言葉を紡いでいくゴブリンスレイヤー。

もしも彼らの他に今回、別の同行者が居て、今の彼らの光景を目にしてなら、きっと生徒と教師のようだと思つただろう。

経歴と実力を考えれば、立場は逆のように思えてしまうのだが、今回 の課題はゴブリンであり、ならばそのことについてゴブリンスレイヤーの右に出る者はいない。

そしてデモンスレイヤーは、良くも悪くもあらゆる方面において貪欲だ。

自らが知らぬ知識があるのなら、この先のためにと知ろうとするし、扱いの難しい武具でも、いつかどこかで役に立つと思い、収集してしまう。

その他にも金銭、人脈、素材に仕事、その他の物々等と――。

流石に抑えるべきところは抑えているが、基本は己にないものは例外なく手に入れようと/or>するし、そのためなら手間も努力も惜しまない人物であつた。

ならばこそ、自分と比べて経験は圧倒的に不足し、社会的地位や実力においても大きな差がある若者が相手でも、恥じることなく教えを請い、求めるものを得ようとするのだ。

そんな彼だからこそ、ゴブリンスレイヤーも嫌がることなく——理由の大部分はゴブリン討伐が摂るという考えだろうが、教えを乞う先達に、自らが知るゴブリンたちの情報を惜しむことなく与えていた。

「とにかく想像しろ。自分がもしゴブリンであつたのならと。

連中に成りきり、あらゆる状況を仮定し、その中で何を目的にし、そのためならどのような手を使うのかを、徹底的に想像するべきだ」「……成程。過ぎた想像や妄想は、己を殺める毒や刃となると考えていたが、ゴブリン相手ならば、その行き過ぎさえもまだ不足と捉えた方が良さそうだな」

「奴らを相手に過ぎるという言葉は存在しない。

剣や槍で殺すのはもとより、魔法や奇跡、スクリール卷物による大出力での殺傷も考えるべきだ。

奴らがそうであるように、こちらもあらゆる手段を講じ、準備し取り揃え、いついかなる状況に陥つてもそれを放つて奴らを殲滅できるよう整えておかねばならない

「だが貴公、教えを乞う立場の者としてこう言うのは何だが、そのやり過ぎで周辺に多大な影響が出たとしたら大変だぞ？」

例えは山をも削る大魔術を使使したとして、その威力があまりに大きく、山の削れた部位が崩れ、それらが落ちて近辺の村々にでも降つたらどうするというのだ？」

「……」

「おい」

考えていいなかつたのか——そんな感じで黙り込む鉄兜の若人を見つめながら、デモンスレイヤーは兜内で嘆息した。

しかし、と。あの時の若者が、こうして今もゴブリン狩りに勤しんでいるなどと、一体誰が考えようか。

いや、正直な話、彼ならば必ず生き残るだろうと直感的にそう思つてはいたのだが、5年も変わらずゴブリン、ゴブリンとは少々驚きであつた。

だが、あるいはそれこそが、今の彼を彼たらしめる所以であり、ここに存在させている最大の縁なのだろう。

復讐に憑りつかれた者は、例えいかなる苦難に陥ろうと、それを果たすべく生き続ける。

例えこの世から完全に滅ぼすことができなくとも、その命の燈火が消える寸前まで生き続け、それらを殺し続ける。

きっと彼も、そうなりかけている身なのだろう。嫁を貰い、子を設け、人並みの暮らしができるようになつたとしても、きっと、彼は、そのままであり続ける――。

（故にだろう。私が彼に対し、同胞を相手にした時と同じ感情を抱いているのは……）

魔境の旅の最中に見つけた、幾つもの召喚文字。サモンサイン

呼び掛け、招き寄せて、その力を借りて憎き『デーモン』どもを葬つた回数は数知れず。

理由こそ異なるが、彼らは自分と同じく、デーモン狩りの旅路を進んだ同胞だ。

何らかの理由で裂け目に潜り、その中でデーモンどもに殺され、楔の神殿に魂を囚われた哀れな愚者たち。

時に黒き影となつて、我が身の利益のために襲い掛かつてくる輩もいたが、それでもやはり、彼らは数少ない、同じ気持ちを共有できる戦友なのだ。

そんな彼らと同じ感情を抱けるゴブリンスレイヤーは、やはりとうべきか、こちら側に近い人間なのだろう。

「——GORBツ!!」

そんな思いに浸るデモンスレイヤーのことなど知らぬとばかりに、あの下卑た声が再び耳内に響く。

見れば件の遺跡、そのさらに奥よりさらなるゴブリンの群が現れ、その手に様々な武具を携え、吼え叫んでいた。

さらに奥にはホブ<sup>ゴブリン</sup>が2匹。そして最奥にいるのは、奇怪な装束に身を包んだ小鬼術士<sup>ゴブリンシャーマン</sup>——おそらくは、この群れの長だろう。

「見たところ、あれが本隊。そしてこの遺跡に残るゴブリンどもの残存兵力だろう。

さて……どうするね、ゴブリンスレイヤー？」

「決まっている」

嘴兜の古強者の問いに、薄汚れた鉄兜の若人は即答する。

「ゴブリンどもは——皆殺しだ」

「承知した——ならば、即座に廻殺である」

腰に佩いた長剣を引き抜き、肩に担いだ漆黒<sup>ドーザー</sup>の巨斧<sup>アクス</sup>を構え直す。いかなる相手が出て来ようとも、彼らが為すべきは既に定まつている。

蔓延る害悪、害獣の中より討つべき敵を見出し、討ち果たす。

片やゴブリン、片や異界のデーモン。

狙う相手こそ異なれど、本命を討つためならばそれ以外を殺すことも厭わず、故に。

「——行くぞ」

2人が得物を片手に、互いへ向けてそう言つたのは、ほぼ同時のことであった。

\*

——馬車ががたごと音を立てて揺れると共に、鎧が武骨な音色を奏でる。

件の遺跡に巢食っていたゴブリンの群を討伐し終えたゴブリンスレイヤーとデモンスレイヤー。

依頼を達成し終えた2人は、依頼主のいる山下の村へと戻り、依頼主への報告を済ませた後、迎えの馬車に乗つて帰路に就いた。

結果は完全勝利……とまではいかずとも、一応の目的は達成され、少なくとも彼らにとつては意味のある戦いではあつた。

「街へ戻つたら、貴公はどうするつもりだ？」

騎士盾を磨きつつ、向かいに座るゴブリンスレイヤーに問い合わせる。

「ギルドに報告を済ませ、牧場へ戻る」

「そうか。あの神官の娘や、森人たちに会いに行かぬのか？」  
「必要ないだろう」

ぶつきらぼうに言い捨てるゴブリンスレイヤー。

だがきっと、その言葉に悪意はない。本当に必要ない、と。そう信じているから、その言葉であるのは分かつていいのだが、それにしても他者を誤解させるような言い振りに、デモンスレイヤーは兜内で苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「私やあの娘らなら、貴公という人間についてよく知つてゐるからいいが、他人に対してもその言い方は控えた方がいいぞ？」

「何故だ？」

「要らぬ誤解を生むからだ。貴公とて、必要な敵を作りたくはないだろう？」

「……ああ」

——確かに。

鉄兜を被る頭を上下させ、首肯して見せる彼ではあつたが、はたしてそれを本当に実行してくれるかはまた別の話だ。

未だ『デーモン』出現の可能性がある以上、自分はいつまでも彼と共に行動することはできない。

だが、この先共に一党を組み、依頼を受けて冒険をするだろう女神官たちの方は、きっとこの言い方を含め、彼の言動に振り回されるととなるだろう。

別に子細に至るまで面倒を見る気はないのだが、流石にこれを放つておいたら彼らの気疲れは相当なものとなるのは確かだと。

そう考えると妙に可哀そうに思えてしまい、せめて自分のできる範囲で直せる部分は直しておこうと思つたのだが、この様子では先はまだまだ長そうであつた。

「——デモンスレイヤー殿！ デモンスレイヤー殿はおられますか  
!!」

ふと、馬車の外よりそんな声が聞こえた。

叫び声と言つてもいいほどの、他を一切に気にしない大声の主は、確かに彼の渾名を呼んでいた。

馬車の垂れ布をめくり、外に顔を出すとそこには軽装に身を包んだ兵士——おそらくは伝令兵の類——が馬に跨り、全力でこちらの馬車へ向けて走り寄つてきていた。

明らかに只事ではないことを察したデモンスレイヤーは、すぐさま御者に言つて馬車を止めさせ、走り寄つてきた伝令兵を迎えた。

「何用かな？」

「はあ……はあ……し、子細については……これを」

相当な距離を走つてきたらしく、騎馬のみならず、騎手の方も疲れ

がたまり、呼吸もかなり荒くなっている。

それでも伝えるべきことを伝えるためか、懷より取り出した封じ袋を彼に渡した。

そして渡された袋の封を開き、内包されていたものを取り出すと、デモンスレイヤーは兜内で両目を僅かに見開き、驚愕の声を静かに漏らした。

「……これは――」

内包されていたのは1枚の羊皮紙。

質の良い羊皮紙に記されている文字の羅列は美しく、まるでそれだけで一種の芸術品とも思えてしまうほどに整っていた。

だが何も、文字の美しさに魅せられたが故に目を見開いたのではない。

羊皮紙の端、左角の辺りに押された『印』が彼の心を驚愕で満たし、続けて記された文字の羅列が意味する内容が、彼の視線を集中させたのだ。

「……ゴブリンスレイヤー」

あらかた紙面の内容を読み取った後、嘴兜が馬車の方へと向けられる。

めくられた垂れ布の先に座る、薄汚れた鉄兜の冒険者より「何だ」の一言が紡がれると、驚きと怒り、そして僅かな喜悦の混じつた声で、デモンスレイヤーは答えた。

「どうやら……仕事が、入ってしまったようだ」

“緊急の案件あり。至急、王城へと来られたし”

記された美麗な文字の羅列の意味はそれであつたが、さらにその下に刻まれた文字はまた別の人物のものらしく、だがデモンスレイヤー

にとつては、寧ろそちらの方が重要と目すべきものであった。

“そなたの言う『異形のデーモン』とやらが絡んでいるやもしれぬ

”

その一文を記した人物が誰であるのか。

それを察するのに、そう時間は掛からなかつた。

\*

始まりは、数ヶ月前のとある一報であつた。

四方世界の北方。そのとある森林地帯を、突如謎の霧が覆つた。  
最初の目撃者の発言では、ソレは『白く、けれども透けているよう  
にも見えて、だが奇妙な濁りを持つていた』らしく、霧の内部を確認  
することはできなかつたという。

それでも霧が完全な無害な代物という確証はなく、よつて王命のも  
と、偵察隊が派遣され、霧の調査が始まり——そしてすぐに、その結  
果は出た。

「——お待ちしておりました、デモンスレイヤー様」

「ああ」

各所で馬を乗り換えながら、出せる全速で王都へと到着した彼は、  
街道を直進し、そのまま目的の王城へとやつて來た。

出迎えた衛兵の言葉に軽く応じつつ、無遠慮に王城内へ踏み込み、  
案内役の兵士の先導のもと、その内部をすたすたと歩き始めた。

鎧の鳴音を回廊に響かせながら、堂々たる姿で進むデモンスレイ

ヤー。

久方ぶりに通る回廊ではあるが、だからと言つて新鮮味があるわけでもなく、故に何の遠慮をすることなく直進できたのは幸いであった。

そのおかげで目的の場所へ至るまでにそう時間はかからず、程なくして彼はその場——石造りの大広間へと到着した。

「——来たか。デモンスレイヤー」

「……は。遅参致しましたこと、誠に申し訳ございません」「構わん。それよりも、さあ、空いている席に座ってくれ」

大広間への到着と共に、彼を迎えたのは聞き慣れた若い男の声と、複数の視線。

既に大広間には他の面子が揃つており、仲の良し悪しはともかく、デモンスレイヤーが知る顔も複数あつた。

既に全員が会議用の円卓——数百年前の鉱人王が眺めた代物に腰掛けしており、国王の言葉に従い、彼も空いている席に座り、緊急会議に参加した。

「さて、重要人物の1人が到着したところで何だが、先の話の続きをどうか」

「陛下。まだあの方々の姿がお目見えになつていませんが……」

「よい。確かに今回の異変解決において、相応の人員が求められるが、不可欠というわけではない」

それに、と。若き国王は声音を低いものへ変えて、先を続けた。

「これ以上の遅延は認められん。かの怪異は時を経ることに被害を拡大させつつある。

取り返しのつかない事態に陥る前に、何としてでも解決せねばならん」

異議を認めぬ声音でそう宣言する国王の視線が、不意に一瞬、デモンスレイヤーの方へと向けられる。

注がれた視線の内に込められていたものは、おそらく期待と、責務の思ひだろう。

あの紙面の下部に刻まれていた一文の記主は、間違いなく国王本人だ。

そして彼とデモンスレイヤーのみが知る事柄——『異形のデーモン』。

それに関わるやもしけぬ今回の異変。交わした約定と、事態の收拾も兼ねて、国王は今回の件をデモンスレイヤーに任せた氣でいたのだ。

一国の王として、前者の理由は国王失格の烙印を押されても文句は言えないが、一個人としてその判断は、何とも申し訳のない思いで一杯になるほどありがたいものだった。

それなりの葛藤の末に導き出した答えならば、己もそれに応えねばならぬと。

そう決意を固めたデモンスレイヤーは「仰る通りで」と国王の言葉を肯定することで彼の意思に賛同し、それを切つ掛けに国王は会議の続きを求め、傍らの銀甲冑——昔馴染みの近衛将軍がその求めに応じ、続けた。

「遅れて参じたデモンスレイヤー殿のためにも、今回の異変、その状況をお浚いしよう」

近衛将軍の言葉に、他の重鎮たちが頷き、肯定する。

「まず始めに、今回の異変が最初に確認されたのが数ヶ月前。

北方にある一部の森林地帯にて、突如霧が発生し、その一帯が丸ごと呑み込まれたというのが、近隣住まいの目撃者たちの発言だ」

「確か將軍、その霧とやらは、我々の知るものとは異なる不可思議な要

素を持っていたそだな?」

褐色肌の巨漢——宫廷魔術師がそう問うと、近衛将軍は「そだ」と短い言葉と共に頷いた。

「話によれば、その霧は白く、透けていて、しかし奇妙な濁り故に内部を見るることは叶わなかつたという。

白いという特徴があるゆえに、このような言い方はおかしいと思う者もいるだろうが、その霧にはまるで色がないようにも見えたそうだ」

（色のない霧、だと……？）

『色がない』——その特徴は、デモンスレイヤーにとって因縁深い代物のソレに該当していた。

だが、断定するには要素が欠けていたゆえ、彼はそのまま話の内容を傾聴し続けた。

「最初の目撃から数日を経て、今度は目撃者が出た村とは別の、近辺の村が霧に呑み込まれたそうだ。

その際に呻き声のようなものが多数発せられたとの声もあるが、その正体が何であるのかまでは確認できていない」

「だから偵察隊を派遣したんだろう? 様子見だけでもいい、とにかく情報を集めなけりや、動けるものも動けやしねえってな」

そう言つて円卓に置かれた茶菓子を齧掴み、ぼりぼりと無遠慮に貪つてているのは、犬人の男であつた。

使い込まれた鎖帷子を纏うその矮躯の、首元から垂れ下がる認識票の色は『金』。

事情故に今は銀等級に落ちていて、デモンスレイヤーと同じく、國家級の大任務を任せると能うと認められた猛者だ。

「で、結局どうなつたんだよ？まあ、こんな様子だ。大体の想像はつくがな」

「……ああ。白状すれば、偵察隊は帰還せず、連絡も一切確認されていない。

実際に見た者は皆無だが、間違なく、偵察隊は全滅しているだろう」

その一言に、大広間の空気が一瞬で凍りついた。

霧の正体は未だ分からず、そしてその内部すらも把握できてはおらず。

それを知るべく調査人員を派遣したというのに、まるで見えない何かに呑み込まれる形で消息を絶つたというのだから恐ろしい。

知る者はおらず、探ろうとすれば呑み込まれる。

まるで不可視の大顎アギトがそこに存在するような、得体の知れない恐怖に包まれつつあるその状況を、だが国王は未だ力漲る静声で以て打ち破り、皆に喝をいた。

「それで将軍、他には何かあつたのかね？」

「……これは最後の目撃者の発言ではありますが、正直に言つて、この場に各々方が信じてくれるかどうか」

「構わない。話してくれ」

「——はつ」

国王からの許可を得て、近衛将軍は姿勢を直し、一層自身の周りの空気を張り詰めらせながら、その先を語つた。

「偵察隊が全滅したのが先か、それとも後なのか。

それについては不明のままだが、おそらくソレが絡んでいる可能性は高い。

最後の目撃者の話では、偵察隊が霧の探索に向かつた後、巨大な足音と共に霧の中で何かが動き始めたそうだ」

「その何かとは?」

「これもやはり、その正体までは明らかとなつていないが、曰く——」

「霧の中を——巨塔が歩いていたとのことだそうだ」

## IF：死と謎と狂氣と惡意と

——カラん。

むかし、むかし、今よりも星の灯がずっと少なかつた頃。

光と秩序と宿命の神々と、闇と混沌と偶然の神々の、どちらが世界を支配するのか。

殴り合いではなく、サイコロで勝負をすることにしました。

神々は何度も何度も、気が遠くなるほどサイコロを振りました。

勝つたり負けたりを繰り返し、しかし決着はいつまで経つてもつきません。

やがて、神々はサイコロだけでは飽きてきました。

そこで神々は、駒と駒を置く盤として、さまざまな者たちと彼らの世界をつくりました。

彼らは冒険をし、時に勝ち、時に負け、そして死んでいきます。

さまざまな劇を見せてくれる彼らを、神々は大いに楽しみ、深く愛しました。

もつと楽しみたい。もつと多くの活躍が見たい。

そんな思いを胸に抱きながら、神々は毎日毎日、サイコロを振り続けました。

そして本日もまた、盤上の劇を楽しむべく、神々は骰子を振るいます。

カラソコロン、カラソコロンと。

軽やかな音色を刻みながら、ころころと回る四角に記された出目には神々が祈る様子は、見様によつては何とも奇妙に思えるでしょう。でも仕方がありません。神々とて万能ではなく、彼らの力をもつてしても、骰子の出目を操ることは叶わないのです。

そうして白の四角が動きを止め、現れた出目によつて神々の反応は変わり、1人は歓喜し、また1人は悔しげに拳を叩きつけます。

そんな彼らのもとに本日、とある神が現れました。

その神もまた、他の神々同様、劇や遊戯が大好きでした。

自分で楽しむのもそうですが、しかし彼は、それ以上に自らの手で創り、それを誰かにやらせることにこそ喜びを見出す神でもあります。た。

彼は言いました。私も遊びに加えてくれと。

他の神々は言いました。いいよ、一緒にやろうと。

申し出を快く承諾した神々は、その神を招き寄せて盤上のもとに就かせると、まず始めに骰子を渡し、自分の駒を何にするのかと尋ねました。

只人か、森人か、圃人か、鉱人か、それとも蜥蜴人か。変わつたところでは蟲人という選択肢もある。

他にも様々な種族があると教える神々ですが、しかしその神は、既に自分の答えを決めていました。

“いや、私はやはり、いつでもどこでも『人間』がいいな”

『只人』ではなく『人間』と口にしたその神に、他の神々は怪訝そう

に首を傾げました。

人間？ それは只人だろう。それならさつき教えてあげたではないか、と。

どうして言い直したのか。一体何の違いがあるのか、と。

抱いた疑問は数あれど、それよりも遊戯に対する期待と興奮が勝つたのか、神々は深くは問うことなく、早く回せと彼を急かし始めた。

神々は退屈で、だからこそ自分たちを楽しませてくれる劇ドラマとお話ストーリーを求めていました。

ならばこそ、求めるものがいるのなら、それに応えるのが己であると。

そんな言葉を口にしながら、その神は骰子を掌中にて握りしめ、それを盤上へと放りました。

導き出された出目はいざれであつたのか。

その結果の詳細はともかく、彼の骰子ダイス振りにより、この『四方世界』

という盤上に解き放たれた駒は全部で4つ。

置かれた4つの駒を見つめて、その神は他の神々が談笑するなか、密かに笑んでこの先紡ストーリーがであろう物語を想像しました。

その神の名は——《から》と言いました。

「——GYAORAAAAAAAHAAAAAツ!!」

天地を震わさんばかりの絶叫が轟響する。

厚い厚い、積み重ねられた灰色の雲に覆われた空。

不吉を思つて止まない天の在り様を示すように、地上の一部では、今まさに極少の地獄が顕現を果たしていた。

山内のあちこちを侵す猛毒。積み上げられた髑髏の山。朽ちた無数の武具たち。そしてそこには似つかわしくない、眩い金銀財宝の数々。

天を衝かんばかりにそびえ立つ巨山の頂、そこに穿たれた大穴の中は、まさしく最後の試練の間。

神に選ばれた者たちにのみ踏み入ることの赦されるその場に君臨するのは、巨大な体躯を誇る紫黒の邪竜。

巨岩を連ねて形を成したが如き巨躯より伸びるのは、蛇の目を持つ悪貌の三頭。

絶えず漏れ出る毒の煙が万物を侵して殺戮し、遮るもの一切を蝕み滅ぼす大惡。

『ア強きを窮めたる邪惡』——世界を救うと約束された勇者こそが相手すべき邪惡なる巨竜。

歴戦の猛者が束となり、千万の数を揃えて向かおうとも倒せぬであろう邪惡の具現と相対するのは、たつた4つの人影。

「——ぜえああああああッ!!」

猛々しい裂帛を伴つて、勇ましく前へ進み出たのは1人の騎士。鍛えあげられた長躯すらも上回る巨大な大剣を苦も無く持ち上げ、竜の身に叩きつけんと振り下ろす。

ギイン——！　鳴り響く甲高い音色は、挑戦者たちにとつて不吉を示す鐘の音か。

紫色の滲んだ黒の外殻は傷1つついてはおらず、その愚かさを嘲笑うように巨竜の尻尾が地を薙ぎ払う。

「ムウン——ツ!!」

極太の鞭の如く、迫る竜尾の一撃を防いだのは、巨岩と熔鉄でできた壁であつた。

否——それは壁ではなく、盾だ。

壁と見紛うほどに重厚な、重量感溢れる大盾が2つ、繰り出された巨竜の一薙ぎを迎える防いだのだ。

「つ、すまぬ！」

「構わん。それよりも……！」

「GYAOOOOOOOOHツ!!」

鬱陶しい蟻を潰すことができぬのみならず、もう1匹が自慢の一撃を防いでみせたことに、巨竜は確たる怒りを覚えた。

矮小な存在どもが、何故に抗うか。速やかに滅ぼされ、我が視界から失せるがいい！ ……と。

そんな言葉を視線に含ませながら、巨竜の顎の1つが大きく開かれる。

口奥にて渦巻くのは、黒紫の煙——毒煙。

万物一切を蝕殺する劇毒の息吹ブレスを直に浴びれば、堪らず死ぬであろう。

勿論、毒の効果を差し引いたとしても息吹そのものの威力も相当なもので、それだけでも彼らを殺すに足りていた。

——だからこそ、それを阻止せんと彼らが動くのは必然であつた。

「そら——よオツ!!」

吹き通る一陣の風の如き迅速を以て黒影が走る。

纏う血払いの短外套をなびかせ、目深に被つた枯れ羽帽子の下で双眸を鈍く輝かせた後、その人物は左手に携えたモノ——巨大な鉄の筒とも称すべき代物『大砲』から、巨大な鉄の弾丸を撃ち放った。

轟——ツ!!

毒煙で満たされた大顎の中で砲弾が爆ぜると、その爆発に引っ張られるようにして毒煙も炎と変じて燃え上がり、巨竜の頭が1つを炎に包ませた。

「今だ——ツ！」

「——承知」

燃え上がる竜頭の様を見つめつつ、黒外套の人物が叫んだ直後、また1つ別の風が戦場を駆け抜け、竜頭と胴体を繋ぐ首の直上へと現れた。

「覚悟……！」

斬——ツ！

振り下ろされた一閃のもと、燃え上がる巨竜の一首が斬断される。氣色の悪い色合いの血が溢れ、切断と共に際に生じた激痛を感じてか、巨竜は先とは異なる絶叫を上げてのたうち回り始めた。

どすんっ、がごんっと鈍く巨大な音を立てて、戦場である山頂広間全体が揺れる。

ようやく一首、と自分たちの挙げた成果に喜ぶ暇はなく、苦悶に転げまわる巨竜の光景を見つめながら、4人は思い思いの言葉を口にしていく。

「ようやく一首か。……しかし、やはりと言うべきか、たつた1つでは死ぬのか。アレは」

「この近辺に伝わる伝承が真実なら、あの竜は不死性を有していることだ。

もしかすれば首3つとも切り落としても死なぬ可能性すらあるのだ、1つだけでは到底足らぬだろうよ」

「では何だ。首全てを落とした上で、腹の中から爆殺でもするか、貴公？」

「相手は不死なる竜……竜とは、この世の理の埒外にある存在なれば、それを以ても屠れるかどうか」

嘴兜の騎士が呟き、蒼外套の上級騎士が選択肢と可能性を説く。続くように枯れ羽帽子の異邦人が、己の考える最適な打倒法を冗談気に語り。

そして最後に、孤狼の如き暗殺者が異邦人の案を遠回しに否定する。

こうしている間にも、巨竜の体は回復が進み、また再び戦闘状態となつて彼らへと襲い掛かるだろう。

それまでの間に、どうにかして打倒法を見つけ出し、それを完了できるよう策を練らねばならない。

「……お主ら。1つ、俺の案を聞いてはくれぬか」

不意に突然、そんな言葉を吐いたのは孤狼の如き暗殺者。視線は未だ巨竜にこそ注いでいるものの、その頭蓋の中では既に、巨竜打倒の法が1つ完成していた。

問題はそれが、果たして通用するかどうか。

不死性を貫く手段が、もしあの竜の持つ不死性に対しても効果を発揮しなかつた場合、その時は今度こそ一党壊滅の瞬間だ。

故に、これは一種の賭けだ。

確実な勝利を約束されない、実に不安定な勝敗を決する道のり。

その手段と過程を暗殺者の口より聞くと、しかし三者は僅かな時を置いた後すぐに肯定し、それぞれの役割へと移った。

「GYORRRRRRAAA!!」

自身を苛んでいた苦痛が和らぎ、あるいは慣れたのか、巨竜の体躯が再び体勢を整え、起き上がる。

怒りを超えて憤怒と化した激情の炎を胸中に渦巻かせ、絶大な殺意をもつて己に弓引いた敵対者どもを殲滅せんと首を伸ばし、

先程以上の裂帛と共に、今度は白い大剣を振りかぶつた嘴兜の騎士が迫る。

大上段より振り下ろされた白の大剣の一撃は、ただそれだけで先程はびくともしなかつた竜の外殻を容易く砕き、その身を覆つていた魔性ごと拭い消した。

「またた——ツ！」

体の一部たる外殻を破壊され、さらには膨大なる聖性が肌身を通して浸透していく感覺を味わいながら悲鳴を上げる。

上級騎士が追い打ちをかけるべく行動する。

出したのは、雷を帯びた二振りの槍。

ただひたすらに鋤利さと貫通性を追求した十字槍を先に突き立て  
そこへ続けて重さと刃の幅広さに秀でた剣槍を残つた右の竜頭へと  
叩き込む。

竜狩りの武器で固定され、これで残る竜頭はあと1つとなつたところで、ようやく巨竜の方も自身の状態の危うさに気づいたらしく、最後の竜頭を開き、その口奥から例の毒煙息吹を吐き出そうとする。

「セせるものか……」

無論、そんな行動を許す彼らではない。

最後の竜頭が息吹を吐き出しにかかるなどお見通し。

先とは異なる銃火器——束ねられた数本の砲身を持つ『ガトリング銃』を巨竜の左目へ向けて連射し、百を超える弾丸の連撃で以てその左目を撃ち潰した。

「G Y A O O O O O O O O O O O O O O O O H ツ!!?」

さらなる激痛と屈辱からくる、怒りと苦悶の咆哮が轟く。

三頭あるうちの二頭を押さえられ、残る一頭からも片目を奪われたとなれば、その怒りが頂点に達するには充分過ぎた。

こうなればもはや、後先など考えてはいられない。

築き上げたこの巣も、侵入者どもより奪い取召し上げたた宝物も無と消えるが、それでも自身の誇りと生存には変えられない。

自身の不死性すらも忘れかけるほどに、思考が飛んでしまつている巨竜は最後の毒煙息吹を吐き出さんと再び大口を開き、空へ飛ばんと双翼を広げて頭を上げ、

その瞬間——巨竜の頭蓋を、一振りの大太刀やいばが貫いた。

「G —— G A O O O O O O O A A A A A A A H ツ!!?」

これまでの痛みとは比較にならない、弩級の激痛が脳天より生じた。

否、痛みを感じるのは脳天のみに非ず。脳天を通して首を、四肢を、尾を、そして心臓に至る身体全てが痛みに苛まれ、悲鳴を上げている。まるで己の存在を成り立たせる根本、それそのものが無くなりかけていくような感覚が生まれ、初めて知るその感覚に、邪惡なる巨竜は

初めて恐怖を抱いた。

「不死なるもの——此処に成敗いたす……！」

脳天から首へ。

首から胴体へ。

そして胴体を抜け、尾の先へと大太刀の刃を滑らせ、その全てを切り裂いていく。

不死を殺す大太刀の切り裂きは、骨肉のみならず、その身の芯にまで根付いた不死性すらも両断し得る。

故に『不死斬り』——死なずの身を得た不死者たちを斬る大太刀の一撃のもと、不死なる邪竜はここに絶え、その巨大な骸を山頂の広間に晒した。

\*

亡びた大国より出でし魔性を殺す者——『デーモンスレイヤー』  
火の終わりを見届け、闇の時代を拓いた救世主——『灰の英雄』

終わらぬ悪夢を終わらせるべく、遙か宙の狂気に挑んだ狩人——

『獣狩り』

主君が抱える死なずの呪いを断つべく、その生を捧げた孤高の忍び  
——『隻狼』

彼らの間に繋がりはなく、その生涯の中で誰一人、ただの1度も見えたことはない。

ただ数奇なことか。彼らは共に、多くの共通点を抱いている。

眞の意味での死を得られず、望まぬ運命に翻弄され、苦難を強いられた者たち。

繋がりはなくとも、共に通ずるものはある。

そして彼らを『そう在るべし』と断じ、創造した者こそが“彼”で

あつた。

再び語ろう。かの神の名は『から』。

苦難を布き、未知を供し、暗闇を与える一柱の神。

己ではなく、己が創りしものに携わる者たちにこそ、  
す資格があると断じた神。

時に死を、時に狂樂を。

時に惡意を、時に謎を提供する——異界の神である。

物語シナリオを生み出

## 18. 霧の先にあるもの

ざつ、ざつ、ざつ、ざつ——。

規則正しい軍靴の音色を響かせながら、その軍勢は前へ前へと進軍していた。

纏う鎧も、佩いた刀剣や携えた槍、他にも盾や弩などと。備えた武具の数々は、どれも数打ちの品だが、それでもその類の中においては、相当に優れた性能を有していた。

國軍——王都より派遣された軍勢は、数にして千はくだらない。大軍勢とまではいかずとも、間違いなく大多数と称すべき兵力を背にしつつ、角付き兜の犬頭の口から感嘆の声が漏れた。

「異常事態つてのと、先に出た偵察隊が戻つてこなかつた事實もあつてとはいえ、ここまでの大人数を出すとはね。

流石は陛下、出すべき時を心得てやがる」

とはいえ、正体不明、完全未知の存在を相手に大戦力を投入するわけにはいかなかつた。

可能であれば、さらに大人数の軍勢を派遣し、徹底的に殲滅することを望んでいたそうだが、先の偵察隊の例もあり、無駄に数を増やして送り込んでも無駄に死者を増やすだけとも考えたのだ。

ならばこそ、数はある程度揃えた上で、国王は優れた猛者たちを行させることを決意した。

即ち、金等級——國家レベルの難事を任される資格を持つ、文字通りの歴戦の冒険者たちを共に向かわせたのだ。

この角付き兜、大人冒険者もその1人であり、数日前の王都での臨時会議に参加していた1人でもあつた。

「銅が10人に銀が8人、そして金等級の俺たち2人……千人の兵士もいるとはいえ、こいつは中々に思い切った面子だ。あんたもそう思うだろう?」

「……」

今回の討伐遠征に属する兵士、冒險者たちの姿を見渡しながら尋ねる犬人冒險者の間に、だが彼は何の言葉も発することはなかつた。

鳥の如き嘴兜。武骨な鉄鎧。

腰に佩いた長剣と、左手に携えた黄龍紋の騎士盾。

普段とは異なり、騎士盾を既に手で構え持つてゐるのは、それ程に彼の警戒心が高いことの表われなのか。

もう1人の金等級——故あつて現在は銀等級に落ちてゐるが、かつて王都の守護を担つた人物『デモンスレイヤー』は、今回の仲間の言葉にすら耳を傾けることなく、ただ1人で周囲へ強い警戒を布いていた。

「だんまりかよ。まあ、あんたはこの行軍が始まつて以降、ほとんど口を開かなかつたからな」

とはいゝ、流石にここに至るまでその沈黙が続くとは犬人冒險者も考へてはいなかつたらしく、最初は仕方ないと思つていたそれも、徐々に疑問の方が膨らんでいつた。

「何があつたんだよ、あの時。あの臨時会議の際、色のない霧やら動く巨塔やらだのの言葉が出てきた辺りから、あんた様子がおかしいぜ？」

「……」

犬人冒險者の問いかけは、虚しく空に溶けるのみだつた。

今や首魁たる魔神王は勇者に討たれ、半ば崩れつつあるとはいゝ混沌の勢力、その中枢を担うとも言える魔神族<sup>デーモン</sup>。

恐るべき魔性の怪物どもこそを標的と定め、その悉くを討ち果たして英雄と讃えられた人物は、只々沈黙<sup>しちくかな</sup>したままであつた。

その反応にこれ以上の追及は無意味と悟つてか、犬人も視線を前方

へと戻し、その歩みを一層速めて前へと進んだ。

愛想も何もない、数少ない同位階の冒險者どうりようと思われたのは、決してよろしいことでなかつたが、それすらも些事と切り捨てるほどに今のデモンスレイヤーは、件の霧を警戒していたのだ。

（色のない霧……そして動く巨塔……）

最後の目撃者とやらより得た情報。

白く、しかし中身の見えぬ奇妙な霧の中を、巨塔の如き大物が進歩していたという話。

詳細については分からず、結局判明しているのはこの二点のみであるが、それだけでも彼にとつては充分過ぎた。

そこに何がいるのか、それを想像に必要な要素も。

そして普段には見せない、異常とも思える警戒心を抱かせるだけの恐怖も。

まだ道は遠く、これだけの大人数では件の霧があるという北方へ着くにはまだまだ時間が掛かりそうだ。

まず始めに、この西方辺境の地を抜け、そこから北東の方角を進む形で北方へと向かえば――

「――全兵、止まれ！」

後方で国軍指揮官のうち、その最高責任者らしき壮年の騎士の声が響く。

何かあつたのかと、此度の討伐遠征に参加した兵士たちの間で小さな不安が生まれていく。

冒險者たちもそれは同じく、しかし彼らは長年の経験と習慣からすぐ視線を壯年騎士から前方へと戻し、その目をよく凝らして先を見つめた。

そして——ソレは現れた。

「——ツ！」

最初にそれを視認したのは、デモンスレイヤーだった。

広大な平野の先、そこに立ち並ぶ木々の数々。

その青々しい大森林を呑み込むように、大海より迫りきたる津波の如くやつてきた——淡い白。

薄ら白い、けれども色を認めさせぬ奇妙な透明の霧。

透き通る白とでもいうべきその霧は、しかしその透明さとは裏腹に、その先にあるだろう景色を一切映してはいなかつた。  
もしもその霧に名を名付けるのなら、そう——

「——色のない、霧……！」

——色のない霧

かつて、とある大国を滅亡へと追いやつた古き獣。

この世ならざる大魔性がまどろみより目覚めた際、共に生じた魔霧。

数多の英雄賢者が、その内に潜む怪物たちが持つ『無謬の力』を求め、裂け目より入り、挑んで行つたが、誰一人として帰ることはなかつた。

そして今、その色を持たぬ魔霧がこちらへと向かつて来ている——！

「……つ！ 貴公ら——！」

此度の遠征軍、その中において唯一その脅威を知るデモンスレイヤーが叫びを上げる。

魔性殺しと讃えられた男の声はしかし、兵士や冒険者たちの耳に届

くよりも先に、迫る魔霧に呑み込まれ。

そして間もなく——遠征軍の姿はその場から消え去った。

\*

「

無色の魔霧に呑み込まれる時、その身を確たる魔性の気が駆け走つていく感覺を味わつた。

間違いなく、この霧はある国の、北の大國ボーレタリアのものと同一のものである。

多くの謎を今だに孕んだそれは、人の學術で語るには未だ及ばず、故に単なる霧とこの魔霧を分けるには、思考力よりも優れた感覺が必要であつた。

そして魔霧が失せていく感覺を覚え、同時に視界に色が戻りつつあるのを感じながら双眸を凝らして見据えると、

そこには、あり得ざる光景が広がつていた。

「……これは」

「おいおい、どういうこつたよ。こいつは……」

傍らと後方にて驚愕を孕む声が聞こえたが、それも無理はない。山々の上に布く形で築かれた長石廊と物見砦。

その先にそびえ立つ、堅牢極まる大砦。

先程まで、自分たちがいた場所とは全く異なる、まるで『転移』か『幻想』の魔法でも使われたかのような景色の一変。

けれども彼らの思考とは真逆に、この光景は偽りなく現実であり、触れば確かに石の硬さ、そして戦中ゆえの荒ぶる空気が感じられる。

困惑する遠征軍。驚愕を隠し切れない指揮官、兵士、そして冒険者たち。

だがしかし、その中でも一際驚愕を表わし、動搖を隠し切れぬ者がいた——デモンスレイヤーであった、

「……馬鹿なツ！」

あり得ない——そう叫ばずにはいられなかつた。

他の者たちは、光景の一変から驚愕しているのだろうが、彼の驚きの理由は異なつていた。

彼は知つていた。この光景を、この空気を、この場所の名を。敵の姿は見当たらず、かつてとは異なり長石廊は無人であるが、その姿形は以前とまるで変わらない。

悪夢か、あるいは神々のいたずらか。

もしもこの場がかつてと同じものならば、次にやつてくる災厄は1つ。

—GYAOOOOOOOORGツ!!

『ツ!?

不意に轟く咆哮に、千人の兵たちが一斉にそちらを振り向く。

戦の香りが漂う曇天、灰色の空を舞う紅の流星。

やがてソレは近づき、その偉容を徐々に彼らの視界に明確化させていき、再びの咆哮と共に——炎<sup>死</sup>が放たれた。

「ひイ——がああああああああああああああつ!!」

まず最初に炎の餌食となつた兵士が、悲痛な断末魔を上げて炭と化す。

生きながらに炎に灼かれ、灼熱を味わいながら死ぬという様は、他の兵士たちに恐怖を伝播させ、その周囲にいた兵士たちも同様、红星の炎に灼かれて死んでいった。

たが炎による焼死などはこれより始まる殺戮場においての前座に過ぎなかつた。

先と同じく顎を開き、

言葉にすれば何とも簡素だが、現実でのそれは凄惨さを増させる至極の凶器。

すらりと並ぶ剣の如き牙の羅列は  
食んだ兵士の体をたちまち刻んで肉塊と変える。

生きながらに焼かれる死の次は 生きながらに喰われて肉塊と変えられる死。

命も果たせぬまま、惨死を遂げて逝く。

神は大きく削られ、正常な判断ができなくなつていく。

たまま、再び大口を開けて咆哮を上げた。

赤い飛竜の咆哮と、その際に開かれた顎の中身を見せつけられて、兵士の1人が溜め込んだ恐怖を爆発させた。

それからどうなつたのかは言うまでもないだろう。

爆発した1人の兵士の恐怖は、周囲の兵士に伝播して、最初に拡散

された恐怖と混ざり合わさることで、遠征軍を恐慌状態と化させた。

逃げる、逃げる、逃げ惑う。

逃げて、逃げて、逃げ続ける。

灼き殺されたくないという、怯え。

食い殺されたくないという、懇願。

前を進むものは先へ先へと突き進み、後ろから進むものは前の兵士を踏み越えてでも逃げんと必死だつた。

「おつ、怯えるな！　怯えるでない！」

その言葉は、逃げ惑う兵士たちへと向けられたものか、はたまた恐怖に震える己が身体へと放たれたものなのか。

指揮官たる壮年騎士の叫びは響くも、既に兵士たちの耳がそれを拾うことではなく。

逆にその声に反応した赤の飛竜が、その鎌首をもたげてから軽く跳躍。

紅の巨躯が再び石廊を揺らし、鳥の啄みのように大口を開けて、ずらりと並んだ無数の牙で壮年騎士を絡め取り——咀嚼。

断末魔もあげる間さえなかつたことへの不幸を哀れむべきなのか。もしくは、最期のその瞬間まで情けなさを晒すことなく戦士として散つたことを湛えるべきなのか。

どちらであれ、死んでしまつたことに変わりはなく、そして指揮官を失つたことで一層兵士たちの恐怖を増し、決して広くはない石廊を我先にと進んでいく。

千人にも及ぶ兵士たちが、味方を犠牲にしてでも路の先へと進んでいく様は、何とも醜悪なものか。

時に1人が路より溢れ、深い山々の間へと落ちて消え去り。

時に1人が、再び飛来した赤い飛竜の炎に灼かれ、他の兵士たちと共に黒炭と消える。

「チツ、兵たちが……これじやあ何のために軍を編成して、ここまで

やつて来たつてんだよ！」

飛竜の猛攻を避け、他の冒険者たちと共に石廊の先を進んでいく大人冒険者。

流石に金等級の名は伊達ではなく、この混乱した状況の只中にいて、己のみならず、仲間も誰1人として欠けさせてはいなかつた。

(……妙だ)

だが一方、デモンスレイヤーはただ1人、奇妙な違和感に囚われていた。

兵や冒険者たち同様、彼もこの石廊の先を走り抜けているのだが、その思考は最初こそ動搖により正常さを失っていたが、今は冷静さを取り戻し、平時と変わらぬ状態に戻っている。

故に、その思考がもたらした違和感は正しく、かつて彼が通つたこの道と、今この状況の相違点を明らかとしていた。

「……兵士が、敵影がただ1つとして存在していない」

かつてこの場所——ボーレタリア王城の石廊には、飛竜の他にも敵が存在していた。

剣兵や槍兵、弩兵、最奥には騎士たちの姿もあり、それぞれが確たる敵意を抱いて、デモンスレイヤーを迎撃つたのだ。

だが今はどうだ。騎士や一般兵はおろか、奴隸1人すらも見当たらぬほどの無人ではないか。

本当にこの場がかつてと同じ在り様を再現しているというのなら、奴らの姿がないのはおかしい。

何がある——そう考えながら先へと進み、やがて大砦入口へと到達した彼の視界にあるものが映り込む。

それはやはり、かつてと同じもの。白く、色のない、埒外の力で歪んだ魔霧の門。

その先へ待ち受けるのはさらなる苦難。人の身では打倒することは叶わない、真なる厄災の具現者たち。

そこへ押し寄せる無数の兵士たちの姿を見た瞬間、彼はようやく、この石廊が何故無人とされていたのか、その真実へと至つた。

「……止まれ——その門を潜るなあッ!!」

嘴兜の内側より、腹底からの叫びを上げて呼び止めるも既に遅く。霧の門を潜り、数十人の兵士がその先の広場へと出た瞬間。続く兵士たちの前で、赤い華が咲き乱れた。

「な——ッ」

数十人の兵士たちをまとめて潰し、血塗れの肉塊と変えたのは、巨大な鉄壁。

否——それは鉄壁の如き盾だ。あまりにも巨大な、巨大に過ぎる城壁の如き大盾だ。

血で汚れた大盾が持ち上がり、そこでようやく盾から視線が離れ、その盾の持ち手の方へと向けられた。

巨大にして武骨、その2つしか思い浮かばぬほどの重厚な体躯。右手に携えたるは、剣と槍を混ぜ合わせたかの如き得物——剣槍。

左手に携えたるは、先に用いられた城壁の如き得物——大盾。巨塔の如き巨躯を持ち、圧倒的存在感を以て軍勢えさを待ち構えていた

者の名は——

## 19. 塔の騎士

そびえ立つ鋼の偉容。  
重厚な鎧に身を包み、銳利なる剣槍と巨壁が如き大盾を携えた巨  
躯。

巨人、と一見した者はそう呼ぶのかもしれないが、その正体は、本  
性は巨人のそれではなく、比にも非ず。  
其は古き獣より遣わされし眷属。

今は亡き異界の北の大國、偉大にして愚かなる王に仕えし三英雄が  
一角。その姿と恐怖を基に定め、かの騎士の力を獲得した英雄の似  
姿。

### ——塔の騎士

「……やはりか……！」

扉の先、色のない霧を抜けた先に待ち構えていた鋼の巨騎士。

大盾による圧潰で多くの兵士たちが命を散らし、その血と臓物を赤  
い華と変えて消失した。

惨たらしい死は、ただそれだけで敵対者に対する精神的圧をかけ  
る。

味方の死を目の前にした兵士たちの怯えは頂点に達し、まとめる者  
がいない現状、後の展開が悪しきものへと変わるのは火を見るよりも  
明らかだ。

「ひイ——ひああああああああああああッ!!」

1人の兵士の悲鳴を引き金に、討伐軍の兵士たちが一斉に逃げ惑い  
始める。

溜め込まれた恐れが爆発し、我慢に我慢を重ねた末のそれは、もは  
や力づくで押さえたところで治ることは叶わない。

懸命に、文字通り命を懸けての逃走を図る兵士たちを、だが塔の騎士が見逃すはずはなかつた。

『——ツ！』

声にならない鋼の咆哮を上げ、右手の剣槍を大振りに薙ぎ払う。振るわれた剣槍は鉄柱に等しく、その鋭利な刃と強固な柄で以て兵士たちを斬殺し、殴殺し、さらなる死者を生み出した。

元より人の足で逃げ出しても、巨人の猛襲から逃れる術はなし。四方を城壁に囲まれ、例え壁の上へと登らんとしても、その前に剣槍の刃が届くのが先だ。

だからと言つて、指揮官を欠き、恐慌状態にある彼らに巨騎士を倒せる可能性は皆無も同然。

故にこの場は既に戦場ではなく、行われるのは戦いではなく、一方的な殺戮である。

そう——彼らを除いては。

「——シャアツ！」

鋭利な劍撃が奔る。

獸の牙が如き一撃は、しかし巨騎士の鎧を貫くには足りず、火花を散らして弾かれた。

それでも仕掛け手——金等級の大人冒険者は戦意を欠くことはなく、烈火を思わせる灼熱を双眸に漲らせ、鋭い犬歯を剥き出し、威嚇の唸りを上げていた。

「つ……硬さは見掛け倒しつてわけじやねえか」

『——』

ズン——ツ！

大地を揺らす一踏みの後、剣槍の一撃が叩きつけられる。

城壁の一部すらも碎き、直線上に存在する総てを破壊する一撃。けれども、大人冒険者はまだ生きていた。

否——生きていたのは彼だけではない。

大振りな一撃の後に生じた隙を見逃すまいと、生き残つていた冒険者たち全員が一齊に飛びかかり、各々の得物を振るう。

剣、槍、短刀、槌、斧——。

魔法による狙撃も加わり、第一線級の冒険者たちによる総攻撃は苛烈を極め、実に徹底的だった。

その証拠に、それまで圧倒的優位の姿勢を崩さずにいた塔の騎士が攻めに転ぜず、その巨体を揺らがせていた。

しかし——

「な——」

そこまでだつた。

揺らいだ巨体はすぐさま持ち直し、重厚な存在感と共に盾の打ちつけが大地を揺らす。

冒険者にとって、向かう場所はいつだつて未踏の地だ。

それが例え、過去の依頼で向かつたことがある場所だとしても、時を経て僅かながらに変化していることもある。

それでも、戦場となる場を把握し、相手がどのような攻撃をしてきた場合、どうその場の特徴を利用すれば凌げるのか。それを考えるのも一流の冒険者たる者の必要要素だ。

だがその時、彼らはそれができなかつた。それはその戦場——城内広場という開けた、城壁以外に何も障害物がないという場であつたこともそうだが、塔の騎士が放つ威圧が、彼らに余計な回避をさせなかつたのが最大の理由であつた。

揺れによつて立つことすらもままならなくなり、完全にその場に縛り付けられた彼らの隙を見逃さず、塔の騎士はその手に握つた剣槍を横薙ぎに振るう。

「ぎやあああああああああ——ツ!」

断末魔の叫びが轟く。

血潮を噴き出し、鮮血の雨を降らせて、歴戦の冒険者たちが肉塊へと変じていく。

全滅にこそ至らなかつたものの、その数は、今の一撃で半数以下にまで減らされた。

総掛かりで攻撃したにも関わらず、傷一つつかない鉄壁の防御。そしてその巨体を活かした、重量任せの苛烈な攻め。

勝てるわけがない。生きて帰れる気がしない。

攻と防、その双方を以て己と冒険者たちとの間にある絶対的な力の差を示した塔の騎士は、その絶望こそを待っていたのだ。

そうして、血塗れの剣槍を振りかぶり、今度こそ全員叩き潰さんと右腕を隆起させ、力の限りにそれを振り下ろし、

「——ぜえあああツ!!」

突如割り込んだ嘴兜の冒険者の手によつて、塔の騎士の振り下ろしは逸らされた。

重厚な盾で武装し、その頑丈さに任せた突進は塔の騎士の一撃を間一髪のところで逸らし、冒険者たちの代わりに城内広場の床を叩き割らせた。

「デモンスレイヤー……！」

「……っ！」

『——』

己の一撃を逸らした相手の存在に驚く塔の騎士。

だが、驚愕は一瞬であり、すぐさま騎士は一撃を放つべく剣槍を握り直し、今度は突きの放つべく腕を後方へと引いた。

塔の騎士の一撃は強力だ。だが、その巨躯と威圧に惑わされ、皆は

気づいていないのだ。

唯一、彼との交戦と討伐経験があるデモンスレイヤーは、すぐさま体勢を整え直すと、呆けている他の銀、銅等級冒険者たちへ怒鳴るように指示を出した。

「奴の踵を狙え！ 鎧と巨躯ゆえ、奴は動きが鈍重だ。その体重を支える足を突けば、必ず転げて体勢を崩せる！」

「あ……」

「早くやれ！」

デモンスレイヤーが叫んでいる間に、塔の騎士が剣槍の突きを放ち、彼に攻め掛かる。

それを大盾で何とか凌ぐも、あれほどの巨躯から放たれる一撃だ。そう長くは持たない。

その光景を目にしつつ、先程の叫声を聞いていた大人冒険者は剣を握り直し、反対側の方角——ちょうど塔の騎士の踵近くの場所から、冒険者たちへ向けて叫んだ。

「デモンスレイヤーの指示に従え！ 今はとにかく、こいつの動きを止めることだけを考えろ！」

金等級の大人冒険者の言葉による後押しもあり、ようやく冒険者たちは行動を開始し、それぞれの武器を手に、塔の騎士の踵目がけて駆けだした。

『——』

「貴様の相手はこちらだ！」

大盾を床に打ち立て、ソウルより取り出した粗鉄の巨鎧<sup>ブランムード</sup>で武装し、高らかに吼え立てる。

直後、構えた大盾へと剣槍の一撃が叩き込まれる。

大上段からの一撃は凄まじく、全靈を賭した防御であつたにも関わらず衝撃はデモンスレイヤーの身を駆け巡り、彼を通じて大地に伝わり、石床を破碎する。

「ぐウ……ッ！」

嘴兜の中でもぐもつた声を上げるも、彼は決して倒れなかつた。

剣槍の一撃の重みから察するに、塔の騎士の意識の大部分はデモンスレイヤーへと向けられている。

かの大魔<sup>デーモン</sup>の意識が自分に割けられている間のみ、大人冒險者たちの安全は確保され、彼らは踵への攻撃に集中できる。

要は簡単な心理戦と我慢比べだ。

デモンスレイヤーが最後まで耐え切り、足を崩すまで塔の騎士の意識を引き付けられるか。

塔の騎士がデモンスレイヤーを叩き潰し、あるいは彼の企みにどれだけ早く気付けるか。

一対多による戦闘ではまず勝ち目はないが、一騎討ち、あるいは逆の戦闘図であれば分は自分たちの側にある。

“このまま奴の意識を縫い止める——！”

無言の決意を胸に、再び振り下ろされた剣槍を今度は横に避け、大盾を手放して巨鎧を両手持ちに構え直すと、全力を込めて剣槍の穂先に大打撃を叩き込む。

一瞬塔の騎士の巨躯が震え、僅かに動きが鈍つたことを確認すると、このやり取りが有効であるとデモンスレイヤーは認知する。

防御と反撃の繰り返しを行い、一定にならぬよう時たま別の戦術を交える。

そうすればあの巨人の意識はいつまでも自分に集中し、最後の瞬間まで冒險者<sup>かわら</sup>たちは急所攻撃に徹底できる。

そろそろ受けに戻るべきと判断し、巨鎧の柄から左手を離し、放り投げた大盾を拾い上げんとその手を伸ばして——

——その瞬間、彼の左手を放たれた一矢が貫いた。

「——ツ?」

突然の奇襲と思いもよらぬ苦痛に思わず手を引っ込め、動きを止めてしまう。

長い旅の中、敵から奇襲を掛けられたことがないわけではなかつた。

寧ろ、魑魅魍魎が跋扈する混沌の領域において、意識外からの攻撃は常と言つても過言ではない。

だから警戒はしていた。だが、それも先程まではのことだつた。

「——GORB」

その時耳にした下卑た声は、酷く絶望的なものに聞こえた——。

\*

「——シャラアアアアアツ!!」

逆手に構えた双剣を、まるで己が牙の如く激烈に叩き込む犬人冒険者。

彼に続いて他の生き残りたちも踵に各々の武器を繰り出すが、硬い鎧に守られた体躯は、急所とはいえ凄まじい堅牢さを誇り、彼らの猛攻を凌いでいた。

だが、彼らの行動が決して無意味というわけではない。

一撃一撃が与える苦痛は小さくとも、それらは確実に蓄積し、やがては膨らみ切った風船のように炸裂し、敵を内側から食い破るだろう。

だから今はこれでいい。

デモンスレイヤーが奴を引き付けている間、自分たちは踵の攻撃に徹底すべきだ。

そう思い、再び双剣で巨人の急所を切りつけんと構え直したその時、犬人冒険者の鋭敏な聴覚がその鳴き声を聞き取った。

「——GORB」  
「——GORB」

1つ、2つ、3つ——水面に生じた波紋のように、その鳴き声は拡散し、それを切っ掛けに数が連続的に増していく。

そして気が付けば、声は彼らを囲うように城塞のあちこちで発せられ、大広間は地の底の地獄さながらに下卑た獣声で埋め尽くされていた。

「GORB！」  
「GORB！」  
「GORB！」

まず彼らの瞳が捉えたのは、小鬼ゴブリンたちのその装いだった。

小柄な体躯に合わせるため、引き千切る形で丈を調整された鎖帷子と革鎧。

頭部は鉄の帽子キャップで覆われ、城壁の上で仁王立つ彼らの手には、見慣れぬ武器が握られていた。

「ありやあ……」

ソレを見た犬人冒険者の目が鋭く細められた。

彼だけではない。他の何人かの冒険者もその武器も目にして、各々が反応を示していた。

機械仕掛けの弓——『弩』クロスボウ

矢を装填するのに時間と相応の筋力が要求される代わりに、それさえ何とかすれば誰にでも高い攻撃性を与えることができる武具。

出回り始めたのは数年前のことだが、人員と要求される戦力の都合上、扱っているのは基本、各国の王城などを守護する守備隊の兵士たちであり、装填にかかる手間と高い価格もあって、冒険者にはそこまで普及されなかつた代物だ。

それをあれだけの数、しかもゴブリン如きに装備させるなど正気とは思えない。

しかし、彼を指揮する指揮官のような者もいなければ、この城の主らしき高位者の姿も見えない。

となれば、元々この霧の城塞を守護する兵士たちをゴブリンたちが襲い、その装備を奪つて自分たちの物にしたと考えられるが、もしそうだとしたら奴らがこの城塞に今も留まり続けている理由が分からぬ。

(いや、今気にするべきはそこじゃねえ……!)

周りを敵で囲まれ、しかも得物は飛び道具。

いつどこからでもこちらを狙えるし、例え乱れ撃ちしても堅牢極まる塔の騎士が傷つくことはないだろうから、同士打ちも狙えない。

どうするべきかと、助けを乞うようにほぼ反射的に塔の騎士の相手をしていたデモンスレイヤーへ目を向けると、犬人冒険者は身を屈め、左手を矢で射貫かれたデモンスレイヤーの姿を視界に捉えた。

「つ？ デモンスレイヤー！」

指示されていた行動を中断し、急いで彼の下へ駆け寄る大人冒険者の前に、新たに放たれた太矢<sup>ボルト</sup>が突き立った。

「……毒付き——！？」

石床に突き立つても明確に分かるほどの、毒々しい紫色で先端を染められた太矢。

彼らが扱う矢の危険性を示すかのように放たれた一矢は、それだけで彼らの動きを一瞬止めるのには充分過ぎた。

そしてその瞬間を待つてたとばかりに塔の騎士は長大な剣槍を真横に構えると、先の討伐軍を薙ぎ払つた以上の一閃を繰り出し、その剛撃をデモンスレイヤーに喰らわせた。

「う、はあ——ッ！」

城壁に叩きつけられ、手にしていた武器も零れ落としながら彼は兜の中でも盛大に吐血する。

内臓をかき回されるような感覚に襲われ、死を目前にした懐かしさが感じられた。

この前の死は僅かながら油断もあってのことだったが、あちらはまともな生き物であり、それゆえ生者の感覚に囚われ、大きな隙を晒してくれたからまだ良かつた。

しかし、この塔の騎士は違う。

この怪物は生者でもなければ死者でもない。

生死の境が曖昧な領域に住まう者だからこそ、この世の存在の常識と感覚に囚われず、故に慢心もない。

徹底的な殺戮機構だからこそ、一度感じられた死の予感はそう容易くは覆らない。

何とか意識のある内に逃れまいと身を捩らせ、脱出せんとしたその

時。

「か——」

乾いた叫びを短く上げて、彼の意識が完全に暗闇へ閉ざされた。

嘴兜の鉄板を貫き、彼の脳髄を1本の太矢が貫いたのだ。

彼の身体が埋もれていた城壁の、その最も近くにいたゴブリン——  
ゴブリン・ショーター小鬼弩兵がやつたのだ。

げらげらと愉快気に笑う彼らの瞳は濁り、しかしそこには生者らしからぬ虚無で満ちていた。

一頻り笑うと小鬼弩兵たちはまるで人が変わったかのように静まり、元の位置へ戻ると首を上げて空を向き、やがてその凶悪な口を開けて各々が声を上げ始めた。

「A——A——A——Aツ」  
「A——A——A——Aツ」

それは、まるで合唱のようだつた。

歌と呼ぶにはあまりにも粗末であつたが、彼らの響かすがらがら声と、奏てる歌の音調も相まって、その合唱はひどく不気味で、恐怖心を異常なまでに駆り立てた。

「O——OOO——Oツ！」  
「A——A A A——Aツ！」  
「O——OOO——Oツ！」  
「A——A A A——Aツ！」

がしゃがしゃと鎖帷子を鳴らし、時に太鼓代わりに城壁へ弩を何度も叩きつけ、小鬼たちの合唱は高らかなものへと昇華していく。煽られる恐怖心に冒險者たちは次々と顔を青く染め、時を経ることに戦意を失いかけていく。

「き——聞くんじゃねえツ！　たかがゴブリンの歌だろうが！」

まるで自分に言い聞かせるように、大人冒険者は双剣を手に仲間たちへと言い放つも、大して効果は見られなかつた。

当然と言えば当然。この四方を敵で囲まれ、しかも相対するは正体不明、前代未聞の怪物たる巨躯の鎧騎士。

そして唯一、この戦いを勝利へ繋げられるかもしけなかつた金等級冒険者<sup>デモンスレイヤー</sup>は絶命し、今まさに彼らには絶望しか残されていなかつた。

「GORBツ！」

そしてその絶望を決定的なものにしようと小鬼弩兵の1匹が弩を構え、その矢先を冒険者たちの1人——大人冒険者へと向けていた。何も彼があの中で最たる実力者であると見抜いたわけではない。だが本能的に、もしくは魂喰者としての飢餓が彼を真っ先に討つべしと囁いた結果だ。

毒を塗りたくり、絶死を授ける一矢を見舞わんと狙いを定め、小鬼弩兵がその引き金を引かんとして。

『——『発火』』

彼らの知るものとは異なる詠唱の後、1つの呪文が小鬼弩兵に炸裂する。

灼熱を孕んだ文字通りの『発火』は瞬く間に小鬼の矮躯を包むと、大した時間もかかることなくそれの身を全て黒炭と変え、後には物言わぬ灰だけが残つた。

「GORBツ？」

「GOBGGツ？」

味方の突然の死と、思わず奇襲にあちこちで驚声が上がる。

混乱が広がる中、何匹かの小鬼弩兵は味方を焼き殺した犯人へ弩を向け、太矢を放たんと引き金に指を掛けたが、その一矢を放つよりも早く撃たれた別の太矢が小鬼弩兵の脳髄を鉄帽子ごと貫いた。

『化け物如きが人の真似事など、しゃらくさいわ！』

そんな怒声を死した小鬼弩兵に浴びせたのは、重厚な大鎧に身を包む大男。

小鬼たちの太矢を以てしても貫けぬであろう堅牢な鎧もそうだが、両手に携えた大弩と大剣という重武装の存在もあり、彼がどれだけ凄まじい膂力の持ち主であるのかは一目見て理解できた。

そしてもう1人、最初の弩兵を焼き殺した人物は、その大男とは真逆の印象を与える装いで身を包んでいた。

一言で表わすなら『魔女』。黒い衣に黒のとんがり帽子。

右手には触媒用の木杖を携え、暗くも理知的な瞳が他の小鬼たちを捉えていた。

『……騎士殿』

『おうとも。——おい、そこの！』

「……あ？」

自分が呼ばれていることに気づいた犬人冒険者は、一瞬体を震わせながらもすぐに意識を城壁上の騎士へ向け、彼の言葉に耳を傾けた。

『クチバシ殿を抱えてすぐに霧の壁を抜けろ！』

『クチバシって……あいつも死んでるぞ！』

『あの御仁が1度や2度の死でくたばるものか！　いいから行け！　今の状況なら逃げられる！』

「——!?」

逃げられる——何の確信があつてそう言うのかはともかく、少なくともあの2人が自分たちを罠に嵌めようという気がないことは不思議と理解できた。

それに理由は何であれ、まだデモンスレイヤーは本当の意味で死んではいないらしい。

一瞬の思考。それを経て一度大人冒険者は残りの冒険者たちに目配せすると、彼らもすぐに領き、直後その場から駆けだした。

そして城壁から抜け落ちたデモンスレイヤーの身体を拾い上げ、全力で霧の壁へ走ると騎士の言葉通り、彼らの身体は霧の壁をすり抜け行つた。

彼らが無事に霧を抜けたことを確認すると、黒衣の魔女は安堵したようには息を吐いた。

『やはり……ソウルという標を失つた以上、彼奴らがあの御仁の跡を辿ることはできぬか』

神殿を抜けたとはいえ、未だ彼の身は呪縛されている。

死すれば肉体を失い、ソウルの身体で永らえ、この現世に留まり続けている。

それは永遠の痛苦を意味すると共に、彼がこの現世の理に縛られない異端であることを示す証でもある。

『生きている限りソウルは在り続け、彼奴らの標となる。

しかし死すればソウルは失われ、けれども並みの者はそこで終わりだ』

『ならばこそ、あの者たちは幸運であつたなあ。何せ死んでも現世に在り続ける、なんて芸当が出来るのは神殿に囚われた者共ぐらいだ。

そして忌まわしいデーモン共を討つとなれば、クチバシ殿をおいて他に適任は居るまい』

ガハハハハハ——！　と巨漢騎士の豪快な笑い声が響き渡る。

しかし、その笑声に振り向く者は誰一人としてなく、獲物を見失つたゴブリンたちは身を再び城壁の内へと潜ませ、塔の騎士もその場に屈み、石像のように硬直して完全にその動きを止めた。

間もなくこの城塞を、あの色のない霧が満たすだろう。

次なる獲物が来た時のみ、またこの城塞は色を取り戻し、怪物たちは哀れな犠牲者たちのソウルを貪らんと動き出すのだ。

『だが、彼が生きていれば、きっと——』

所詮は自分たちも過去の亡靈の記録に取り込まれた付隨物。本人ではないし、この悪夢の核たる存在が討たれれば諸共に消滅するだけのもの。

それでも彼の安否を願い、怪物の打倒を願うのは、大元の彼に対する信頼と好意の念ゆえなのか。

この日、西方辺境にて王国の討伐軍が壊滅させられた。

死者は千人を超える、王国兵士、並びに指揮官各たる騎士たちも死亡。同行していた冒険者たちの半数も死に、生き延びた数人だけが霧を抜け、その脅威から逃れた。

そして彼らは霧の脅威を伝え、一刻も早い霧の怪物たちの掃討を為すべく、最寄りの都町へ向かつたという。

西方辺境最大の都市。法司る神の加護ある城塞都市——『水の都』へ。